

## 英文著作を中心に見る、岡倉天心の思想と、 それに対する国内外からの評価、また後世への影響

山越 紘子

### はじめに

岡倉天心という名を聞いた時に、読者は何を思い浮かべるであろうか。多くは美術史上に著されるフェノロサとの交流や、東京美術学校、日本美術院などにおける教育、その他インドや欧米など広域的な活動を通じた日本美術の保護・発展への貢献を思い浮かべるのではないだろうか。彼の人生は、美術に関連した活動と切り離して語ることは出来ないだろう。

他方、彼は『*The Ideals of the East*』の冒頭で記した「Asia is one」という一文、あるいは、生前には書籍として刊行されず、その没後に『東洋の覚醒』と題され邦訳されることになった原稿に登場する「アジアの兄弟姉妹たちよ!」「ヨーロッパの栄光はアジアの屈辱である!」などの文言が、太平洋戦争時のアジア侵略の正当化に用いられた人物でもある。確かに、天心が遺したそれらの言葉は、非常に強力

な語勢を持つように思われる。しかし、それらの断片的な文言から受ける印象に引きずられて彼の思想を俯瞰するのは、公平な見方とは言えないのではなからうか。

堀岡弥寿子によれば、天心は、美術に関する論文は日本語でも記しているようであるが、「生涯日本語の本を出さなかった」という<sup>(1)</sup>。生前に出版されたのは、「初めから英語で書き下ろされ、ロンドンあるいはニューヨークから出版された」『*The Ideals of the East*』<sup>(2)</sup>『*The Awakening of Japan*』<sup>(3)</sup>『*The Book of Tea*』のみであるという。もしも彼が英文著作に見られる一部の強力な文言から印象付けられるように、欧化主義に強い反感を持つ人物であり、それらの言説を日本人へ向けて説くことを意図していたならば、これらの著作が英語によって記され、彼の没後まで日本国内では出版されることがなかったことの説明がつかないだろう。英語で執筆された以上は、彼の呼び掛けの先にあったのは、日本国外の人々であったと思われる。しかしながら、「従来の研究では著作が英語で創作された理由について明確な見解を示したものは少

な」いと、金子敏也は述べている。<sup>(3)</sup>

森田義之の言葉を引用するならば、「多くの論者が異口同音に指摘しているように、近代日本の知識人のなかで岡倉天心ほど「筋縄では捉えにくく、分類・定義・評価の難しい人物もめずらしい」。「西洋の文明に対峙した挑戦的なアジア主義者・国粹主義者なのか、西洋の文化と言語に精通したコスモポリタンな文化人なのか、頑迷な伝統主義者なのか、それとも開明的な革新主義者なのか」、天心という人物は、見る人によって姿を変えてしまうが如く、多様な面を持ち合わせている。<sup>(4)</sup> そのような天心の帯びている多面性が、太平洋戦争へと向かう時代の中で、彼の著作が都合の良い形で読まれていったしまった一因でもあるだろう。故に、竹内好は、天心を「定型化をこばむものを内包している」「あつかいにくい思想家」であり「危険な思想家」であると評している。<sup>(5)</sup>

天心の生涯から、あるいはその著述から、天心の本来意図するところは何であったのかを探る試みは、多く為されてきた。本論文の目的は、それら天心の思想研究を再検証することで、天心像が折々に都合よく読み替えられた原因は何であったのかを考えることである。第一章においては、天心の生涯と英文著作に関連した交友関係を追うとともに、後世の歴史に影響を受けた先入観無しに天心の著作を受け止めているという意味では、恐らく最も素直な印象となっているだろうと思われる。英文著作出版当時の海外での評価を見て、そこから当時の天心像を考える。第二章においては、太平洋戦争へと向かう一九三〇年代からの天心研究で、何が見落とされたのかを再検証する。第三章においては、戦後、天心の著作に対してどのような解釈が為されていったのか、先行研究を追い、筆者なりに天心像の一端を明らかにし

たい。

以降、本論文においては、『*The Ideas of the East*』、『東洋の理想』、『*The Awakening of Japan*』、『日本の目覚め』、『*The Book of Tea*』、『茶の本』という邦題に置き換える。天心自身が付けた題のない未発表の英文原稿については、便宜上、最も流布している邦題であると思われる『東洋の覚醒』を採用する。また、史料引用にあたっては、旧字体を新字体に改めた。

## 第一章 岡倉天心と英文著作

### 第一節 岡倉天心の略歴と英文著作の執筆時期

岡倉天心は、文久二年二月二十六日、西暦に直すと一八六三年二月一四日に生まれたといふ。<sup>(6)</sup> 木下長宏に拠れば、平凡社版『岡倉天心全集』の年譜をはじめ、多くの本で天心は一八六二年生まれとなっており、その理由には「改暦以前に生を受けた人物」について「西暦とどう一致、あるいは対応させるか」「定見がない」ことがあるが、アメリカでの『日本の目覚め』の出版に際して、天心自身が「一八六三年に生まれ」と手紙に書いていることなどから、一八六三年を生年としているので、本論文もそれに準拠することとした。<sup>(8)</sup>

天心の生誕の場所に関しては、諸説あるようで、木下の研究に拠れば、旧福井藩士で貿易商石川屋を営む父の下、横浜で生誕したという定説の他に、東京美術学校職員によって筆記されたと思われる「東京美術学校校長 岡倉覚三／東京府平民 旧福井藩／文久二年十二月廿六日江戸馬喰町旧郡代屋敷ニ於テ生ル」という記録、また天心の知人

である高橋太華が記した「東京府平民 旧越前藩／文久二年十二月廿六日東京常盤橋内ニ於テ生ル」という記録などもあるようである<sup>(10)</sup>。しかし、西川武臣は、一八六六年の横浜の人別帳において「生国御当所 倅 覚蔵 同五歳」とあることから、後に作成された履歴書よりは、天心が生まれた直後に作成された人別帳をより確かな資料として、現段階では横浜を天心の出生地とすべきであるとしている<sup>(11)</sup>。

ただ、木下は、先に挙げた二つの履歴書で「平民」と書かれ、天心自身も自筆の履歴書で「茨城県平民 旧福井藩士」と書いていることから、従来の天心伝で強調されることの多かった、下級でも武士であるという士族意識ばかりでなく、「平民」という明治の新時代を生きる者としての天心の自負を読み取るべきであると指摘している<sup>(12)</sup>。

幼名は覚蔵、もしくは、一説によれば角蔵であるが、大学生の頃から天心自身が覚三とし、終生これを用い、現在知られている「天心」は彼の雅号の一つではあるが、生前にはあまり使われておらず、一般に「天心」の名が流布するのは、天心の没後に全集等が出されてから<sup>(13)</sup>のようである。木下は、「天心」と呼ぶこと自体が一九三〇年代に虚構化された岡倉天心像の一端であるとして、自著内では終始「岡倉」や「岡倉覚三」と呼んでいるが、本論文では、一般的な理解のし易さという便宜上、「天心」という呼び名のまま進めていきたいと思う。

天心は、幼少期から、横浜でアメリカ人宣教師のバラ兄弟などから英語を学んだようである。この点に関して、先行研究によって記述が曖昧に分かれているので、後続の研究の為に、簡単に情報を整理しておきたい。

まず、バラ兄弟の英語教育を巡る活動について、簡潔に纏めておく。兄のジェイムズ・ハミルトン・バラは、一八六一年に妻マーガレット

と共に来日した<sup>(15)</sup>。そして、ジェイムズが、一八六四年に開設された横浜英学所の教師となった一方、マーガレットはヘボン塾で、ヘボン夫人クララの代講を勤めるなどしていたという<sup>(16)</sup>。また、ジェイムズは、高島嘉右衛門が高島学校（藍榭堂）を開くと、そこで教鞭を執るとともに、自身でも一八七一年から英語と聖書を学ぶ英学塾（バラ塾）を開き、バラ塾にジェイムズを募う生徒が大勢集まった為、そちらに専念することにして、弟のジョン・クレイグ・バラをアメリカから呼び寄せ、高島学校での教鞭を譲ったようである<sup>(17)</sup>。そして、ジョンは、高島学校でジェイムズに譲られて教鞭を執ったほか、ヘボン夫妻からヘボン塾を委ねられ、こちらはバラ学校と呼ばれるようになり、その後合併や移転を経て、現在の明治学院となっている<sup>(18)</sup>。

一九三〇年代の研究を見ると、清見陸郎は、「山越注・明治」四年頃に「高島学校に入学し、ジョン・バラに就いて英語を学んだ」「一書にヘボンの開いた学校に学んだやうに書いてあるが、ジョン・バラの教鞭を取った処なら高島学校でなければならぬ」としており<sup>(19)</sup>、天心の子息である岡倉一雄氏は、天心は「九歳、十歳」の頃に「ジョン・バラの高島学校に通い」「英学の初歩を体得した」としている<sup>(20)</sup>。

また、戦後に出された宮川寅雄の著書では、「明治四年、天心十歳にあたる」頃、「横浜の米人ジョン・バラ」と「バラ夫人によって」「ヘボン塾」で英語を学んだとされているが、宮川は「ジョン・バラは、一八六一年十一月に、日本に來た宣教師」としている<sup>(21)</sup>ので、ジェイムズとジョンを明らかに混同していると思われる<sup>(22)</sup>。

近年の研究では、金子は「ジョン・バラに七歳の時点から英語を習っている」としているが、天心の曾孫に当たる岡倉登志氏は「バ

ラー塾に通い」「ジェームズ・バラに教えを受けた」としており、<sup>(23)</sup>  
森田は「七歳のときから」「アメリカ人ジェームズ・バラの経営する  
私塾などで英語の初歩を習得」したとしている。<sup>(24)</sup>

この辺りに関して、最も諸説を網羅しているのは、恐らく、平凡社  
版『岡倉天心全集』の年譜と、それに新暦換算の満年齢の記載を加え  
た小泉晋弥の研究である。それらに拠れば、天心は、一八六九年、数  
え八歳、満六歳の頃から、「ジェームズ・バラの私塾に通って英語を  
習いはじめたといわれるが」、一八七二年（明治四年）、数え十歳、満  
八歳の頃から、伊勢山下に開設された高島学校に通い、「ジェームズ  
の弟ジョン・バラ（明治五年来日）にも習ったといわれている」とい  
う。先に挙げた研究のうち、天心の英語教育の始まりを七歳としてい  
る本は、いずれも天心の生年を一八六二年としているので、それに  
拠った満年齢での記述であろう。

いずれにせよ、これらの記述を見る限り、天心の受けた英語教育に  
関する詳細は、正確には判明していないように見受けられる。

先に述べた通り、ジェームズがバラ塾を開いたのは一八七一年であ  
る。天心の学んだところが「バラ塾」ではなく「バラの私塾」と書か  
れている場合が多いのは、正式にバラ塾を立ち上げる以前から、何ら  
かの形でジェームズがマーガレットから英語教育を受けていた可能性  
を考えてのことであろう。また、高島学校の開校は一八七一年で、  
ジョンの来日は一八七二年であるから、高島学校に通うことが即ち  
ジョンに教わることを意味するわけではない。整理すると、一八七一  
年以前から天心が何らかの形で英語教育を受けていた可能性はあるが、  
高島学校もしくはバラ塾に通学したとするのは一八七一年以降でなけ  
ればならないし、ジョンから教えを受けたとするなら一八七二年以降

でなければならない。

ともあれ、天心の英語の堪能さは、この時代にルーツがあると言え  
るだろう。バラ兄弟は教派こそ異なるが共にプロテスタントの宣教師  
であったが、天心がキリスト教に改宗することはなかった。<sup>(28)</sup>この点に  
関して、登志氏は、室町時代以来蓮如の影響が強い北陸福井の土地柄、  
岡倉家も母方の濃畑家も熱心な浄土真宗の門徒であったこと、天心が、  
母の没した翌年の一八七一年から、横浜の菩提寺である浄土真宗長延  
寺に預けられていたことなどの影響を考えている。<sup>(29)</sup>

一八七三年、天心は官立東京外国語学校に入学し、一八七五年に東  
京開成学校へ入学、一八七七年の東京開成学校の合併改称により、東  
京大学文学部の学生となった。<sup>(30)</sup>学生時代の天心は、フェノロサとの出  
会いにより日本の伝統美術への関心を深めた一方、西洋文学にも親し  
んでいたという逸話が残っている。高田早苗の回想には、「我々は当  
時の大学生中自分達のみが西洋小説読みと思つて居ると、或日小川町  
辺の牛肉屋に登つて飯を食つて居ると、隣席に岡倉覚三、福富孝季の  
両君が居た。此の二人は我々よりも二学年の先輩であつて、談偶々西  
洋小説の事に及ぶと、岡倉君は頻りにヴィクトル・ユーゴーの『レ・  
ミゼラブル』の話をする。又福富君はヂューマの『モン・クリス  
ト』の話をし出した」と西洋小説に親しんでいたらしい天心の様子が  
残されている。<sup>(31)</sup>また、もつと後年の様子の回想になるが、一雄氏は、  
家族の団欒時にコナン・ドイルの探偵小説を講釈していた天心を記憶  
している。<sup>(32)</sup>

一八七九年に大岡基子と結婚、翌年に東京大学文学部を第一期生と  
して卒業した。<sup>(33)</sup>一雄氏の回想によれば、天心は、本来の卒業論文は英  
文で書いた「国家論」であったが、妻基子に痴話喧嘩でそれを焼かれ

てしまった為、急遽二週間で「美術論」を著したと語ったという。<sup>(34)</sup>

卒業後、文部省に入った天心は、初めは音楽取調掛に配属されたが、上司の伊沢修二と折り合いが悪く、翌年には専門事務局に移ることとなった。<sup>(35)</sup> 竹内は、この二者の分離には、奔放な天心と厳格で合理主義な伊沢では性状が合わなかったという問題があるばかりでなく、その後、伊沢が初代校長となった東京音楽学校が洋楽を基礎とし、天心が実質初代校長となった東京美術学校が伝統尊重の方針を採ったことを考えると、ここに日本芸術教育界における伝統と開化の対立のルーツが見られ、後の天心と洋画派との対立の背景には、伊沢の下で洋楽に一本化された音楽学校の存在、引いてはそれを支える文部省と官僚勢力の存在があるとし、天心が後に日本美術院へと独立すること、即ち反開化・反官僚の立場へと位置付けられることに繋がる遠因がこの時点で既に生まれているとしている。<sup>(36)</sup>

一八八二年から、天心は、九鬼隆一やフェノロサ、ビゲローなどと共に古社寺の視察調査を始め、また一八八六年にはフェノロサと共に欧米視察旅行に赴き、帰国した一八八七年、東京美術学校設立の幹事に任命され、一八九〇年に校長兼教授となった。<sup>(37)</sup> また一八八九年からは内閣官報局長だった高橋健三と組み月刊誌『国華』の発行を始めた<sup>(38)</sup>が、帝国博物館理事及び美術部長となっている。この帝国博物館から中国美術調査を命ぜられ、日清戦争前年の一八九三年に中国に赴いている。<sup>(39)</sup> 順調に美術官僚としての道を進んでいた天心であったが、九鬼隆一夫人波津子との恋愛事件、それに伴う九鬼との関係悪化、怪文書によるそれらの告発などもあり、一八九八年に美術学校校長を非職となる。これに連なり橋本雅邦からも辞職したことは「美術学校騒動」として世間を騒がすことになった。<sup>(40)</sup> この騒動の裏には天心を筆頭とす

る伝統絵画派の支配に対する洋画派の工作や陰謀もあると言われているが定かではない。天心の失脚を企図して怪文書を流したのは天心と不仲であった福地復一らとされているが、木下は、主謀者とされる者達が天心の抜けた後の地位に就けていないことから、そんなに組織立った追放運動ではなかったのではないかとしている。<sup>(41)</sup> 一方、登志氏は、一九〇〇年のパリ万博に出品する日本美術史の編纂主任から天心が追われ、福地が編纂活動を続けられたのは、陰謀の目的達成の一つと呼ぶには十分ではないかとしている。<sup>(42)</sup> いずれにせよ、天心とその弟子とも言うべき者達が東京美術学校を去ったことで、伝統絵画派と洋画派の争いも一つの終わりを迎えた。竹内は、これは文明開化の方針を採る明治政府の体制の安定により、文明開化と国粹の争いも終止符を打たれたのだとしている。<sup>(43)</sup> ただし、竹内は、「当時における西洋画と日本画の対立は、時勢の根底にある文明開化対国粹の一現象」として在ったが、天心にとつての国粹とは、「古人を学んで古人を越えよ」という「新しい国民芸術の創造に関するもの」であり、天心は「西洋画を学ぶことには反対はしていない」という点も指摘している。<sup>(44)</sup> 美術学校非職に先立ち帝国博物館にも辞職願を出していた天心は、これ以降、文部行政から遠のくことになる。<sup>(45)</sup> それから数ヶ月後には日本美術院を創設するが、順調であったのは当初の二年間で、財政逼迫や構成員のトラブルなどもあり経営は停滞してゆき、<sup>(46)</sup> その影響もあつてか天心は家出を企てるなどし、一九〇一年、逃避の意思を実現するようにインド旅行へと旅立つ。<sup>(47)</sup> このインド旅行の目的は、逃避の他に、仏教者としてのインド訪問と日本での宗教会議の企画、福地復一の主導で編纂された『稿本日本帝国美術略史』に対抗した美術史観の構築などにあつたという説もある。<sup>(48)</sup> いずれにせよ、この渡印が、最初の英

文著作『東洋の理想』の出版へと繋がることになる。

『東洋の理想』は「The Range of Ideals (理想の範囲)」「The Primitive Art of Japan (日本の原始芸術)」「Confucianism——Northern China (儒教、中国北部)」「Laicism and Taoism——Southern China (老子の教えと道教、中国南部)」「Buddhism and Indian Art (仏教とインド芸術)」「The Asuka Period (飛鳥時代)」「The Nara Period (奈良時代)」「The Heian Period (平安時代)」「The Fujiwara Period (藤原時代)」「The Kamakura Period (鎌倉時代)」「Asikaga Period (足利時代)」「Toyotomi and Early Tokugawa Period (豊臣時代と徳川時代初期)」「Later Tokugawa Period (徳川時代後期)」「The Meiji Period (明治時代)」「The Vista (展望)」の十五章から構成される著作であり、インド、中国、日本の風土や信仰や歴史などに触れつつ、主に芸術の発展について綴っている。

天心が『東洋の理想』を執筆開始した時期は明らかとなっていないが、木下は「多くの伝記や研究書がこれは日本で書かれていて、それにインドで加筆し、特に巻頭のThe Range of Idealsと巻末のThe Vistaはインドで新たに書き下ろしたと推測している」と、現在までの研究傾向を纏めている<sup>(50)</sup>。

宮川は、天心がインド旅行前から個人的に美術講義をしていた英国人女性ジョセフィン・マクラウドの存在を踏まえ、『東洋の理想』は、「インド旅行のまえ、〔山越注・明治〕三十四年中に構想された。この年ころ、日本美術の研究に日本留学をしていたマクラウドというイギリス婦人をつうじて、この本の依頼があった」としているが、その依頼の具体的な典拠は示していない<sup>(51)</sup>。恐らく、一雄氏が、「過去一カ年のあいだに執筆した英文『東洋の理想』の一篇を、ロンドンの書肆

ジョン・マレーで発行すべき下交渉が、ミス・マクラウドの手を通じてされていた<sup>(52)</sup>と書いていることからの推測であろうと思われる。しかし、一雄氏は、『東洋の理想』が出版されたのは、天心がインドから帰国した後であるにもかかわらず、『東洋の理想』は「彼の滞印中に刊行され」<sup>(53)</sup>第一回の印税が、心ゆくまでインドを漫遊する費用を、彼の懐にあたえたものであった」と書くなどしている<sup>(54)</sup>。『東洋の理想』の執筆に関する記述は、かなり推測が入ったものであると思われる。ただ、この点に関して、登志氏は、天心がマクラウドに頼んでジョン・マレー社から印税を前借りしたのであるという解釈をし<sup>(54)</sup>ている。

また、天心が何処から渡印費用を得たかに関して、登志氏は、一雄氏の『父天心を繞る人々』の「当局へ交渉の結果、遺跡調査の名目で数百千金を支出してもらったらしい」という記述から「当局」文部省をさすのか不明<sup>(55)</sup>としているが、一雄氏の『父天心』では、ほぼ同じ文面ながらもより詳細に「当局と交渉の結果、古社寺保存会から、遺跡保存調査の名目で数百千金を支出してもらっていたらしい」と書かれているので、この場合の「当局」とは、天心の立場が微妙なものとなっていたであろう文部省ではなく、古社寺保存会が設置されていた内務省か、あるいは、内務省系の人脈ではないとしても、古社寺保存会内の人脈を頼ったのではなからうか。ソントン不破直子は、恐らくこの一雄氏の記述を受けて、「天心は内務省の命によってインド旅行に出発」したとしているし、金子も「インド渡航の費用」は「内務省から支援を受けた」としている<sup>(56)</sup>。

天心が理事及び美術部長を務めた帝国博物館は、元は内務省の博物館であり、それが一八八一年に農商務省へ移り、一八八六年に再び移

管されて宮内省博物館となり、一八八九年に帝国博物館に改組されたものである<sup>(59)</sup>。また、天心は、農商務省から国内外の博覧会の鑑査官に任じられ、一八九〇年開催の第三回内国勸業博覧会や一八九三年開催のシカゴ世界博覧会等への出品に携わっていたという<sup>(60)</sup>。天心自身は概ね文部官僚だったというべきかも知れないが、美術行政に携わっていたのは文部省だけではない。美術行政で得た人脈を広く探せば、天心に協力的な人物も居たかも知れない。また、天心は、美術学校と帝国博物館を退いた後も晩年まで古社寺保存会には参加しているし、保存会の委員の中には、天心が美術学校を去った後に高嶺秀夫と共に事態の収拾に当たり、美術学校校長心得となった久保田鼎が居るといふ。

鼎は、文部省・宮内省系の人脈に属するが、天心と共に九鬼の下で働いて来た経歴から親交があり、勢力としては伝統美術派に属しており、天心が帝国博物館に辞表を提出した際、自身も博物館の工芸部長の辞表を出そうとして天心に止められたともいふ<sup>(61)</sup>。史料的な裏付けがない以上、憶測の域を出ないが、美術行政から距離をおいても、完全に孤立無援の立場となったわけではなかったのかも知れない。

話を渡印費用の調達から『東洋の理想』の執筆に戻すと、マクラウドから執筆依頼があったかはともかく、マクラウドへの美術講義が『東洋の理想』の骨子になった可能性については、堀岡も考えているが、確証はないとしている<sup>(62)</sup>。また、一雄氏も、「彼（山越注・天心）は、このころから来朝して、日本美術の研究に一身を打ちこんでいた英国の老嬢ミス・マクラウドおよび米国人ミス・ハイドラを一週一回の割合で、自宅の奥の間に迎え、日本美術史を講じていた。そのときはあらかじめ原稿を作っていたものか、それとも漫然、古今の巨匠について語っていたものか、今に分明していないが、残された稿

本がないところをみると、おそらく後者であつたらうと推せられる」と述べているので、マクラウドらへの講義が、『東洋の理想』を構想する上での下地になった可能性はあるが、具体的にその講義をそのまま『東洋の理想』の原稿と為したと思われる文書類はなかったようである。

以上のように、詳細な経緯については諸説あるが、『東洋の理想』の執筆に、このマクラウドが大きく影響したであろうことは確かである。マクラウドはインド旅行にも同行しており、天心をインドで高名なヒンズー僧のスワミ・ヴィヴェカーナンダに引き合わせたのも彼女であるといふ。マクラウドは、一八九五年にヴィヴェカーナンダの講演に触れて以来、彼の信奉者となり、ロマン・ロランがヴィヴェカーナンダやガンジーについて執筆するよう助力した人物でもある<sup>(65)</sup>。堀岡は、一九〇一年六月十四日付の、ヴィヴェカーナンダから東京にいるマクラウド宛の手紙で「たった今、岡倉から三〇〇ルビーの小切手と招待状が届いた」とあり、さらに、六月十八日付の手紙では、「日本まで往復に一カ月ずつかかる上、短い滞在では何もできない。その上、健康状態がよくないし、現在の法的問題にひっかかっているし、予定通りの期日には行けないかもしれない」とあること、また、ヴィヴェカーナンダから別の知人宛の、七月五日付の手紙で、「日本行きは断った」とあることから、マクラウドからヴィヴェカーナンダについて聞いた天心が、ヴィヴェカーナンダを日本に招待したが、健康状態の思わしくないヴィヴェカーナンダがそれを断った為、天心の方からインドに向くことになったのだと分析している<sup>(66)</sup>。

天心がインドに赴いたことにより、ヴィヴェカーナンダと天心は出会いを果たすことが出来た。また、その出会いは、感動を以て綴られる

るものであったようである。天心は一九〇二年一月付の手紙で、「過般来当地に参りヴィヴェカーナンダ師に面会致候 師は気魄学識超然 拔群一代の名士と相見え 五天到る処師を敬慕せざるはなし」とヴィヴェカーナンダを絶賛している。<sup>(67)</sup> また、森本達雄によれば、マクラウドは次のような回想を残しているという。

私の生涯の幸福の時間の一つは、ベルルで数日間を過ごしたあと、岡倉氏がかなり興奮した口調で、「ヴィヴェカーナンダはわれわれの人間です、彼は東洋人です、彼はあなたたち「西洋人」には属していない」と言ったときでした。そのとき私は、二人のあいだに真の理解が生まれたことを知りました。それから一、二日後に、スウィー「導師」が私に言いました——「長いあいだ行き方知れずになっていた兄弟が帰ってきたかのようだ」と。そのとき私は、二人のあいだに真の理解が深まったことを知りました。それからスウィーが岡倉氏に向かって、「あなたも私たちの仲間にお入りになりませんか」と言ったとき、岡倉氏は、「いや、私はまだ俗世の仕事を終えておりませんので」と答えたが、それは、ひじょうに賢明なことでした。<sup>(68)</sup>

ベルルというのは、ヴィヴェカーナンダが活動していた僧院の一つである。このマクラウドの回想を見る限りでは、両者は非常に相互理解を深めていたように見える。また、堀岡は、「東洋の覚醒」の冒頭に著した「アジアの兄弟姉妹よ」という呼び掛けは、ヴィヴェカーナンダが一八九三年のシカゴ万国博覧会の宗教大会で演説した際の「アメリカの姉妹兄弟よ」という冒頭の呼び掛けから影響を受けた

可能性を示唆している。<sup>(69)</sup>

しかし、ヴィヴェカーナンダと天心との間には、何らかの行き違いが生じてしまったらしき様子も、堀岡は明らかにしている。堀岡に拠れば、天心のインド旅行に同行した堀至徳の一九〇二年六月十日の日記で、「予の接待マツツにおいて変せしは岡倉君とスワミィブベカーナンダ氏との間に少々行きちがいありし為と岡倉君より話あり」と書かれているという。<sup>(70)</sup> マツツというのは、恐らくベルル・マト（僧団）のマトのことであると思われる、つまりベルルのことである。<sup>(71)</sup> これに先立つ、四月二十一日付の、ヴィヴェカーナンダからマクラウド宛の手紙で、「私には日本人がよく解せない」という記述も見られるという。<sup>(72)</sup> また、ヴィヴェカーナンダは、マクラウド宛の日付なしの手紙で「あなた日本人のお友達は大変親切だったが、私の健康状態は思わしくなく、日本で費やすひまなど私には残されていないようだ。それで旅費としてあなたの日本人のお友達が送ってくれたお金をたて替えて返して置いて下さい。」と書き残しており、堀岡は、これを一九〇二年五月頃の手紙であると推測している。<sup>(73)</sup> この「長いあいだ行き方知れずになっていた兄弟」というヴィヴェカーナンダの言葉と比較すると、やや距離を置いた表現をしている印象を受けないでもない。

この行き違いの詳細は不明であるが、森本は、「神に仕える敬虔な宗教者であり」「祈りと瞑想に明け暮れる厳格な苦行者」のヴィヴェカーナンダと「ミューズに仕える不羈放縦な美の求愛者」の天心では生活が続かなかつたのであろうとしている。<sup>(74)</sup> あるいは、行き違いというよりは、互いの目指す道の相違を認識した結果として、穏やかな離別をした可能性もある。天心のインド滞在より二十年以上も後のこと

になるが、ロマン・ロランは、一九二六年十月四日付のインドでの日記において、ヴィヴェカーナンダが天心に「あなたはここで私を相手に何もすることはありません。ここでは、諦念です。タゴールに会いにおいでなさい。彼はまだ生の中にいますから」と告げたと伝わっていることを記している。<sup>(75)</sup>

両者の間でどのような問題が生じ、そして、どのように処理されたのかは定かではないが、天心がまだインド滞在中である一九〇二年七月四日に、ヴィヴェカーナンダは病没してしまい、それにより両者の関係は終わらざるを得なかった。一九〇二年七月十日付の天心から至徳に宛てた手紙では、「ヒベカナンタ師去九日死去致候」と書かれて<sup>(76)</sup>いる。この手紙においてヴィヴェカーナンダの死去した日付が誤っている理由は、判明していないようである。天心は滞印中あちこち旅行もしているが、概ね住まいとしていたのはカルカッタのようである。<sup>(78)</sup>ヴィヴェカーナンダが没したベルルはカルカッタ郊外、ガンジス支流を挟んで対岸のハウラーにあるというから、ヴィヴェカーナンダ死去の報に、遅延や誤報が生じる余地は少ないだろう。同じ手紙の中で、天心は、ラビンドラナート・タゴールの名や宛先の地名を誤字しているようである。単純に、インドの名前や地名に不慣れであった為の誤字である可能性はあるが、天心の動揺の現れである可能性も、無きにしても非ずではないだろうか。

いずれにせよ、このヴィヴェカーナンダの下で天心が出会ったのが、『東洋の理想』の序文を著すことになる「ラーマクリシュナ・ヴィヴェカーナンダのニヴェディタ」であり、さらにニヴェディタを通じて出会ったのが、詩人・思想家として著名なラビンドラナート・タゴールや、その甥のスレンドラナート・タゴールである。<sup>(79)</sup>

堀岡によれば、ニヴェディタは、本名をマーガレット・ノーブルといい、北アイルランド生まれの女性で、彼女の祖父も父も、北アイルランド独立の為の政治運動に活躍した人物であったという。ヴィヴェカーナンダがロンドンで講演会を行った折に彼の弟子となり、シスター・ニヴェディタの名前を得、ラーマクリシュナ僧院の見習い修道女となり、インドで女性の為の塾を開くなどの活動をしていた。インド滞在中に書かれたとされる『東洋の覚醒』の原稿ノートには、ニヴェディタの筆跡による英語表現の添削が残っている。また堀岡は、『東洋の理想』の方の添削原稿は発見されていないが、『東洋の覚醒』と同じ程度に『東洋の理想』にもニヴェディタの手が加わった可能性を考えている。<sup>(82)</sup>

そして、ニヴェディタを介して交流が深まったタゴール家では、ヴィヴェカーナンダの時のような行き違いもなかったのか、天心は後年まで高く評価されたようである。丹羽京子は、一九一六年九月二日付と推定されるラビンドラナートからスレンドラナートに宛てられた次の手紙を抜粋して紹介している。<sup>(83)</sup>

私はこの間、岡倉の家に行った。(中略)私は日本人々が岡倉の真価を全然理解していないのに驚いた。この事実は、彼らの浅薄さをあらわしている。私はたくさんの重要人物と話をしたが、岡倉のような天賦の才を持った者はひとりもいなかった。

一九一六年は、天心が没してから三年後であり、ラビンドラナートが初めて訪日した年でもある。この年の八月、ラビンドラナートは五浦を訪れ、天心を偲んで哀悼の詩を書いたという。森本は、慌ただし

い日程の中でラビンドラナートが五浦に赴いたことに、ラビンドラナートの天心への並々ならぬ友情が窺えるとしている。<sup>(84)</sup> また、ラビンドラナートは、一九二九年六月七日、『東洋文化と日本の使命』と題された日印協会における講演で、次のように語ったという。

幾年か前のことです。わたしは日本の国から来た一人の偉大な独創的な人物に接したときに、真の日本に出会いました。この人は長い間わたしどもの客となり、そのころのベンガルの若い世代に測り知れない靈感を与えました。それはわたしどもの国で、国民の自覚が急激に勃興した一時期の直前の日でありました。東方の声がこの人から、わたしどもの国の若い人々に伝えられました。これは意義深い事件であり、わたし自身の生涯の中の、記念すべき出来事でありました。<sup>(85)</sup> 彼がわたしどもの中で、わたしどもと共に過ごした日々は、青年たちにとって、歓喜と熱情にあふれた、素晴らしき日々でありました。熱烈な愛をもって、彼は当時の青年たちと一体となり、青年たちは今も彼のことを記憶しています。彼が原動力を与えた運動は、今もなお私どもの地方で進んでいます。彼の同情と理解と想像力、芸術の原則への彼の本能と体験に扶けられた「ベンガルの芸術運動」はその一つであります。来る日も来る日も、彼の傍らに坐って、彼の言葉に耳を傾けたこれらの青年たちは、その青春の黎明に与えられた、この実り多い機会の結実を、今もなお収穫し続けております。<sup>(85)</sup> この個人的な関係、個人的な影響をとおして、彼は日本の最上のものを代表していました。

丹羽は、ラビンドラナートの「天心評は後年になればなるほど高く

なっていくたようである」と、その内容傾向を分析している為、ラビンドラナートの中で、記憶にある天心像が美化されていった可能性も、ある程度念頭に置く必要があるだろう。また、丹羽は、ラビンドラナートが訪日した際に受けた様々な批判から日本の知識人に失望を感じ、相対的に天心の評価が高くなった可能性も示唆している。しかし、手紙の方に関して言えば、天心の没後から三年であるし、まだ記憶の美化の影響というのはそこまで大きくはないのではないかと思われる。少なくとも、当初からラビンドラナートが天心に一定の好感を持っていたことは間違いないだろう。とはいえ、ラビンドラナートと天心の繋がりについて、岡本佳子は、「一見、詩人的精神によって通じ合っていたと思われる二人だが、実際にはそれぞれが置かれていた境遇や祖国の歴史的文脈に大きな違いがある」ということを指摘している。<sup>(87)</sup> ナシヨナリズムの観点からの両者の思想の比較研究は同氏が詳述しているので、此处では差し控えたい。

インドで天心が築いた人間関係に話を戻すと、タゴール家で最も天心と親しかったスレンドラナートは、ベンガルの民族主義運動で急進派として活動している人物であった。<sup>(88)</sup> 天心の孫に当たる岡倉古志郎氏の研究に拠れば、スレンドラナートは、祖国とヒンドゥー教信仰の再生を唱えるベンガルの有力な革命的グループの一つである、アヌシラン・サミティイという協会の会計役に就任していた。また、ニヴェディタも、この協会に、「アイルランド愛国運動の文献、彼女が傾倒していたクロボトキンの著書などヨーロッパの革命運動の書籍をはじめ大量の書籍を寄贈」していたという。<sup>(89)</sup> 堀岡に拠れば、ヴィヴェカーナンダの死から間もない一九〇二年七月十八日付で、「私の使命は二、三の女性を感化するだけでなく、国家を目覚めさせることなのです」とマ

クラウドに宛てて綴っているニヴェディタの手紙があるという。<sup>(90)</sup>この手紙から、インドの愛国運動に懸けるニヴェディタの情熱が窺え、また、「国家を目覚ませる」という言葉からは、天心の著述へのニヴェディタの関わりも感じられる。

そして、天心のインドでの様子に関して、よく引用されるのが、スレンドラナートの回想である。その一部を、ここでも引用してみよう。

彼は著『東洋の理想』をちようど書き終えたところで、インドは初めての訪問であった。(中略) 岡倉自身は無言であったが、主としてニヴェディタから盛んに話しかけられていた。彼女が彼をして我々に向かつてしゃべらせようとしていることは誰の目にもわかった。しかし彼女の讚辞的質問はすべて——彼自身に関することも、当時注視の的となってきた彼の国に関することも、また彼女が原稿を通読する特権を与えられて歓喜していた彼の新著に関することもすべて、彼からは感謝の一札を引き出すことに役立つばかりであった。(中略) 「あなたは祖国のために何をなさろうとお考えですか。」彼は最初にいきなりこう質問してきた。それは全く私の不意をつく質問だった。あとから考えると、ニヴェディタが年長者の配慮から我々インド青年を覚醒せしめるよう彼に依頼していたらしいのだが、その時は思いもよらなかったからである。(後略)<sup>(91)</sup>

このスレンドラナートの回想に関して、堀岡は、貴重な文献であるとしながらも、「三十五年も以前のことを思い出している」回想録であり、「正確とは言えない」との留意を示している。<sup>(92)</sup> スレンドラナートは『東洋の理想』を書き終えてから天心が渡印してきたという認識

であるが、先に述べた通り、近年の研究では、インドで加筆された部分があるとされている。しかし、少なくとも、この回想から、ニヴェディタが天心に傾倒していたらしきこと、また、インドの青年に向けた促しのある言葉を天心に求めていたらしきことが分かる。これらのことから、インドでの著述において、ニヴェディタの影響は少なからぬものであったことが窺える。

このような人々に取り巻かれた環境で仕上げられた『東洋の理想』は、ニヴェディタやマクラウドの尽力により、一九〇三年にロンドンのジョン・マレー社から出版された。初版の著者名は「Kakasi Okakura」と間違っているのだが、この点について堀岡は、マクラウドが後年の回想で天心を「Kakazu」と書いていることから、彼女やニヴェディタを経て「覚三」の名が誤って伝わり、それが何処かで「Kakasu」に変えられたのだと推定している。<sup>(93)</sup> 天心は一九〇二年十月、『東洋の理想』の出版より早くインドから帰国した。

それから一年少々の一九〇四年二月、天心は、横山大観、菱田春草、六角紫水を連れて、アメリカへと旅立った。そしてボストン美術館の理事であったビゲローの紹介状を得て、ボストン美術館で働き始め、その後最晩年までボストンと日本を往復する生活を送ることになる。<sup>(94)</sup> その初年である一九〇四年九月、セントルイス万国博覧会で、天心は講演を行うことになる。この講演は、当初はループル美術館の館長が担当するはずであったが欠席となった為、天心が代役となった。<sup>(95)</sup> 堀岡は、美術館界隈で天心の評価を上げたのは、英文著作以上にこの講演の成功があったのではないかとしている。<sup>(96)</sup> そのような精力的活動の中で天心は、一九〇四年末〜一九〇五年にかけての間に、ニューヨークのセンチューリー社とロンドンのジョン・マレー社から『日本の目覚

め』を出版することになる。<sup>(97)</sup>

『日本の目覚め』は「The Night of Asia (アジアの夜)」「The Chrystalis (クリスタリス)」「Buddhism and Confucianism (仏教と儒教)」「The Voice from Within (内からの声)」「The White Disaster (白禍)」「The Cabinet and the Boudoir (幕閣と大奥)」「The Transition (過渡期)」「Reformation and Reformation (復古と維新)」「The Reincarnation (再生)」「Japan and Peace (日本と平和)」の十章から成る著作である。<sup>(98)</sup>内容としては、ミカドと幕府の関係性は如何なるものであり、徳川の時代にどのような学問・思想が育ち、如何なる国内の対立を経て、現在の(明治当時の)日本に至ったのかを、ヨーロッパのアジアに対する打ち手を非難しつつ、語ったものである。

この『日本の目覚め』も、執筆開始時期については諸説あり定まらない。金子は、『日本の目覚め』はインドで書き始められたという説を採用している。<sup>(99)</sup>その根拠の一つは、一雄氏の『父天心』における「この書〔山越注：『日本の目覚め』〕はかつてインド滞留のみぎり稿を起したもので、その初稿は『東洋の覚醒』と題してあった。しかし、発刊時があたかも日露役最中であつたので、東洋一般の覚醒を唱わんよりはむしろ日本一国のそれを詳説するに如かずと、ある部分を削り、ある部分は補足している」という記述である。しかし、木下も指摘していることであるが、『東洋の覚醒』が『日本の目覚め』の初稿であるとするのは、あくまで一雄氏の一説に過ぎない。<sup>(100)</sup>よって、この記述から、『東洋の覚醒』を『日本の目覚め』と同定するのは難しく。

堀岡は、金子とは少し異なる理由から、『日本の目覚め』の執筆開始時期はインド滞在中であるとしている。<sup>(101)</sup>その根拠は、先にも挙げた

スレンドラナートの回想の一部である。しかし、その根拠となる箇所に関して、筆者が主に参照している山口静一の邦訳と、堀岡の邦訳では、少々相違が見られる。まず、該当の回想を、山口による邦訳から引用する。

彼は第二の著書「アジアの覚醒」の執筆に忙しく、一日中寝台の上の長枕に凭れかかって仕事を続けている。一方我々は夕方になると彼の食卓の周囲に集まり、東洋に蔓延する白禍によって物心ともに西洋物欲思想に冒されている現状を慨嘆する彼の熱烈な論議を傾聴して、激しく心を燃やしたのである。岡倉は我々に批評を乞い、否、批評を強要し、我々がこんな表現にしてはと提案する。どんなにぎつい言葉、あくどい警句でも喜んで採り入れる風であった。(中略) あとになって私は、最終的に出版の運びとなった彼の著書の中に、我々の「修正」が一行として生かされていないばかりか、かえって数段階も調子を落としたものになっていることを知って、<sup>(102)</sup>とまどいを感じたのを忘れることができない。あの当時の我々の見戯に等しい行為を振りかえって見ると、明敏な岡倉が真に意図したのは実は我々自身を覚醒せしめることではなかったかという、これは疑念を通り越して確信に近いものとさえなっている。<sup>(103)</sup>

この部分の回想から、堀岡は、「『日本の目覚め』第五章、白禍の原稿を書いていたことが分かる。次の節でスレンが『後に本が出た時』<sup>(104)</sup>と言っているから『東洋の目覚め』の原稿では有り得ない」として

しかし、本当に『東洋の覚醒』の原稿では「有り得ない」のだろうか

か。白禍への言及という観点から考えて、後に出版された本というのが『日本の目覚め』であるというのは、恐らく確かであろう。だが、この回想から確証を以て言えるのは、スレンドラナートが『アジアの覚醒』の原稿が『日本の目覚め』として出版されたと認識している、ということまでではないだろうか。スレンドラナートがそう認識しているからには、『アジアの覚醒』と『日本の目覚め』の内容には、近似した要素があったのであろう。しかしながら、傍線二にあるように、『日本の目覚め』の文章表現が、スレンドラナートの批評が「一行として生かされていない」というほど変化したものであったならば、それは趣旨の似通った別物とも言えるのではないだろうか。白禍への言及があること、「どぎつい言葉、あくどい警句」が取り入れられていることなどを考えると、『アジアの覚醒』は、むしろ、『東洋の覚醒』の特色に合致しているように思われる。この点、堀岡は、傍線二の部分を「我々の『改良』はどれも皆、何倍かに調子を弱めるのにか役立つなかつたのを見いだして」と訳している<sup>(106)</sup>ので、山口の邦訳に比べて、文章表現の変化が小さかったように読める。

また、堀岡は、傍線一を「彼が、西洋の悪魔に知的にも精神的にも降服してしまったために、東洋に拡がってしまった白禍<sup>(106)</sup>についての一章を読むのを聞きながら」と訳しているが、山口の邦訳では「白禍についての一章」という表現は登場せず、天心が白禍に関する議論をスレンドラナート達と交わしていた様子しか書かれていない。白禍への言及という点で言えば、『東洋の覚醒』も『日本の目覚め』も当てはまるが、「白禍」という一章が存在するのは『日本の目覚め』のみである。したがって、この時の原稿を『日本の目覚め』と見なして良いのかは、天心が明確に「白禍についての一章」を読み聞かせていた

のかという点にもよるのではないかと思われる。  
より確実に文意を取るために、(107)では該箇所所の英語原典を見よう。

He is busy writing his next book on the awakening of Asia, at which he works all day, sprawling over a bolster on his bedstead ; while we spend wildly exhilarating evenings, sitting round his table, listening to his glowing passages deploring the White Disaster spreading over the East, in its intellectual and spiritual surrender to the western cult of Mammon. <sup>(107)</sup> Okakura would invite, nay, insist on our criticism, and appeared gratefully to incorporate such harsher word or blatant epigram as any of us thought fit to suggest. (中略) I remember my mystification, later, at finding none of these "improvements" in the book as eventually published——rather it seemed several shades toned down. <sup>(108)</sup> Looking back on our pranks of that period, I am assailed with more than a suspicion that it was our awakening that the astute Okakura was really after.

傍線一を見ると「listening to his glowing passages (彼の熱意に満ちた一節を聞きながら)」とあるから、(107)の点に関しては、堀岡の邦訳の方が原文に近いかも知れない。しかし、天心が白禍について書いた原稿をスレンドラナート達に読み聞かせていた可能性を窺わせるだけ、白禍に関する「一章」を読んでいまでは言えないのではないだろうか。また、傍線二は「これらの『改良』が最終的に出版された本には全く見当たらない、それどころか逆に一部のニュアンスでは

語調が弱まっていると思われた」といった訳になるかと思われるので、山口の邦訳の方が原文に近いだろう。

以上のことから考えると、スレンドラナートは、天心がインドで執筆していた『アジアの覚醒』が『日本の目覚め』となったのだと認識しており、当時立ち会った人物がそう感じたならば、『アジアの覚醒』と『日本の目覚め』は同じ趣旨の著述であったと考えて良いかも知れないが、スレンドラナート達の助言が「全く見当たらない」というほどにまで文章の細部が変わっていたとすると、『アジアの覚醒』が『日本の目覚め』の下地として機能した可能性は十分にあるが、両者を単純に同一視して良いということにはならないのではないだろうか。

尚、『東洋の覚醒』が『日本の目覚め』の初稿であった場合、「どぎつい言葉、あくどい警句」が消えてしまった理由について、金子は、『東洋の覚醒』の表現は「挑発的なもの」であった為、「著作の趣旨が日本認識の再考をうながすもので」「欧米人を挑発することは極力避けなければならなかった」「日本の目覚め」においては、「天心は草稿の内容を大幅に書き換えた」のではないかとしている<sup>(10)</sup>。

木下は、一八八六年の欧米視察旅行の際に、アメリカでギルダー夫妻と親交を結んだことが、天心が『日本の目覚め』を書く遠因であるとしている。その理由の第一点目は、ギルダーが、『日本の目覚め』を出版することになるセンチュリー社で、ザ・センチュリー・マガジンの編集長をしている人物であることである。そして、理由の第二点目は、天心の手紙における著作に関する言及である。一八八七年七月二八日付のギルダー夫人宛の手紙で、天心は、「氏にお約束しましたのに何も書かずに今まで来ました」と述べており、ギルダーとの間で、

何かを執筆する約束をしていたことが分かる。また、娘の高麗子に宛てた一九〇三年二月九日付の手紙で「父は来一月略著述を了り渡米可致候<sup>(11)</sup>」とある。そして、天心渡米後の一九〇四年六月一六日付のギルダー夫人宛の手紙では、「私の本のための草稿はほとんど出来上りましたので、もしご親切にもお目通し下さって、ご忠告ご訂正いただければ有難いと存じます」と、『日本の目覚め』と推定される草稿の校正を頼んでいる。これらのことから、少なくとも一九〇三年以前から『日本の目覚め』の執筆は開始されており、渡米前の一九〇四年一月には書き終わるつもりでいたが、結局渡米後までかかっているというのが、『日本の目覚め』執筆時期を巡る木下の意見である<sup>(12)</sup>。

『日本の目覚め』の執筆に、日露戦争が大きく影響したであろう点については、どの研究も概ね一致している。木下は、ギルダー夫人宛の一九〇四年五月十二日付の手紙における「黄禍論についての私の論文は手許にありませんが、写しをとってお送りするようにします」という天心の言葉から、この「黄禍論についての私の論文」というのを『日本の目覚め』の草稿であるとして、「日露戦争を契機に欧米で勢力を持ちつつあった黄禍論を批判することが、この *The Awakening of Japan* を執筆しようとする大きなモチーフだった」としている<sup>(13)</sup>。一雄氏の回想によれば、一九〇五年にアメリカから帰国し五浦で釣りにふける日々を送っていた天心が、付近の村で何とはなしに「露探」と噂が立てられた際、「俺は剣こそとらないが、ペンを揮ってずいぶんロシアをやっつけたつもりだ」と述べたという<sup>(14)</sup>。この回想を信じて良ければ、天心自身、『日本の目覚め』に関して、日露戦争中のアメリカで好意的な対日世論を作ることを目眼に置いていたと見て良いだろう。また、『東洋の覚醒』から『日本の目覚め』に至るまでの天心につ

いて考える上で重要なのが、天心が一九〇四年三月二六日付のニューヨークのイヴニング・ポストに掲載した論説『日本と黄禍 (Japan and the 'Yellow Peril')』である。

登志氏は、この『日本と黄禍』が、『日本の目覚め』のベースになったものであるとしている。そして、三月二日のニューヨーク到着から一ヶ月も経たないうちに論説が掲載された点から、天心はこの論説を渡米の船上で執筆し、後で『日本の目覚め』の為に肉付けしたのだとしている<sup>(16)</sup>。

岡本は、『日本と黄禍』を『日本の目覚め』に取り入れたか、『日本の目覚め』の一部を『日本と黄禍』として発表したか、いずれの可能性もあるとしている<sup>(17)</sup>。また、岡本は、先に述べたギルダール夫人宛の手紙における「黄禍論についての私の論文<sup>(18)</sup>」とは、『日本の目覚め』の草稿のことではなく、このイヴニング・ポストに掲載した『日本と黄禍』のことであり、天心は写しを作らずに新聞社に原稿を送ってしまつた為、手許にないのであろうとしている<sup>(19)</sup>。

岡本に拠れば、この『日本と黄禍』の論点は五つであるという。一点目は、アメリカが日本へ示した同情へ感謝すると同時に、日本の対米協調の姿勢を訴えること、二点目は、『黄禍』とはドイツとロシアにより捏造された虚構であるという主張、三点目は、日露戦争は「スラヴ禍」に対する日本の自衛の為の戦争であり、また文明の為の戦争でもあるというロシア批判、四点目が「中国と日本の文明的特質」、五点目が「朝鮮半島と日本の関係」であるという<sup>(20)</sup>。

また、岡本は、『日本と黄禍』と『日本の目覚め』の相違点も挙げている。第一に、『日本と黄禍』は、当時の日本国内で流通していた国防論や、金子堅太郎や末松謙澄が担った公的プロバガンダと同様の

黄禍論否定が中心となつているのに対し、『日本の目覚め』は、日本の興隆の要因は西洋文明の導入に在るのではなく、国内で自発的に生まれた精神動向に在るのだと示すことを中心に据えている点である。第二に、『日本と黄禍』では「ロシアこそが真の禍」であると訴えることに論点が限定されているのに対し、『日本の目覚め』では日露戦争を含め、帝国主義的な勢力争いの方式がアジアにもたらされたこと自体、「白禍」であるとしていることである<sup>(21)</sup>。

『日本と黄禍』も『日本の目覚め』も日露戦争を意識して書かれたものであるにもかかわらず、何故そのように内容が変化したのであるか。単純に日露戦争において日本に有利なアメリカ世論を作りたいのならば、「白禍」として西洋諸国全般へ非難の範囲を広げるよりも、むしろ、ロシア批判に重点を絞つたままの方が、都合が良かったはずである。塩崎智によると、「当時の米露両国は伝統的に友好関係で結ばれて」おり、「とくに北東部のアメリカ人にとっては、ロシアは独立戦争では米国を、南北戦争では北部を支持してくれた恩人だった」為、ロシアの極東進出により、門戸開放を望むアメリカ政財界ではロシアへの反感が募ってきてはいたが、それでも根強い親露派は存在し、弁を揮っていたという<sup>(22)</sup>。天心も、当時のアメリカに居た以上、そういった議論は目にしてはいたはずであろうに、何故、『日本と黄禍』では一度「スラヴ禍」とした言葉を、『日本の目覚め』では『東洋の覚醒』で綴つたのと同じ「白禍」として、批判の範囲を広げたのだろうか。

尤も、天心の美術における態度を思い起こせば、この執筆方針の变化は、そこまで矛盾したものでもないと思われる。美術学校騒動の件で引用した竹内の意見にもある通り、天心にとっての国粹とは、「古

人を学んで古人を越えよ」という「新しい国民芸術の創造に関するもの」であり、天心は「西洋画を学ぶことには反対はしていない」。<sup>(124)</sup>天心が中心となり創刊した美術研究誌『国華』において、発刊の辞として書かれた文章などを見ると、「何ソ必スシモ故人ノ軌轍ヲ踏ミ、死

法ヲ因襲シテ、以テ純正ノ国家精華ヲ保ツトセンヤ。明治ノ画家ハ奮勵揮擢我邦ノ特質ニ基キテ進歩スルニ躊躇スルヘカラサルナリ」という言葉がある。<sup>(125)</sup>一九〇四年七月六日付のギルター宛の手紙でも、天心は、自身の経歴について「西洋美術と生活様式の全面導入に対抗する復古主義運動の推進者の一人でありました」と述べている。<sup>(126)</sup>国粋主義者的に天心が描かれる場合は、この中の「復古主義運動の推進者」であることに重きが置かれるのであろうが、天心が反対しているのは西洋の様式の「全面導入」なのである。

そういった観点から考えると、天心は、同時期にアメリカ世論を日本支持に向けてよく言説を発表していた金子堅太郎らとの意見の差別化を図るために、執筆内容の方向性を修正したのではないかと思われる。渡米当時の天心に関する弟子たちの証言は、単純にそのまま受け取れない面もあるのだが、ひとまず、一九四三年の座談会における、横山大観、六角紫水らの証言を見てみよう。

織田 「日本の覚醒」と申しますと、あれは最初は「東洋の覚醒」

であつたといふ記録があるのですが、さうですか。

六角 今はどうなつてをりますか……

横山 アウエーキング・オブ・ジヤパンを書く時には、その前にいろ／＼な経緯があるのです。イヴニング・ポストといふのがポストンで出てをります。あれに約一頁を、岡倉さんが金子

さんの演説に憤慨して書いたのがある。それは王陽明の学を盛んに言ひましてね。<sup>(126)</sup>

岡本も指摘していることであるが、「大観の回想は、『イヴニング・ポスト』の発行地をポストンと言い、『日本の覚醒』で重要な位置を占めるが新聞論説には登場しない陽明学に言及している点で誤り」である。<sup>(127)</sup>その辺りを考慮すると、信憑性に問題がある証言ではあるが、天心が金子と意見の方針が合わなかったという証言の一つである。同じ座談会内で、紫水の次のような回想もある。

六角 (前略) それで金子さんはポストンに来たが、金子さんは毎日あそこの人をお茶の会などに呼んで、あなた方のお蔭で日本は強くなりましたとお世辞を言ふ。ところがお婆さん(山越注…天心の支援者で美術品収集家のガードナー夫人)は「金子は馬鹿だ。アメリカには歴史も何もない。日本は何千年と続いた歴史を持つてゐる。だから戦争にも強い。そんなお世辞を言つても駄目だ」と始終言つてをつた。(中略)ガードナーといふ人はさういふ見識のあつた人なのです。それで岡倉先生はガードナー夫人と非常によく合ふのですね。<sup>(128)</sup>

大観のような記憶の誤りもあるし、この紫水の回想も鵜呑みにするわけにはいかないだろう。塩崎に拠れば、天心の弟子たちは、天心と金子の折り合いが悪かつたという旨を証言しているが、「岡倉自身は生涯で一筆、一語たりといえども金子批判を行っていない」。<sup>(129)</sup>

ただ、塩崎に拠れば、金子は、一九〇四年三月〜四月のアメリカで

の演説で、「執拗なまでに『門戸開放』という言葉を繰り返し」、アメリカ政界と日本が「同じ方針を共有しているという印象を与えるために」「日本が門戸開放のために戦っている」と語った<sup>131</sup>り、日本が国際赤十字条約に則った捕虜待遇をしているのに対しロシアが在留日本人を抑留した例などを挙げ、「どちらの行為がよりキリスト教主義に適っているか、と聴衆に問いかけた<sup>132</sup>りしていた。

こういった、如何に日本がアメリカの方針に適うか、キリスト教的道徳に合致するかといった方面からの金子の訴えかけは、美術分野で西洋の様式を全面導入するやり方に賛成出来なかつた天心としては、思うところがあつたであろう。それ故に、『日本の目覚め』においては、日本の発展が外的要因ではなく内的要因に拠るのだと論じることを中心に掲げようとしたのではないだろうか。

岡本は、金子が黄禍論への反論の上で『異教徒』のイメージを払拭しようとしている<sup>133</sup>のに対し、天心は「日本の『平和的』志向性が、キリスト教への歩み寄りではなく、中国と日本の文明の『堅固な伝統』に由来すると主張<sup>134</sup>」していると述べている。しかし、「アメリカの大多数の読者には岡倉と金子の立場の違いを理解することは困難であつただろう」とも言う<sup>135</sup>。

出版社とのやり取りの上でも、天心は、そういった理解のされなさを感じていたのだろうか。一九〇四年八月一五日付のギルダー宛の手紙では「センチリー社が私の本の出版を決定した旨知らせて参りました。ご尽力感謝申し上げます<sup>136</sup>」と、無事出版が決定した旨が述べられているが、この少し前、八月四日付のギルダー夫人宛の手紙では、『日本の覚醒』の草稿を整理しなおそうとしております。実のところ、私以外誰もこれを理解することができないようです。おそらく、そも

そもこれを書いたということが愚かなことでした<sup>137</sup>」と、自信を失くしたとも、読み手に幻滅したともつかない言葉が漏らされている。

結果のみ見るならば、『日本の目覚め』は無事に出版され、『東洋の理想』よりも多くの書評に取り上げられた<sup>138</sup>。ただ、塩崎は、『日本の目覚め』と同時に注目されていた本として、「日露戦争従軍記者やかつての御雇い外国人学者、教師らが著した」日本関連の本が多くあつたことも挙げ、アメリカにおいては天心の著書は流行に乗つた一冊という位置づけで読まれたことを指摘している。加えて、塩崎は、この時期のアメリカの様子に関して、日露戦争に高い関心があつたのは確かであるが、「所詮、遙か彼方『極東』での戦闘に過ぎない」もので、アメリカ人自体はクリスマスなどに向けた商戦の最中にあり、日露戦争関連の本が売れたのも、そういった時期的なものがあるだろう<sup>139</sup>としている。

『茶の本』は、「The Cup of Humanity (人情の茶碗)」「The Schools of Tea (茶の流派)」「Teism and Zenism (道教と禪)」「The Tea-Room (茶室)」「Art Appreciation (芸術鑑賞)」「Flowers (活け花)」「Tea-Masters (茶人)」の全七章から成る本であり、茶の伝来の歴史、茶道の発展、芸術と向き合う精神などについて綴られている。堀岡に拠ると、『茶の本』は一九〇六年にニューヨークのフォックス・ダフ・イルド社とG.P.パットナムズ・サンズ社から同時に出版された<sup>140</sup>。尚、G.P.パットナムズ・サンズ社は、一九〇五年に新渡戸稲造の『武士道』を再版し、初版時以上の注目を集めた出版社でもある<sup>141</sup>。『茶の本』は、第一章で、武士道を死の術、茶道を生の術と述べるなどしている<sup>142</sup>ので、G.P.パットナムズ・サンズ社としては、著作権が他社でも出版すれば『武士道』と合わせて読まれるだろうとの思惑もあつたの

かも知れない。

『茶の本』はそれまでの英文著作とは異なる出版過程を経た。堀岡に拠れば、七章のうち、「人情の茶碗」「茶の流派」「道教と禪」「芸術鑑賞」の四章が、一九〇五〜一九〇六年にかけて、アメリカやイギリスの雑誌にエッセイとして発表されており、一九〇五年四月号の『インターナショナルクォーターリー』に最初の二章が掲載された時点で既に「全版權所有者はフォックス・ダフィールド社」と断り書きがあるという。<sup>(139)</sup>

木下は、『茶の本』の執筆経緯について、「ジョンソンという編集者から日本文化を扱った短篇の原稿を読んでくれと渡され」「余りにひどい内容に憤慨」し、「Floral Arrangement [活け花] について原稿を書こうという約束をした」ことから、「構想が発展して、『茶の本』になっていったと考えられる」としている。<sup>(140)</sup>

このジョンソンという人物に関しては詳細不明のようであるが、恐らくギルダーを通じて知り合ったセンチュリー社の編集者ではないかと推測されている。<sup>(141)</sup>一九〇四年七月六日付のギルダー宛の『日本の目覚め』に関する手紙の中には、「草稿を、あなたにお送りするのか、あるいは直接にジョンソン氏かスコット氏かに、お送りするのか」と同名の人物が登場しており、また、七月二一日付の、ジョンソンから送られた活け花に関する論文に対し天心が批評を加えて返事をしていく手紙の冒頭でも、「私の原稿についての多大なお骨折りに対し、ふたたびお礼申し上げます。残りの原稿を一週間以上前に、ギルダー氏のご忠告に従ってスコット氏に送りました<sup>(142)</sup>」と、『日本の目覚め』に關しての礼が挨拶として述べられている。

そして、八月二五日付のジョンソン宛の手紙で、「時間の余裕をい

ただけるのでしたら、活け花とその日本人の生活との関係について論文を書きましよう」と書き<sup>(143)</sup>、また、十月十六日付のジョンソン宛の手紙において、活け花に関する論文の完成期日を延期したいという旨を伝えていることから、<sup>(144)</sup>確かに、ジョンソンとの約束に基づき、天心が筆を執っていたらしきことが窺える。しかしながら、ジョンソンに対して活け花に関する論文を書く約束をしたことが『茶の本』を書く遠因となったならば、何故出版社がセンチュリー社ではなかったのかという疑問も残るところである。

ソントン不破直子に拠れば、『茶の本』は、当時のアメリカの出版界のある種の流行に乗って書かれた面があるという。当時欧米では、「たばこ」を生活のシンボルとして扱った本がいくつか出ており、さらに中近東については「宝石」をそのシンボルとした本が多く出ており、また一九〇三年には、コーヒーを生活のテーマにした本が出ているほか、*The Little Tea Book* という日本の茶の湯からヨーロッパの喫茶まで触れている本も出ているという。<sup>(145)</sup>『茶の本』は、内容の大部分は茶の湯や生け花に見る芸術精神の解説に割かれているが、第一章では「黄禍」「白禍」という語を出し、西洋に東洋の理解を求めているという点で、『日本の目覚め』に通じる部分もある。そのように過去の英文著作と通底するところを持ちつつも、書名に茶を冠した異なる趣の本となったのは、そういった流行の影響があったのだろう。

天心は、没する前年まで中国、インド、ヨーロッパ、アメリカなどを回り、美術の為の活動を続けたが、著作として出版されたのは『茶の本』が最後となった。一九〇四年以降は、折に触れ書いていた漢詩に加え英詩を創作したり、日本の物語の英訳、オペラの作詞なども行ったが、生前に活字化、出版されることなく終わっている。<sup>(146)</sup>一九一

三年二月、天心は、病気のためにボストン美術館へ休職願を出し、四月に日本へ帰国。九月に没した。<sup>(148)</sup>

## 第二節 英文著作の国外での位置づけ

岡倉天心の英文著作に対する出版当時の海外での評価は、堀岡が様々な英米の書評を邦訳している。書評の内容紹介に関しては、堀岡の研究に勝るものはないと思われるので、本論文では、天心の著作が如何なる分野の書物として扱われていたのかを見てみたいと思う。

イギリスの伝統ある日刊新聞の書評として今日まで名高い『*The Times Literary Supplement*』(以降、タイムズ紙文芸付録)は、天心の英文著作が出版された年代において、紙面に掲載した書籍に関しては、『Art (芸術)』『Drama (戯曲)』『History (歴史)』『Military (軍事)』『Oriental (東洋。対象はエジプト、インド、中国、日本など、非欧米圏を広く含むようである。)]』『Philosophy (哲学)』『Political (政治)』など、実に三十数種類に分類しており、書籍がどの分類に入れられているかは、各掲載日の新刊リスト上で確認出来るほか、その年の最終号に纏められたIndexでも見ることが出来る。

天心の『東洋の理想』は、一九〇三年二月十三日の紙面で新刊リストに載っており、その分類は『Art and Archaeology (芸術と考古学)』となっている。<sup>(150)</sup>そして、三月六日の紙面において書評が書かれている。<sup>(151)</sup>そもそも『東洋の理想』は、副題までを含めた原題では『*Ideals of The East; with Special Reference to the Art of Japan*』(東洋の理想、特に日本の芸術に関して)であるから、妥当な区分と言えるであろう。

一方、『日本の目覚め』は、タイムズ紙文芸付録において書評は書

かれておらず、一九〇五年二月一日付の新刊リスト上でその名が確認出来るのみとなっており、その分類は『Travel (旅行)』となっている。<sup>(152)</sup>年末のIndexを見ても、『日本の目覚め』の分類は、やはり『Travel』である。<sup>(153)</sup>タイムズ紙文芸付録のこの分類がどのような目安で行われていたかまでは、残念ながら調査が及ばなかったが、同日の『Travel』の欄で紹介されている他二冊が、『ラサ』——中央チベットの人々と国、及びイギリス政府によって一九〇三〜四年に送られた使節団の経過報告』や『メッカへの巡礼者たち——西暦一九〇二年、ヒジュラ歴一三一九年の偉大な巡礼の旅』といった、海外の調査報告や旅行記と思しきタイトルであるのを見る限り、これらに続いて天心の『日本の目覚め』が並ぶのは、やや奇異な印象を覚える。確かに、『日本の目覚め』は、日本の歴史や文化に関して綴っている書であり、それを詳細な地域文化報告という受け止め方をするならば、同日の他二冊と類するかも知れない。しかし、それにしても、海外紀行と並べるのは不思議の感を禁じ得ない。『日本の目覚め』は、後世の研究から引用するならば、「大ロシアと戦わざるを得なくなった小国日本の立場とその文化を、西欧に分からせようという意図が見える」と色川大吉が評し、「前二つの著書〔山越注：『東洋の理想』と『東洋の覚醒』〕にくらべて、いっそう政治的な性格をもっている」と宮川が分析しているような書物である。何故『Travel』に入れられたのだろうか。

尤も、『日本の目覚め』の分類について疑問を感じるのは、天心の著作が後世に及ぼした影響を踏まえての先入観だと片付けることも可能である。この時期の日本関連・日露戦争関連の書籍が、タイムズ紙文芸付録において、どのような分類で扱われていたか、日本人著者、

外国人著者とも合わせて、主だったものを見てみよう。

前年の一九〇四年のタイムズ紙文芸付録では、東京の金港堂から出版された*The Russo-Japanese War*という本が取り上げられている。同書は六月三日の紙面で「Shorter Notices of Books」という書評と呼ぶには短めの紹介欄で紹介され、同日の新刊リスト上では「Military」に分類されている。同書の二巻、三巻は、それぞれ八月一九日、九月二日の新刊リストに掲載されているが、ここではいずれも「History」の分類となっている。しかしIndexでは全巻一括で「Military」から見つけるようになってくる。

イギリスのジャーナリストであるアルフレッド・ステッドの『日本人による日本論 (*Japan by Japanese*)』は、一九〇四年八月一九日の新刊リスト上では「History」である。そして、九月二日の紙面で書評が書かれており、Indexでは「History」区分にはなく、「Travel」の区分となっている。尚、九月九日付の投書欄では、末松兼澄がタイムズ紙編集者に宛てて書いた、書評で指摘されたステッドの本の欠点を擁護する手紙が掲載されている。

一九〇五年一月二十日の新刊リストでは「Military」の区分で朝河貫一の『日露衝突 (*The Russo-Japanese Conflict*)』が掲載され、二日三日に同書の書評が掲載されている。これは、Indexでも同じく「Military」の区分となっている。三月一七日の新刊リストでは、「Travel」の中に、アメリカの宣教師であり明治学院で神学、帝国大学で哲学・倫理学を教えたG.W.ソックスがアメリカで出した*Imperial Japan. The Country and Its People*という本があり、これは年末のIndexでも「Travel」にある。四月二十一日の紙面には、天心の弟で英語学者の岡倉由三郎が著した『大和心 (*The Japanese Spirit*)』の書評が掲載さ

れているが、これは、同日の新刊リスト上では「Travel」の区分であり、年末のIndexでも「Travel」の区分である。六月二日の紙面には、イギリスのジャーナリストのベネット・バーリーが書いた*Empire of the East, or Japan and Russia at War*が「Military」の区分で新刊リストに載り、六月九日の紙面で書評が書かれているが、これはIndexでも「Military」に入っている。六月三〇日の新刊リストでは、「Oriental」の区分で、高石真五郎による「The Wisdom of the East Series.」として*Woman and Wisdom of Japan*という本が紹介されており、これはIndexでも「Oriental」に入っている。十月六日には、書評と新刊リストの「Political」の中で、アルフレッド・ステッドの*Great Japan: A Study of National Efficiency*と末松男爵(末松謙澄)の*The Risen Sun*が二冊合わせて紹介されている。ただし、ステッドの*Great Japan*も末松の*The Risen Sun*も、年末のIndexでは「Political」と「Travel」の両方の区分から見つけられるようになっている。十月二十七日付の紙面には、タイムズ紙軍事特派員記者が著した*The War in the Far East, 1904-1905*が、書評と新刊リストの「Military」の分類で紹介されている。これは年末のIndexでも「Military」に入っている。

これらを見ると、特に旅行記に類する著作でなくとも、天心の『日本の目覚め』同様に、「Travel」に入れられている日本関連の書籍があることが分かる。また、当初は「History」や「Political」の分類で扱われていても、後から「Travel」に入れ直されている書籍もあることが分かる。

少なくとも、タイトルから判断する限りでは、金港堂の本や朝河の『日露衝突』などのように、明らかに日露戦争に焦点を絞ったものは「Military」に入れられるが、『日本人による日本論』『大和心』など

日本の国民性や歴史文化について著したような本は、多くは文化紹介的な本として、「Travel」に入れられる傾向があると思われる。スレッドと末松の本が「Political」に入れられたのは、既に終結後としても、日露戦争という格別の関心事があり、それに加えて末松が日本の政治家であるという、著者の肩書き的な問題も影響していたのであろう。

その推測から考えるならば、『日本の目覚め』が日露戦争下であつてすら「Travel」の区分でしか扱われていないのは、イギリスにおいて、著者である天心はあくまで一文化人であり、その書物も政治的というよりは文化的な書物としか捉えられていなかったからであると推測されないだろうか。

『日本の目覚め』が紹介されたのは、書評ではなく新刊リストであるから、本の内容には一切触れていないが、タイトルの下に著者紹介は書かれている。内容を訳すと、「著者は一八八六年に西洋の芸術教育について報告する為にアメリカとヨーロッパへ送られ、帰国してすぐに東京の帝立美術学校の創設者にして初代校長となった。彼は西洋思想を受け売り導入するのに反対し、自国芸術の古代の伝統を保持する場として、日本美術院と呼ばれる私立学校を創設する為に、一八九八年にその学校を去った。この作品において（これは翻訳ではなく、英語で書かれたものだ）、彼は特に現代の発展と将来の結果を詳述して、歴史を描いている」となる。

一九〇四年七月六日付のギルグラー宛の手紙で、天心は、「出版者の序文のための私自身に関する若干の事実に関してですが、言うべきことはほんの僅かしかありませんので、簡単に述べてしまえます」として、自ら略歴を伝えている。<sup>(17)</sup>そして、そこで伝えられた内容が、ほぼ

そのまま、『日本の目覚め』の刊行者の序文に生かされており、このタイムズ紙文芸付録における著者紹介も、その刊行者序文さえ読んていけば書くことが出来る内容である。しかし、仮に、タイムズ紙文芸付録の編集者が序文しか読まずに『日本の目覚め』の分類を決めていたとしても、刊行者の序文にある、「彼は『黄禍』が存在しないこと、日本帝国は好戦的ではあるが、侵略の味方ではなく平和の味方であることを宣言する」といった文面は目にしたはずである。即ち、日露戦争当時、そのような主張を書いている著作であることが認識されていても、『日本の目覚め』は「Travel」へ分類されたということである。やはり、天心は政治的な思想家ではなく、芸術の専門家という文化人として認識されていたのだろう。

『茶の本』に関しては、刊行年である一九〇六年のタイムズ紙文芸付録を見る限りでは、残念ながら、書評にも新刊リストにも言及した形跡を見つけることが出来なかった。八月二十四日には *Masterpieces Selected from the Ukiyo-ye School* と「う審美書院の本が、十二月十四日には、天心が創設から関わっている国華社が出した *Masterpieces of Thirty Great Painter of Japan* の書評が掲載されるなどしている<sup>(18)</sup>、少なくとも芸術方面では、イギリスにおいて日本への関心はまだそれなりに在ったと思われる。それにもかかわらず、『茶の本』に関する情報が見当たらないのは、出版社がジョン・マレー社ではなく紙面への影響力が変わった為か、当時のイギリス出版業界の問題か、『茶の本』が分量的な薄さから軽んぜられた為かも知れない。

先に述べた通り、『東洋の理想』も、『日本の目覚め』も、ロンドンのジョン・マレー社からの出版であるし、朝河の『日露衝突』、由三郎の『大和心』、末松の *The Risen Sun* はロンドンのアーチボルト・コ

ンステイブル社という出版社から出ていた。<sup>(185)</sup> 日本人著者の本のみから傾向づけられるものではないだろうが、タイムズ紙文芸付録に取り上げられる為には、本の出版社というの、ある程度重要であったと思われる。ジョン・マレー社は、一七九〇年代には既に、イギリスで文学方面の主導的出版社と見なされていたというし、アーチボルト・コンステイブル社も、一九世紀初頭から展開していた出版社であるという。<sup>(186)</sup> そういった伝統ある出版社から出されたということも、彼らの著作の価値を高めることに繋がっていたはずである。

他方、タイムズ紙文芸付録を出しているタイムズ社は、一九〇六年から一九〇七年にかけて、本の正価販売を巡って、イギリスの出版業者たちの組織である出版協会と揉めており、一九〇六年五月には協会とタイムズ社で会談が持たれ、一九〇六年一〇月には、出版社側が、タイムズ社には文芸付録の為であれ、その他のためであれ、本を提供しないという申し合わせなども始めたほか、一九〇七年にはジョン・マレー社がタイムズ社を訴える裁判まで起きている。<sup>(187)</sup> 『茶の本』の出版は一九〇六年五月であり、出版の地もニューヨークであるから、この辺りのイギリス出版業界の影響は、特に受けていないかも知れない。しかし、この点から考えると、先に挙げたように、一九〇六年後半に日本の出版社が出した芸術書がタイムズ紙文芸付録に載っているのは、日本への関心の存在ばかりでなく、イギリス国内の本を書評に取り上げづらいタイムズ社側の事情もあるかも知れない。

また、ソーントン不破直子に拠れば、『日本の目覚め』の書評は出版直後の一年間に九編出ているが、『茶の本』に関しては四編、しかも内容に詳しく触れているのは三編のみであるという。そのように、『茶の本』が他の天心の著作に比べて重要視されなかったのは、題名

を一見した印象が、お茶好きの紳士淑女へお茶の缶に添えて贈るギフト・ブック的なものと見えるからであろうとしている。<sup>(188)</sup>

本節の最初に述べたように、当時の英米の書評の内容については、堀岡が著書内で多くの書評の邦訳を載せているので、本論文においては、そこから一部抜粋するに留めたいと思う。

まずは、各書評が『東洋の理想』を如何なる内容傾向の書物として読んだかを見てみたい。<sup>(189)</sup> ロンドン発行のタイムズ紙文芸付録は「筆者の岡倉は東洋の歴史と仏教考古学の知識にすぐれている学者である」「この小著は——取り扱われている主題のわりに余りにも短すぎるが

——極東芸術の背後にあるものを欧州人に説明するものであり、それを内側から書いたものである」「岡倉氏は日本の国家生活の変遷を辿り、その各時代が国の芸術に及ぼした特徴を述べている」というように書いている。同じくロンドン発行のザ・アセニウムは「彼の目的は日本の生活・思想、そして特に美術を、すべての文明中、最高で最も幅の広い、最も精神的なアジアの文明が一点に集まったエッセンスともいべき日本の美術を、西洋の科学主義・商業主義に侵されるのを防ぐことにある」と本の目的を読み解いている様子である。ニューヨーク発行のザ・アウトLOOKは「岡倉氏は東洋の考古学および美術の一流権威者である」「この書の第一の目的が、著者がはっきりと見ているアジアは一つであることを世界にはっきりと示すことであるなら、第二目的は世界に日本の芸術を正しく見、理解してもらうことにある」としている。シカゴ発行のザ・ダイアルは、天心は「著名な学者であり、美術鑑定家であって、彼の国の美術の学生なら誰でも知っている」「彼の視野は『偉大な母アジアは一つ』ということである」「本番の約半分が以上で、残りはそれに関連した日本美術史の大ざっ

ばな概要である」といった評価である。やはり全体として、東洋、特に日本の美術に関する本と見なされていた向きが窺える。ただし、その史的正確性については、多くの紙面でかなり疑われている。タイムズ紙文芸付録では、「ガンダーラ彫刻に見られるギリシア芸術の強い影響を否定しているのは著者自身の先人観だと考えざるを得ない」「彼の提供の不完全さは」「アジア芸術におけるインドの影響を買い被ったりする文学的偏見によるのである」と書かれ、ザ・アセニウムでは「詳細に論じようとするれば批判の余地の多い本である。序文と最後の二章を除くすべての章は、我々にとって全く受け容れることの出来ないインド、中国、日本の歴史の見方によっている。さらに詳しく吟味してみれば、アジアの思想は精神的どころか、根本的には物質的だということが分かる」とされ、ザ・ダイアルでは、「彼のインド、中国、日本の歴史に関する資料は、これまで我々が認識していたのと余りに異なるので、彼の言葉を素直に受け入れ難い。どこまでが根拠のあることで、どこまでが単なる作り話なのであるか」などと書かれている。

堀岡は、総合的には、『東洋の理想』では冒頭の『アジアは一つである』が一番よく引用される言葉となった。ただし、東洋の文化もしくは芸術に関してアジアは一つか否かが問題になったのであって、どの書評を見てもナシヨナリズムとかナシヨナリストという言葉は見いだされない<sup>(18)</sup>としていた。堀岡が邦訳を掲載している範囲だけでも、タイムズ紙文芸付録、ザ・アウトLOOK、ザ・ダイアルが、「アジアは一つである」という言葉に触れている。また、ザ・アセニウムとザ・ダイアルは、「内からの勝利か、さもなければ外からの強大な死か」という『東洋の理想』の結びの言葉も引用している。しかし、

ザ・アセニウムは、この結びを「幾分凄みを帯びて照らしているこの本の最後の言葉」と評しながらも、「スタイル・言葉、そして思想においても攘夷党が一八六〇年代初めの考え方を一八六〇年代終わりになつて必要を感じて加減したのを思い出させるような、この東京の日本美術院長の著書」と、やや皮肉みを感じる評価を与えるに留まり、ザ・ダイアルは、この結びをあくまでアジアの芸術文化の問題に関する言葉として受け止めているようである。また、抜粋引用した箇所で見えてきた通り、天心個人は、美術や考古学の学者という肩書きで認識されていた。堀岡の分析通り、天心をナシヨナリストと見なす向きは感じられない。

次に、『日本の目覚め』の書評に関して、同様に堀岡の研究から抜粋引用させてもらう<sup>(19)</sup>。ロンドン発行のザ・スペクテイターは『日本の目覚め』を『東洋の理想』の歴史の続編とも考えられる」と位置づけ、内容的には「日本が世界一流の強国たる地位を築いた事実は、政治や後期仏教・儒教・神道の宗教の影響による事を巧みに例証している」と評価している。同じくロンドン発行のザ・アカデミー・アンド・リテラチュアは「彼は祖国をかき乱した大政治運動について述べ、軍政的政治下に何世紀も眠ったこと、將軍を倒し王政復古のため大叛逆が行われたこと」「日本の現在の成長は決して雨後のたけのこでなく、国民性の断固とした土台の上でなされた」ことを書いたものであるとしている。ニューヨーク発行のザ・センチュリー・マガジンは「我々が知りたいのは、どうしてこの国民はこんなに西洋の文明の教育に飢え渴いていたのか、そしてどうしてこんなに早く政治的手腕・工芸、その他平和と戦争に関する種々の術についての教育を身につけることが出来たかということである」「彼の『日本の目覚め』は小冊

子だが、その与えてくれる情報・解説・暗示は大きい」としている。

全体としては、どの書評も、日本の今日までの歴史的発展の解説書として受けて止めているようである。各書評は、天心が著書内で黄禍に対し反論していることにも触れており、その受け止め方は各書評それぞれといった印象だが、そういった西洋批判の記述に最大の注意を払ってはいない。ザ・スペクテイターは「岡倉覚三が悪鬼としての『黄禍』を破壊しようと努める彼の言葉は、ことにロシアとドイツにおいて聞かれるべきである」と、黄禍論に対して他人事風情である。ザ・アカデミー・アンド・リテラチュアは「彼は黄禍の悪鬼と比較して白禍について言いたいことがある。そして彼は日本の進歩が全くの模倣であることを否定する。ある点では、彼は西洋、少なくとも英国に対して不公平である。彼は我々が我々の芸術の優越性を説くといっている。我々は愚かな国かもしれないが、そんなことをする程愚かではない」と、天心が書くような批判は自分達には当てはまらないといった態度で憤慨している。ザ・センチュリー・マガジンは、「彼は『黄禍』に対する恐怖を嘲笑し」と触れるに留まり、否定の意見も肯定の意見も書いていない。

また、ザ・センチュリー・マガジンは、書評のタイトルを「時の話題」目覚めた日本——岡倉の女性賞揚」としている通り、『日本の目覚め』の八章後半で書かれた女性の地位向上に関するところを最も大きく取り上げている。ただ、この書評に関しては、ある背景を踏まえておかねばならない。『日本の目覚め』の執筆に、センチュリー社関係者のギルダー夫妻が影響したことは、前節で触れた通りである。そして、塩崎に拠れば、一九〇四年五月一六日付で、ルーズベルト大統領から、ギルダー夫人に宛てて、次のような手紙が書かれていると

いう。

あなたがお送り下さった『東洋の理想』に大いに興味を引かれています。というのは、本の内容ももちろんですが、その本が西洋的思考ではなく、日本人の意見を表現しているからです。日本人の思想の弱点は、女性観ではないかと思われます。この点に関して彼らは大いに西洋から学ぶところがあります。(後略)<sup>(197)</sup>

恐らく、天心が『日本の目覚め』の執筆を進める上で、ギルダー夫妻から、この件は伝わっていたであろう。そして、天心も、このような指摘があったからこそ、『日本の目覚め』の八章に見られるような、東洋の秩序における母性の神聖などを述べたのだろう。とはいえず、反論だけではなく、西洋を見習い女性の地位向上に取り組まねばならないといったことも書いている辺りからは、流石に大統領から受けた意見に対し否定のみには出来なかつたという面も感じる。こういった経緯がある以上、センチュリー社も、『日本の目覚め』の書評を書くに当たって、日本女性に関する記述を最大限に取り上げるのは当然である。

『茶の本』について堀岡が紹介しているのは、ザ・インディペンデント、ザ・アセニウム、ザ・ダイアルの三点である。<sup>(198)</sup> ニューヨーク発行のザ・インディペンデントは『茶の本』は審美主義の領域のものである<sup>(199)</sup>。「この書には茶の歴史・詩・象徴主義、そして茶の、日本における宗教と芸術に対する関係の概観と共に、茶の全哲学が要約されている」としている。ロンドン発行のザ・アセニウムは、「岡倉覚三著『茶の本』は中国における色々の歴史的茶匠と日本の生活および芸

術の哲学を取り扱っている。著者は、我々が『東洋を理解』しようとしない、と不平がっている典型的な日本人紳士とは信じ難いほど、シエークスピア、アディソン、ジョンソン、ラム、サッカレーに共通している考え方に通暁し過ぎている」と、『東洋の理想』に対する書評の時と同様に皮肉みを帯びた書き方だが、一応評価しているようである。シカゴ発行のザ・ダイアルは、『茶の本』という題名はともすれば誤解を招き易い」「例えば『茶道——審美主義の宗教』とか『茶の湯の哲学』とした方がこの本のめざす読者の注意を促すのに適していると思う」「岡倉氏のエッセイは茶人の真の精神のもとに生まれ、完成された」としている。これらを見る限り、どの書評も概ね、『茶の本』に関して芸術哲学・審美主義の本という評価で一致していると言って良いだろう。

尚、日本関連の書籍を取り扱うだけあって、ここで挙げた多くの言論誌は日露戦争に於いて日本寄りの論調だったようである。塩崎に拠れば、ザ・インディペンデント、ザ・アウトLOOK、ザ・センチュリー・マガジンは、日露戦争中、反ロシア帝政活動家やジャーナリストによる内部事情告発やロシア批判の言論を掲載していた文芸・言論誌であった<sup>(194)</sup>。また、今回は紙幅の都合等もあり引用していないが、『日本の目覚め』について「五〇〇〇語近くからなるかなり詳細な」<sup>(195)</sup>「最上級の賛辞に満ちている」書評を載せたというザ・アリーナも、「メジャーな雑誌ではない」そうだが、日露戦争に際して「もともと専制主義のロシアは民主主義の旗手米國とは相容れない国で、進取の気性に富み、短期間で民主主義の導入に成功した日本を支持するのは当たり前」という論調の言論誌であったという<sup>(196)</sup>。また、ザ・センチュリー・マガジンは『日本の目覚め』の出版社であるセンチュリー社の

雑誌であるから、そもそも書評で低く評価することはないのでないかと思われる。イギリスの書評掲載紙の政治的な論調については調査が及ばなかったが、ザ・アセニウムも、ザ・スペクテイターも、一八二八年から続いている伝統ある評論誌のようである<sup>(197)</sup>。

ソントン不破直子は、『日本の目覚め』に関して、「アメリカで出た書評はすべて、この本を非常に好意的に紹介しているのに反し、イギリスの書評はその逆である」としているが、同氏の論文において述べられているところと拠れば、『日本の目覚め』の初版について出ている書評はアメリカで六編、イギリスで三編である。その数からイギリスの書評を傾向づけて良いのかや疑問である。どちらかというところ、『日本の目覚め』への関心はイギリスよりもアメリカの方が高かった、と言う方が適切ではなからうか。山崎新琉の研究に拠れば、アメリカで一九〇四年中に『日本の目覚め』に言及した新聞記事は一四紙あり、回数では述べ一七回になるとい<sup>(198)</sup>う。アメリカの主要な新聞・雑誌の総数なども考慮に入れねばならないが、『日本の目覚め』が出版されたのが一月という年末近くであることを踏まえると、それなりの頻度で取り上げられたと言って良いだろうか。山崎の研究はイギリスとの比較ではないが、ここから結論付けは出来ないが、少なくとも、アメリカでの『日本の目覚め』に対する関心の高さは伺える。また、ソントン不破直子自身が、酷評しているというザ・アセニウムとザ・アカデミー・アンド・リテラチュアの二誌を「日本のことはもちろん、この本の内容自体をよく理解していないように思われる」と述べ、残る一誌のザ・スペクテイターを「人名のまちがいが、史実のまちがいも全くない」と同時に、天心の内容を素直に理解し紹介している」書評と位置付けている。また、イギリスで酷評している二誌として挙げ

ているうち、ザ・アセニウムは堀岡の訳もなく、筆者の調査も及んでいないので何も述べられないが、ザ・アカデミー・アンド・リテラチュアの方に関して言えば、ソーントン不破直子自身が書いているように、暗示的過ぎる文体であることや、日本に関する基本的知識がない読者には分らないであろう説明の仕方を批判しているのである。それを酷評と称するべきなのかは微妙なところであるし、称したとしても本の様式の批判で性質の批判ではないと判断したので、今回検討する天心の英文著作の適切な評価を考える上では考慮から外した。

以上を踏まえた上で、紙面から受ける印象を総合すると、やはり天心の英文著作が出版された当時、少なくとも、海外においては、天心は政治性を帯びた著者とは見做されていなかったと思われる。執筆背景からして比較的政治性の強い『日本の目覚め』ですら、美術書ないし歴史書である『東洋の理想』の続編と見なすような向きも見える。堀岡に拠れば、『東洋の理想』も『日本の目覚め』も一九二〇年代に出版が途絶え、『東洋の理想』は一九七〇年に新版が出され、「専ら美術部門の本として扱われている」が、『日本の目覚め』の新版は出ていない。『茶の本』のみが一九三〇年代まで版を重ね、一九五六年、一九六四年に新版が出され、ある程度継続的に読まれ続けている。<sup>200</sup>その為、「西欧では天心は『茶の本』の著者として知られている」<sup>201</sup>。今日まで残されたその天心像が、当時からの彼の海外での受け止められ方を示唆しているだろう。

## 第二章 一九三〇年代中頃からの日本国内における英文著作の扱われ方

### 第一節 英文著作の邦訳・国内出版

進藤栄一によれば、日本の知的世界に訪れた天心ブームの最初が、「一九三〇年代中葉以後」であるという。その時、天心は、「大東亜戦争のイデオログとして」<sup>202</sup>「アジアの盟主」日本の命運を指し示した歴史の予言者として」描かれ、「日本浪曼派の保田與重郎や、浅野晃、亀井勝一郎らが、『アジアは一つ』を謳う天心を賞賛し、東亜解放のための大東亜『正戦』論を展開した」という。<sup>203</sup>

そのような流れに伴い、天心の英文著作の邦訳出版や、天心の評伝出版なども、この時期に急激に盛んになる。しかし、木下によれば、天心自身は、英文著作が日本語に翻訳されることを望んでいなかったようである。一九一三年五月十七日、『東洋の理想』を翻訳刊行したいと申し出た、雑誌『研鑽美術』の主幹である小池素康の申し出に対して、天心は、「是迄他ニモ翻訳申込の向き有之候へ共 一切御断り候次第二有之候」と断りの手紙を送っているという。<sup>204</sup>この手紙を収録している『天心とその書簡』で解説を書いている下村英時は、『東洋の理想』が「在印中ニヴェイタ女史の計らいによつてロンドンの書店に送られ、天心の校正を受けずに刊行されてしまったので、著者名が全部KAKASU-OKAKURAとひょい誤植がある。そんな関係上、今更これにふれるのがいやになつていたとみえる」と、天心の心情を推測している。また木下も、「岡倉は、この著書は旅行中に慌だしく

書いたもので不満の多い本だからこのままでは再刊したくないと思っ  
ていた」としている。<sup>(26)</sup>しかし、手直しさえ出来れば日本国内でも出版  
する気があったのか、それとも元から日本において出版する気がなく、  
断り文句として原稿の不十分さを挙げていただけなのかは、本人のみ  
ぞ知るところではないかと思われる。

天心に従い渡米した六角紫水の回想では、イギリスで『東洋の理  
想』が出版され好評を博し、出版社が再版の許可を求めてきた際、  
「若し校正、訂正の個所あらば、此の機会に直されたい」と申込んで  
来たが、先生は一向にお直しになる様子もなく、無雑作にそのまま、再  
版を御許可になった。同著述は、後年迄、幾度となく再版されたと  
いう。<sup>(26)</sup>木下は、この回想と先の手紙から総合して「再刊するなら改訂  
しなきゃいかんが、その気にもならないという態度が隠れている」と  
して、天心の『東洋の理想』への愛着の薄さが窺えるとしているが、  
それには少々賛成し難い。やはり日本で出版する気が皆無であり、校  
正の必要があると弁解したか、あるいは、日本国外で出版するにはそ  
のままでも問題はないが、国内で出版するには多くの注釈を付けねば  
ならないと考えたかではないかと思われる。

紫水の同じ回想に拠れば、天心は、『東洋の理想』のことを指して  
「多分英国では、印度をして自覚せしめる様なこの文章の出版は許す  
まい」との御懸念」と述べていたという。<sup>(26)</sup>木下は、この回想について、  
創作とは言わないまでも一九三六年という時期の回想である点に留意  
しなければならないとしている。また、弟子たちの回想が正確性に欠  
ける点は、第一章第一節で引用した大観の回想などでも見た通りであ  
る。とはいえ、もし実際に天心がそのように述べたのだとすれば、  
『東洋の理想』を書いた天心の意識の先にあったのはインドだという

ことになる。インド、引いては当時インドを支配していたイギリスに  
も向けたであろう英文著作を日本で出版するのは、天心にとつては本  
来の意図と異なることであるが故に、国内出版を断ったのではないだ  
ろうか。いずれの説を採るにしても憶測の域を出ないが、時間がな  
かったのか、やる気がなかったのか、理由は何にせよ、天心が国内出  
版の為に校正することは終ぞなかった。そのことから、天心が日本国  
内での自著の出版に積極的ではなかった様子は、窺い知ることが出来  
る。

金子に拠れば、『東洋の理想』の邦訳は、一九二二年に日本美術院  
から出された、美術院と天心関係者への非売品である『天心先生欧文  
著書抄訳』における福原麟太郎訳のものが最初であり、一般に知られ  
るようになるのは、一九三五年に聖文閣から天心の息子である一雄氏  
によって『岡倉天心全集(全三巻)』が刊行されてからであるという。  
その後、『東洋の理想』は、一九三八年に浅野晃訳で創元社から、一  
九四三年に村岡博訳で岩波書店から出されているという。『日本の目  
覚め』は、一九三九年に石田幹之助訳が三省堂から、一九四〇年に浅  
野晃訳が聖文閣から、村岡博訳が岩波文庫から出されたようである。  
他方、『茶の本』は他の著作よりも比較的早く、一九二九年には既に  
村岡博訳で岩波書店から出ていたという。<sup>(26)</sup>この村岡博訳の『茶の本』  
は、他の英文著作の邦訳出版の流れに乗ってか、一九四二年に再版さ  
れている。また、『日本の目覚め』と『茶の本』を一冊に纏めたもの  
が渡辺正知訳・稲田久道訳で一九三八年に聖文閣から出ている。

その他、天心を研究対象とした書籍として、一九三四年には清見陸  
郎の『岡倉天心』が平凡社から、一九三八年には同じく清見の『岡倉  
天心伝』が改造社から、一九三九年には、新たな『岡倉天心全集』が

聖文閣から出され、浅野晃の『岡倉天心論攷』が思潮社から、天心の息子の一雄氏の『父天心』が聖文閣から出ている。先に引用した六角紫水の回想も一九三六年のことである。また、堀岡に拠れば、第二次世界大戦中の英語教科書として、天心の『東洋の理想』、『日本の目覚め』、新渡戸稲造の『武士道』の抜粋を収録した、『Japan's Innate Vitality (日本の底力)』が一九四四年、北星堂から出ている。<sup>(20)</sup>

天心は、没後二十年以上経ってから、時の人として再登場させられた。紫水の回想の言葉を借りるならば、「先生を地下から呼び起こすことになったのである。」

## 第二節 浅野による天心評伝

原典への確認が及ばなかったが、金子に拠れば、保田與重郎は浅野晃が「明治最大の戦争文学とは天心の諸作品だ」と主張していたと書き残して<sup>(21)</sup>おり、また、中野好夫は浅野を「アジアは一つ」を政治的に宣伝した張本人と批判している<sup>(22)</sup>という。そして、金子自身、浅野の天心評伝を「その取り上げ方は多分に歪曲したもので、現時点で読んでみても、天心を時流におもねるように解釈した傾向が濃厚に感じられる」と評している<sup>(23)</sup>。また、色川も、「最初に村岡博の訳した岩波文庫版の『茶の本』や『日本の目覚め』を読んで深い感銘をおぼえた。それから浅野晃訳の『東洋の理想』だったか『東洋の覚醒』だったかにひどく鼓舞されて、ますますアメリカやイギリスへの反感を深めたおぼえがある。天心の原文が直接わたしたちをその方向に鼓舞したのか、浅野晃や保田與重郎らの解説がその方向に導いたのか、その辺のことははっきりしなかった」と、天心の英文著作との出会いを述懐している<sup>(24)</sup>。さらに、竹内に拠れば、日本文学報国会が三六五日

に古人の名言を当てた「国民座右銘」を選定し、「大東亜戦争」開戦日に天心の「アジアは一つ」が当てられた際、「これは、天心が、アジア十億の民の解放を懐ふ赤心を、大いなる嘆きの声として吐き出したもので、かやうな偉大な嘆きは、ただ日本人だった天心のみがよく発し得たところであつた。われわれは、ここに、畏くも、すめらみことを戴き奉る神国日本の修理固成の使命を、痛いまでの誇りと昂りをもつて回想するのである」と解説を書いたのも浅野であるという。

加えて、竹内は、「戦争中、天心をかついだ」日本浪漫派文学者の中でも熱心だったのが浅野であると述べている<sup>(25)</sup>。また、浅野が一九四三年に潮文閣から出した著書『樗牛と天心』などを見ても、「天心の『東洋の理想』は、アジアは一つだといふ言葉ではじまつてゐる。これは、親房の『神皇正統記』の最初に出てくる『大日本は神国なり』の語を想ひ起させるものである」「いざアジアの理想を！アジアは一つである！大いなるアジアは、一つである！四十年の昔、わが天心は、かくの如くに語った。そして今、大東亜戦争は、天心の予言を、速やかに実現しつつある」といった言説が並んでいる<sup>(26)</sup>。

また、天心の未発表の英文原稿を『東洋の覚醒』と題したのは、浅野である。この点については、浅野自身が、自著の中で、「わたしは一雄氏から、天心が生前筐底に秘めて、ついに発表しないで終つたという英文の原稿を見せてもらい、氏の希望もあつて、それに簡単な注を加えて聖文閣から出版した。『アジアのめざめ』と題したものがそれである」と述懐している<sup>(27)</sup>。木下は、スレンドラナートが回想の中で『東洋の覚醒』と思しき原稿を『アジアの覚醒』と呼んでいることや、一雄氏が『父天心』の中で『東洋の覚醒』を『日本の目覚め』の初稿と断定していることなどから、『東洋の覚醒』という書名の広まりを

「一人浅野晃の罪に帰するわけにはいかない」と一定の留意を示しつつも、『東洋の覚醒』というタイトルは「浅野の創作」であり、「昭和一〇年代につくられた岡倉像」の一端であるとして、自著内では「英文未完草稿」と呼ぶとしている<sup>(28)</sup>。尚、浅野は『樗牛と天心』の中で『東洋の覚醒』の原稿を「天心歿後数十年を経た最近に至つて、嗣子一雄氏の手で発見されたものである」としているが、正確には、発見したのは一雄氏ではなく、孫の古志郎氏である<sup>(29)</sup>。

これらのことから、浅野は、一九三〇年代半ば以降における天心像形成の一翼を担った重要な人物と考えて差し支えないと思われる。

この時期の天心像形成の責任は浅野にかなり負わされているような印象を受けるが、当の浅野の著述を見ると、天心の思想を国粹主義的に読解していった一因には、当時、天心が英文著作を著した背景があまり明らかになつていなかった、あるいは明らかになつていない部分に關しても、都合の良い解釈が行われてしまったことがあるのではないかと思われる。当時の時流と天心の著作に共鳴する点があったという批判や、浅野を含む日本浪曼派の思想・言論に關しての分析や反省は、現在まで多く為されているが、史料制約に因る分析ミスという観点からの反省は、筆者が見た範囲ではあまりないように思われる。

この論の根拠としてまず検討しておきたいのは、『岡倉天心論攷』の浅野の後書きである。浅野の天心に關する著書の一つである『岡倉天心論攷』は、一九三九年に思潮社から出されたのが最初で、一九八九年には永田書房から新装改訂版が出されている。しかし、この新装改訂版では、浅野が思潮社版で序文に代えて書いていた「東洋と西洋」という論文が省かれ、後書きも一九三九年当時のものではなく、一九八九年の新装改訂に当たつての内容に替えられている。

思潮社版の方の後書きで、浅野は、「(山越注…二部構成である『岡倉天心論攷』の第一部で)もつばら扱つたものは、天心の英文の著作『東洋の理想』と『東洋の覚醒』との両個である」「第二部では、もつばら天心の同じく英文の著作、『日本の覚醒』と『茶の本』とに拠つて、日本の自己認識の回復の問題を論じて見ようとした」「著者は天心の伝記に就いて特に調査したものでないから、この方面では殆んど全く清見陸郎氏の『岡倉天心』に拠つた」と書き記している<sup>(30)</sup>。また、

一九八九年に書かれた新装改訂版の後書きでは、『岡倉天心論攷』は、私の最初の天心評伝である。そのあと昭和三十三年三月に明德出版社から『岡倉天心』を出し、四十七年二月に日本文教社から『剣と美・私の岡倉天心』を出した。この頃から私は『東洋の理想』がスワミ・ヴィヴェカーナンダと天心との会見から生まれたことを知つた」と述べている<sup>(31)</sup>。これら二度の後書きから察するに、浅野が『岡倉天心論攷』を著し、また天心の未発表原稿を『東洋の覚醒』と題した当時は、これらの原稿がどのような経緯で書かれたものであるのか、調査が十分に行われておらず、浅野は、英文著作の内容のみから天心の思想理解を図つたのではないかと思われる。

まず、浅野が戦後までヴィヴェカーナンダと天心の交流を知らなかったらしき先の記述から、この一九三〇年代、『東洋の理想』執筆に關連した天心の足跡や人間関係が、どの程度明らかになつていたのかを見てみたい。

浅野が参照したという清見の『岡倉天心』を見ると、天心のインド旅行について触れているのは僅か十五頁である。全三一三頁の中で、これを長いとするか短いとするかは、天心の生涯のどの点に重点を置くかで判断は変わるだろう。内容的には、天心渡印当時に日本美術院

の機関紙である『日本美術』に掲載された天心の手紙に基づく天心の足取り、インドでラビンドラナートと交流が生まれたこと、東亜仏教大会の企画、この旅の後に『東洋の理想』が出版されたのにはインド旅行の影響が大きいであろうことなどが書かれている。しかしながら、「タゴール一族の家に止宿した」「タゴールによって率ゐられた革命家的思想家の会合にも累々列席」などと書かれているが、この時期の交友関係で明確に人物名まで書かれているのは「詩人タゴール」即ちラビンドラナートのみであり、マクラウドも、ヴィヴェカーナンダも、スレンドラナートも、ニヴェディタも登場しない。『東洋の理想』で序文を記したニヴェディタに関して、清見は、「著者紹介の意味に於てカルカッタに住するラマクリシュナ・ヴィヴェカーナンダのニヴェヂタといふ印度婦人が序文を書いてゐるが、ラマクリシュナとヴィヴェカーナンダとは師弟関係にあつた十九世紀印度宗教改革運動の二人傑である所から押すと、彼女も恐らくその宗団に属する一人でもあろう」と身元の推測を述べるのみとなっており、天心と如何なる関わりがあつた存在であるかは全く知られておらず、それ以上の考察もされていない様子である。また、「二人傑」の片方として名を出されているにもかかわらず、ヴィヴェカーナンダと天心の交流についても特に記述は見当たらない。

尤も、この時期の天心に関して記せる情報が少ないことについては、清見自身が「残されたその日記もないので、仔細に彼の古美術踏査の径路を跡付け得られないのは遺憾である」としている。<sup>(25)</sup>この清見の言葉の通り、インドでの天心を知ることが出来る史料が少ないのは、天心自身があまり多くを書き残していなかったというのも、原因の一つであろう。一九三九年に一雄氏が出した『父天心』の中であつてさえ、

渡印中のことに関しては「遺憾ながら残された日記のごときものがないので、詳細に知るよしもない。ただその直筆の消息は当時日本美術院に寄せたものが三四通あるばかりで、私宅によこしたものは全然一つもない」と述べられている。<sup>(26)</sup>

清見の『岡倉天心』を見る限り、『日本の目覚め』『茶の本』の刊行された時期は、当時から判明していたようである。『日本の目覚め』に関しては、「日本の覚醒」はその年（山越注…一九〇四年）十一月、ニューヨーク、センチュリー社から出版された二百三十ページほどの小著」とあり、『茶の本』に関しても「一九〇六年五月ニューヨーク、フォックス・ダフィールド社からの発刊」と、どちらも出版時期が近年の研究と相違なく明確に書かれている。ただ、『東洋の理想』に関しては、刊行時期が判然としなかつたらしい。清見は、「『東洋の理想』がロンドンのジョン・マレー社から発刊されたのは、（山越注…明治）三十六年の二三月の頃でもあつたらうか。一書に七月出版のやうに記してあるのは謬りであらう。何となればこの年の四五月頃の雑誌『太陽』や『早稲田学報』に『ロンドン・タイムス』のこの新著に対する批評が抄訳掲載されてゐるのだから」と書いている。第一章第二節で見た通り、『東洋の理想』の書評がタイムズ紙文芸付録に載つたのは一九〇三年（明治三十六年）の三月六日である。ここで清見が、タイムズ紙文芸付録のものではなく、国内の抄訳を参照していることから、主に国内史料に拠って執筆していたのではないかと思われる点、また、その国内史料の範囲内では確かな裏付けをもつて記述していた点が問題となる。

一点目の、清見がどうやら国内史料に拠っていたと思われる点については、考慮すべき事情もある。清見は、この一九三四年の『岡倉天

心』の執筆当時の環境に関して、自序で、「昨年九月以降全力を尽して関係文献の涉獵に耽ると同時に、他方故人の遺族、友朋、門下諸氏を歴訪して、能ふ限りの資料蒐集に力めた。しかも家に一銭の蓄へあるにあらざり、米塩屢々尽きて飢寒身に迫るの窮地に置かれたことも一再ではなかつた」と振り返っている。このように、当時の清見の生活状況が決して恵まれたものではなかつたことを考えると、海外史料を得るのは困難であつただろう。また、『東洋の理想』について、「本書はイギリスに於ても最早絶版になつてをり、わが国に於ても今は徒らにその書名のみが記憶せらるる状態にある」と述べていることから、一応、国外に史料を求めてはみたが、既に原書は手に入らない状態だつたのかも知れない。

二点目に関しては、第一章第一節で少し触れたように、一雄氏が『東洋の理想』の出版時期について推測のみから記述していることと比べて、清見を評価すべきであろう。一雄氏は『父天心』の中で『東洋の理想』の出版時期について、次のように書いている。

日本美術院の天心年譜にも、私の編んだ『岡倉天心全集』年譜にも明治三十六年七月となつてゐるが、清見陸郎氏の『岡倉天心』にしたがえば、同年二三月であつたと訂正している。しかし、このたび私が天心伝を著すについて、前後の關係から再検討をやつてみると、どうもそのいずれもが誤りではあるまいかと考えられる。たしかとはいえないが、この書は、前年の明治三十五年の七八月ごろ、まだ天心が渡印中に発刊をみたものではあるまいかと推定される理由がある。ベンガルの革命青年のあいだに、該書の冒頭の一句「アジアは一なり」が題目のごとく唱えられていたところを見ると、こ

の推定はたしかである。明治三十六年にしたところで、一月か二月であつて、断じて三月以後ではない。その証拠には同年の正月下旬、天心が横浜の某ホテルに、外人の一学者を訪問したさい、同行の英人某から『東洋の理想』の著者として紹介されている。そうすると、インド青年のあいだに喧伝されていた「アジアは一なり」の一句は、原稿を読んだ人から伝えられたものではなからうか。

第一章第一節で引用したスレンドラナートの回想にもあつたように、天心のインド滞在中に、少なくともニヴェディタは、『東洋の理想』の原稿を読んでゐた。また、『東洋の覚醒』と思しき『アジアの覚醒』の原稿に関しても、スレンドラナートを含むインドの青年達は、天心から読み聞かせられてゐた。したがつて、「ベンガルの革命青年」の間で「アジアは一つ」の文言が広まつたことに関しては、ニヴェディタから伝え聞いたか、天心から聞いたか、あるいは、実は原稿の段階でそれなりの人数に読まれていた可能性などを考えられるだろう。したがつて、「アジアは一つ」の文言がインドの青年達の間を広まつていたというだけで、その時点で既に『東洋の理想』が本として出版されていたことを「たしかである」とするのは、些か早計であらう。一雄氏がこの推測を立てた段階でスレンドラナートの回想を知らなかつたならば、そのような推定を立てても致し方ないが、一雄氏の『父天心』では、スレンドラナートの回想が引用されているのである。

この辺りの推定の甘さを一旦閑却して、一九〇三年一月に天心が『東洋の理想』の著者として紹介されていたとする一雄氏の逸話を信じるとしても、『東洋の理想』出版時期は、せいぜい早くても、一九

〇三年一月か、前年の十二月くらいで見るのが妥当ではないだろうか。近年の研究を見る限りでは、『東洋の理想』の出版時期については、堀岡が「一九〇三年二月初め、もしくは一月」とし、森田が一九〇三年二月としている。<sup>(234)</sup>

第一章第二節で触れた通り、『東洋の理想』がタイムズ紙文芸付録の新刊リストに載ったのは一九〇三年二月十三日である。タイムズ紙文芸付録は、『日本の目覚め』の出版社をジョン・マレー社の方で表記している<sup>(235)</sup>ので、『日本の目覚め』の刊行から新刊リスト掲載までの期間が判然としていれば、同じジョン・マレー社からの出版でタイムズ紙文芸付録に掲載されたものとして、『東洋の理想』についても、新刊リスト掲載から刊行時期を逆算出来たかも知れない。しかし、『日本の目覚め』は、ニューヨークでのセンチューリー社からの発行は一九〇四年十一月と判明しているようであるが、ロンドンのジョン・マレー社からの発行に関しては、平凡社版『岡倉天心全集』の年譜などを<sup>(236)</sup>見ても、一九〇五年中ということまでしか判明していないようである。<sup>(236)</sup> ソートン不破直子に拠れば、『日本の目覚め』の初版は「アメリカのセンチューリー社とイギリスのジョン・マレー社からほぼ同時に出版された」というし、<sup>(237)</sup> タイムズ紙文芸付録での『日本の目覚め』の新刊リスト掲載も一九〇五年二月一日であるから、一九〇五年一月頃と推測しても良いだろうか。

天心の著作以外を参考にすると、一九〇五年十月六日付のタイムズ紙文芸付録に新刊情報があった末松の *The Risen Sun* は、一九〇五年九月にロンドンのアーチボルト・コンステイブル社から刊行されているという。<sup>(238)</sup> ここから考えると、イギリス国内の出版社から出ているならば、本の刊行からタイムズ紙文芸付録の新刊リスト掲載までの期間

は、長く空いても一カ月程度と見て良いだろうか。そう考えると、『東洋の理想』も、一九〇三年一月刊行の可能性までは捨てきれないが、一雄氏の一九〇二年刊行という説は無理がある。

いずれにせよ、『東洋の理想』の出版時期を巡る清見の記述は、史料に基づく推定の論拠があり、近年の研究とも一致していることは、評価すべきだろう。スレンドラナートの回想が書かれたのは一九三六年であるから、一九三四年に『岡倉天心』を出した清見には、それを参照するのは不可能である。そして、天心の手紙などもほほない状況では、天心の評伝執筆に当たり、インドに関する情報は不足せざるを得なかった。このように、インドでの交友関係に関してほとんど知られぬまま、清見の天心評伝は書かれていた。しかも、それは、当時の史料不足が招いた事態と思われる。即ち、当初、天心の英文著作が執筆背景から読み解かれていかなかった原因の一端は、史料不足に在ったとも言えるであろう。

この清見の著書に「殆んど全く」「拠つた」ならば、浅野の研究に多少の不備が出るのは当然のことと思われる。浅野は、『岡倉天心論攷』の中で、『東洋の理想』も、『東洋の覚醒』も、この旅行（山越注・インド旅行）の過程においてその稿が成っている<sup>(239)</sup>として、当時のインドの情勢や有名な思想家について書き、詩人ラビンドラナート・タゴールの名も挙げている。しかし、「天心の印度旅行において、彼が、この詩人哲学者と如何なる交渉をもったかは、不幸にして詳かでない。いましばらく清見陸郎氏の記すところにしたがえば、天心とタゴールとは、一見して旧知の如く結びつけられた<sup>(240)</sup>」として、タゴールが天心没後に日本を訪れ哀悼したことなどを記述するに留まっている。これらのことから考えると、やはり、清見が記述した以上のこと

は知らずに、浅野は『岡倉天心論攷』を書いたのだろう。

そういった滞印中の天心に関する情報不足の為か、浅野は、『岡倉天心論攷』の中で、『東洋の理想』の精神を明らかにする一端として、その執筆が行われた天心のインド旅行における出来事ではなく、一九〇四年、アメリカ、セントルイス万国博覧会における天心の講演を引用している。

そのセントルイスにおける講演を、浅野は、「現代文明に対する天心の激しい抗議」が「端的に吐露されている」ものと位置づけているのだが、金子のこの講演に対する評を借りるならば、実際のところ、「天心は講演をアメリカ人への露骨な媚と聞こえなくもない内容で始め」ている。<sup>(24)</sup>講演冒頭の挨拶は、次のようなものである。

議長、そして紳士淑女の皆様——「絵画における近代の問題」について講演するよう私を招待してくださいという、皆様が授けてくださいました名誉に、感謝申し上げますと同時に、皆様にお話するにあたって大変狼狽しておりますことを認めざるを得ません。我々日本の子らが、ペリー提督指揮下の皆様からの最初の大使一行という丁重な先例によって、国際礼譲に加わることを許されたのは僅か半世紀前のことです。それ以来、我々の中で、アメリカの名は、西洋文化の最良のものと結びつけられてきました。我々は皆様の足元に座してそのお話を耳を傾けることにすっかり慣れてしまっているのです、皆様のような博識な聴衆を前に立つというのは、まことに奇妙なことに思えます。<sup>(25)</sup>

この天心の弁に対して、金子は「天心を含めた当時の日本人が、は

たしてアメリカ文化を西洋で最良のものと考えていただろうか」と疑問を呈しているのだが、これが天心の本心であるか社交辞令であるかは、この場においてはあまり大きな問題ではないと思われる。天心はアメリカの聴衆を前に、そういった言葉を表明出来る人物であった。少なくとも、それは確かな事実として分かる。

清見の『岡倉天心』において、セントルイスの講演は、まず本編中で軽く紹介されており、その後、同著の附録において、「天心の代表作『東洋の理想』」「日露戦争と天心の述作」「天心のセント・ルイス講演」と、英文著作に並べて、より詳細な紹介の為に一節設けられている。しかし、本編中でも附録の方でも、こういった天心の冒頭の挨拶には全く触れられていない。このセントルイス講演について、清見は、講演の邦訳も一部掲載して内容を紹介しているのだが、引用箇所は、講演後半部分からのみである。<sup>(26)</sup>

また、浅野は、『岡倉天心論攷』執筆時点では、セントルイスの講演について英文原典を目にしておらず、この清見の引用した断片を読んだのみである可能性がある。先に触れた『岡倉天心論攷』の後書きからして、恐らく英文原典に触れたのは英文著作のみだと思われる点に加え、浅野が『岡倉天心論攷』で引用している天心の講演内容は、全て清見が引用した範囲内のものでだけである。その上、講演引用文は清見の邦訳文と全体的に酷似した文章であり、さらに言うならば、数カ所、文章内容の欠落や編集が生じている。<sup>(27)</sup>原文は一つなのであるから、翻訳文が似通うのは、ある程度起こり得る致し方ない問題である。また原文を参照したとしても、見落としなどにより欠落が生じることもあるだろう。しかし、原文を参照したにせよ、清見が引用した断片を見ただけにせよ、浅野の研究において見落とされた点があるのは明

確である。浅野は、『岡倉天心論攷』の中で、次のようにセントルイス講演の引用を終えている。

現在の戦争におけるわが国民の英雄的な自己献身の中に、古い日本精神の死んでゐないことを見るのはわれわれの喜びである。われわれの最大の期待は、過去に遭遇した幾多の困難にもかかわらず発展を遂げて来た芸術それ自体の生活力にかかつてゐる。近代社会がわれわれの前に提起した法外な矛盾に直面して、執拗なわれわれの誇りはいつさうわれわれを鼓舞する。いまこそわれわれは、アジアの芸術的遺産を擁護し得る者が、われわれ以外にないことを感じるのだ。この戦ひは最後まで戦かひ抜かれねばならない。以上で天心のこの有名な講演は終つてゐる。<sup>26</sup>

「以上で天心のこの有名な講演は終つてゐる」というが、それは誤りである。清見の『岡倉天心』では、本編中では「〔前略〕今こそ我はアジアの芸術的遺産を擁護し得る者が我我以外にないことを感ずるのです。この戦ひは最後まで戦ひ尽されねばなりません。』約一時間の講演を天心は右の言葉を以て結んだ」という記述であるし、附録の方でも、「彼は更に声を励まして次の言葉を述べた。さうして満堂をゆるがす喝采の中に壇を下つたのだつた。『現在の戦争に於けるわが国民のヒロイックな犠牲の中に（中略）この戦ひは最後まで戦ひ尽されねばなりません。』<sup>26</sup>」という書き方である。その為、清見の引用だけを参照すると、それで講演が終わつたように読める。しかし、実際の講演には、あと一段落続きがある。

もしかしたら、皆様は、私が芸術における近代の問題をあまりに暗い色で描き出したように思われているかも知れません。問題には明るい面もあります。西洋社会自身が、問題のより良い理解に目覚めてきています。現在の芸術活動の懸念に、真面目な思想家たちが気付き、世界的な衰微の原因を案じて研究するようになっていきます。我々はまさに社会を芸術のために真に調整しようと動き出すべき時なのです。もし、私の言葉が、東洋の状況の重大な本質へと皆様様の注意を向ける役に立ちましたら、私は大変ありがたく思うことでしょう。人間性の名において、私はこれらの世界的問題の解決に向けて、芸術家と芸術愛好家の兄弟たちに呼びかけるものであります。<sup>26</sup>

「芸術家と芸術愛好家の兄弟たちに呼びかけるものであります」という締め括りの言葉は、天心が『東洋の覚醒』冒頭で記した「アジアの兄弟姉妹よ」という呼び掛け、あるいは、天心が影響を受けたかも知れない、一八九三年のシカゴ万国博覧会におけるヴィヴェカーナンダの「アメリカの姉妹兄弟よ」という呼び掛けに通じるものを感じる。開催都市は異なれども、ヴィヴェカーナンダと同じくアメリカで開かれた万国博覧会で演説を為せたという意味では、天心にも感慨深く思うところはあつたのではないだろうか。

その点はともかく、清見と浅野の講演の引用上での誤りに問題を戻そう。この本来の締め括りまで掲載している平凡社版『岡倉天心全集』は、一九〇六年に出版されたCongress of Arts and Science所載のものを底本としており、筆者も邦訳するに当たっては同書に拠つただが、平凡社版『岡倉天心全集』の解題に拠れば、「本文のち“Modern

Art from A Japanese Point of View”と改題されて『The International Quarterly, vol. 11, No.2, July 1905.』に転載されたが、冒頭と末尾の挨拶部分がおよそ十行ずつ削除され、部分的に改変が施されている」という。そして、このセントルイス講演は「国内では日本美術院版『天心全集』(大正十一年九月二日、和綴三冊)の乙(英文篇)に収録されたが、これは『Modern Art from A Japanese Point of View』のほうであった」といふ。<sup>(20)</sup>

インターナショナル・クォーターリーは、フォックス・ダフィールド社の刊行物であり、セントルイス講演が収録された七月号の一つ前である四月号には、『茶の本』の第一章である「The Cup of Humanity」も載っている。その削除改変版では、『Congress of Arts and Science』所載の英文で、第一段落、第二段落、第三段落一行目までに相当する部分が削られている。その代わり、削られた段落の表現を部分的に借りた内容の要約改変とでも言うべきものが、第一段落として独自に作られ、第二段落は、本来の英文で第三段落二行目に相当する部分から始まっている。削除改変版の一段落目は、次のようになっている。

この小論は、告白です——つまり、訴えかけです。訴えかけとは、つまり、抗議です。そして、抗議というのは、えてして退屈でうんざりするようなものです。その抗議というのは、まず第一に、日本の見地から見た近代美術の問題に関係します。日本絵画の現在の困難が、部分的にあなた方が我々にもたらした近代国家存立の光と影に負うと、もし我々が見なしたならば、状況は笑えたものではありません。その報いがあなた方に襲いかかり、まさにその問題に関する私の役に立たない発表に耳を貸すことを求められるのです——そ

の問題の遠く離れた純粹な原因は、あなた方自身なのですから。しかしながら、極東の見地は、あなた方にとって全くもって興味のないものではないだろうと、私は確信しているのです。<sup>(21)</sup>

このように、削除改変版では、天心のアメリカに対する感謝の挨拶は、跡形もなくなっている。また、削除改変版では、清見らが記した通り、「The battle must be fought out to the very last. (この戦いは最後まで戦い抜かれねばならない)」で講演文が終わっている。

この削除改変が、天心自ら希望して行ったことなのか、フォックス・ダフィールド社から紙幅の都合を申し入れられてやむを得ず行ったことなのか、あるいは、フォックス・ダフィールド社の編集者が勝手に行ったことなのかは、定かではない。

いずれにせよ、一九三〇年代当時の日本における天心研究では、この削除改変版が参照されていた。清見はセントルイスの講演について「アメリカでは『日本の見地より観たる近代美術』(Modern Art from a Japanese Point of View)と改題されて『クォーターリー・レビュー』に出た」と記している。<sup>(22)</sup>クォーターリー・レビューという名の刊行物は、ジョン・マレー社のものがあるようだが、これは単純に、インターナショナル・クォーターリーがクォーターリー・レビューと混同されて書かれたものであると思われる。日本美術院版『天心全集』の乙の前書きでは、「Modern Art from a Japanese Point of View」が収録されたのは『the Quarterly Review (Vol. XI, No.2) of July, 1905』とされている<sup>(23)</sup>ので、恐らく清見はそれを参照し、そのまま書いたのであるが、その巻号と年月日が当たるのはインターナショナル・クォーターリーである。管見の限り、一九〇五年七月のクォーターリー・レビューはVol.203、

No.404であるし、天心の講演文は見当たらなかった。<sup>(255)</sup>

ともかく「Modern Art from a Japanese Point of View」という題と、講演文の締め括りから考える限り、この削除改変版を、清見は講演の本来の全文だと思っていたに違いない。即ち、原典として見たのは冒頭と末尾が欠落した英文であったということになる。このことから考えると、清見が本来よりも手前部分を末尾と判断したのは止むを得ない事態である。浅野も、セントルイスの講演を「絵画における近代的諸問題」という題でなされ、のち『日本の見地より観たる近代芸術』と改題されて、「クォーター・レビュー」に掲載された<sup>(256)</sup>とされているので、清見の邦訳しか参照していなかったにせよ、日本美術院版『天心全集』を参照したにせよ、やはり冒頭における天心のアメリカの聴衆への態度は知り得なかった。その状態での知識を基に描かれた天心像が歪んでしまうのは、ある程度は当然の結果とも言えるだろう。

しかし、この講演文の一部欠落により、天心の印象が大きく変わってしまったであろう点は、重く受け止めるべきである。塩崎は「自分の専門は岡倉天心ではない」と明言しているが、同氏による金子堅太郎と天心に関する研究は、この問題と関連付けて考えると大変興味深い。<sup>(258)</sup>

天心がアメリカで『日本の目覚め』を著すなどしていたのと同時期、金子堅太郎も「当時アメリカにおいて半ば公的に対日世論工作の任を担っていた」ということは、<sup>(259)</sup>第一章第一節で既に触れた。そして、塩田力蔵は、「岡倉氏が『アウエークニング』を書いた時」「日本が威張る場合ではないと、金子に叱られた」として、不平の意を漏らしてゐた」と回想している。<sup>(260)</sup>ただ、繰り返すが、弟子たちのそういった証言

があるだけで、天心は「金子批判を行っていない」<sup>(261)</sup>。塩崎に拠れば、「岡倉関係者の金子批判は」「高まりつつあったアジア主義の擁護者として岡倉を祀り上げるため、親米派として知られた金子を高まりつつあった反米感情に則して叩くというレトリック」で行われた可能性があるという。<sup>(262)</sup>その為、これらの回想は、先の大観や紫水の回想ともども、信憑性に問題がある。また、塩崎は、日露戦争中から既に天心関係者の金子に対する怨恨を感じられる言論が見られることから、「金子ばかりがややほやされ、岡倉の功績が日本で無視されていたこと」への不満が日露戦争中からあり、日露戦争後に、文展の日本画部門の審査員に関して、第一回は天心率いる日本美術院の「新派」が占めていたのを、第二回から金子の率いる「旧派」側が増え、尚且つ、金子が後年、「彼等の所謂西洋画を真似た日本画なるものは要するに猿猴の冠冕せるものに過ない」などと「新派」を批判する見解を述べたのが、根深い怨恨になったのだろうとしている。<sup>(263)</sup>

いずれにせよ、そういった要因が複合して、「岡倉の弟子や身内、関係者から金子は目の敵とされ」るようになったらしい。その「目の敵」とされている一例として、塩崎は、清見の次の記述を挙げている。

天心は、ひた向にその著書の中で黄禍説の実に笑ふに堪へたる妄説なる事を論証したが、同時に彼は日本の今度の戦勝を目して、古き東洋の伝統をかなぐり捨て、只管に西方新文明を吸収同化するに力めた結果なりとする、余りにも白人本位的な観方に強い抗議を送った。この観方は必ずしも欧米人の間でばかり行はれたものではなく、日本人自身によつても往往にして口にし筆にされた。イギリスに使用する末松謙澄の一行が、天心等と船を同じうして太平洋を渡つ

たことはこの章の冒頭にも書いたが、それと同性質の使命を帯びて合衆国に在った某氏の如き、即ちこの種の日本人の一人だった。アメリカ人の同情を博することが絶対的に必要だったとは云へ、頻頻として伝へ来る目ざましい日本の勝利を以て、ペリリ提督の誘導に帰さうとするやうなこの祖国の阿諛的態度を眼にすると、天心は正面から反対の叫びを挙げずにはゐられなくなつた。<sup>(26)</sup>

塩崎に拠れば、「金子はまだ存命だったため名前は伏せてあるが、文中の某氏が金子を指すことは間違いない」という。

清見の記述も、『日本の目覚め』の内容解釈に限って言えば、然程間違ではない。しかしながら、金子堅太郎のことを「日本の勝利を以て、ペリリ提督の誘導に帰さうとするやうなこの祖国の大官の阿諛的態度」と批判した清見の参照出来なかつた天心のセントルイス講演冒頭文に、まさに「我々日本の子らが、ペリリ提督指揮下の皆様からの最初の大使一行という丁重な先例によって、国際礼讓に加わることを許されたのは僅か半世紀前のことです」というやうな挨拶が含まれていたというのは、ある種の皮肉を感じざるを得ない。

また、同じやうに天心が冒頭からアメリカに対し感謝を述べている言説の一つとして、イヴニング・ポストに掲載された『日本と黄禍』がある。

日本人にとつて、今この時アメリカが日本に対し示してくれている自発的な同情ほど満足なものはないでしょう。恐らく、我々が最近国際礼讓に加わることを許されたのは、合衆国の親切の一例ですし、(中略)我々はそれ「アメリカが日本に示す同情」を、正義と

人間的自由への恒久的意識であり、またそれらに対する愛の証拠であると見なしています——その正義と自由とは、自然的で、根源的で、そしてアメリカ人の良心のもつとも固有の特性であり、それらがアメリカの人々の思いやりをこれまで喚起してきたのです。それは我々にとつて、中国の領土保全と、平和と通商のための門戸開放という我々の主張が、偏見のない啓蒙された世界中の人々の心からの賛成に巡り会えるだろうという、何物にも変えがたい証拠です。<sup>(26)</sup>

この『日本と黄禍』の時点では、天心も、日本の主張はアメリカの門戸開放の方針にも合致するという旨を含蓄して書いているから、金子と大差ないとも言えるだろう。

しかし、岡本に拠れば、『日本と黄禍』は、一九四三年の大観の回想で存在が言及されているにもかかわらず、一九二二年の日本美術院編の『天心全集』にも、一九三五―三六年にかけて出された聖文閣版『岡倉天心全集』にも、聖文閣から名を変えた六芸社によって出された一九三九年の『岡倉天心全集』にも、敗戦により編纂が途絶えた一九四四―四五年に作られた創元社版『天心全集』にも、収録されることはなかつたという。<sup>(26)</sup>

そして、こういった史料の欠如と曖昧な回想証言に基づいた天心像は、後々まで受け継がれていくことになる。保田は、恐らく清見など天心評伝を受けて、『日本の目覚め』を「これは(山越注…日露)戦時中の遣米使節がことごとくに日本の躍進を先進諸国の指導援助によると懇願努めた哀訴の口調に憤慨して著したもの」という位置づけで述べている。<sup>(26)</sup>

『東洋の理想』の執筆背景がある程度明らかになるのは、一雄氏に

よって、一九三九年に『父天心』が出されてからになる。一九三九年は、浅野の思潮社版の『岡倉天心論攷』が出されたのと同年であるが、同書の後書きで、「なほ、近く、六芸社から、天心の嗣子岡倉一雄氏の『父天心を語る』が出た。これによつて多少の新しい消息、就中、天心の支那および印度旅行のそれが、附加されたのはわれわれの喜びである。ただ、この稿では遂に参照することを得なかつたのは遺憾である」と述べているので、恐らく、浅野は、『父天心』の概要は聞き及んでいたのかも知れないが、実際の内容は見ないうちに、『岡倉天心論攷』を書き上げたのだろう。

一雄氏の『父天心』によつて、新たな情報は増えたが、一雄氏の推定にやや根拠のない要素が混じっているのは、先に述べた通りである。また、一雄氏の『父天心』で加わつた天心に関する「新しい消息」の一つが、スレンドラナートの回想であるが、堀岡の言葉を借りるなら、一雄氏によるスレンドラナートの回想の引用は「堀至徳の日記やヴェエカーナダの書簡などの知られていなかった時点において最も賢い方法ではあつたが、残念なことに訳の徹底していない箇所が多い<sup>(20)</sup>」。一雄氏の『父天心』の中におけるスレンドラナートの回想の邦訳の不備について、一例を挙げるなら、第一章第一節で引用した『アジアの覚醒』を執筆中の天心の様子について、山口の邦訳で言うところ、「岡倉は我々に批評を乞ひ、否、批評を強要し」から「疑念を通り越して確信に近いものとさえなつてゐる」までに相当する部分が、丸々抜け落ちてゐる<sup>(21)</sup>。それでも、この回想がもたらされたことは、当時の天心研究を進ませるものであつた。

『父天心』の中では、第一章第一節で引用したように、マクラウドに関する言及もあるし、「インド教の高僧スワミ・ヴィヴェカナンダ

ンの会下にあつた、英人ニヴェディタ女史」というように、ニヴェディタに関する情報もやや明瞭になつてゐる<sup>(22)</sup>。これに伴い、一九四一年に出版された『日本精神史論攷』の中では、浅野は、一雄氏の『父天心』を参照し、またそこからスレンドラナートの回想も引用し、「『東洋の理想』は、少くとも天心の印度旅行なしには完成されなかつたものであることだけは、確言しておく必要があるだらう」と、天心のインド旅行の重要性を念頭においた執筆を行っている<sup>(23)</sup>。

そして、この『日本精神史論攷』で述べられている浅野の見解には、今一度評価されて然るべきだと思われる分析も見られる。それは、天心が『東洋の理想』『東洋の覚醒』を英語で記した理由と、『東洋の覚醒』が未発表に終わった理由に関する考察である。

浅野は、『東洋の理想』『東洋の覚醒』が英文で書かれた理由について、「これらのものを殊更英文で書いた理由は何処にあつたのか?」と問題提起し、「普通には日本及び東洋の歴史なり真実の相なりを、汎く欧米の識者に訴へんがためであつたとされるのであるが、これはさうのみではないやうである」「アピールの対象は、主としてアジアの諸民族であつたらしい」と述べる。それは、「アジアの兄弟姉妹たちよ!」という『東洋の覚醒』の冒頭の呼び掛けを踏まえているのは勿論であるが、何よりも根拠となるのは、当時のインドの状態である。そもそも、「印度は、国が四分五裂してをり、種族、階級、信仰に於いてそれぞれ相違し、従つて土俗語もみな異り、普通の印度の国語といふものをもつてゐなかつた」が、「英国が土民懐柔の一策として勵行した英語による教育が、英語の普及に成功するにつれて、印度の民族に英語といふ共通の言葉、いはば代用的国語ともいふべきものを与へる結果となり、これによつて全印度に国民的自覚を促す上の一つの

最も有力な結合手段を与へる結果となるに至った」のだと、浅野は分析する。<sup>(23)</sup> 細かな言葉の用い方の問題などはあるが、浅野の記述は、今日の一般的な世界史の知識と照らし合わせても、概ね問題ない内容で書かれていると言って良いだろう。

また、代用国語としての英語の重要性という点に関しては、天心自身もある程度意識していたと思われる記述が、『東洋の覚醒』の中にもある。

アジアの国々は互いに孤立しているため、このぞつとするような事態の総体的な意味を把握することができないでいる。各国は、たとえば王朝の衰退、個々の権力の怠慢、天の特別の配剤を、自国に特殊の問題と見なしている。彼らは自国の厄介な戦いに没頭していて、まさに同じ不幸が隣邦を見舞っている事実を見落としている。  
(中略) 今日、われわれが互いに知り合うことがいかに少ないかは、驚くほどである。われわれはヨーロッパのあらゆる言語をやたらに喋弁しているが、誰が自国語以外に東洋の言葉を一つでも知っているであろうか。<sup>(24)</sup>

しかし、運命のアイロニーとは不思議なものである！ ヨーロッパの帝国主義は、やがて自身を破壊することになる武器をみずから提供した。彼らの攻撃的な商業は、蒸気船と鉄道を、観念の共有を、促進し、国民を単一の全体に溶接する電信と新聞を、われわれにあたえた。(中略) 私はいまはかならず彼らの言語を用いて諸君に訴えることができるのであるが、このことが東洋の一体化を意味しているのである。<sup>(25)</sup>

岡本は、これらの記述から、天心の中におけるコミュニケーション手段としての英語が帯びる複雑な意味を読み取っている。岡本は、インドを訪れた天心の中で、「英語を自在に操ることによりインドの知識人たちとの豊かな交流が可能となった反面、植民者の言語を介して円滑なコミュニケーションが成立してしまう『非西洋』圏の文化的弱者としての意識が、岡倉の中で強められるに至った」のだとしている。そして、「著述のなかで『アジア』という文明像を創造して欧米やインドに向けて発信」するには「強者の言語である英語を介さねば連帯の呼びかけすらできない」かったが、同時に、「コミュニケーション手段において当初から強者の言語に規定されているからこそ弱者としての立場がより鮮明に自覚され、かえって連帯の必要性が高まる」こととなり、「岡倉とインドの知識人たちの逆説的な立場が示され」たのだとしている。<sup>(26)</sup>

この岡本の意見を支持しつつ、塩出浩之は、「ヨーロッパによって一体化されたアジアの内部においては、その境遇に抗しようとする相互の呼びかけも、さしあたり共有するヨーロッパの言語を通じてなされざるをえなかった」が、「天心は、これを避けようのない事態として受け入れ、積極的に活用しようとしていた」のだとしており、天心が英語という言語を用いたことを、岡本よりも積極的な姿勢として解釈しているようである。<sup>(27)</sup>

前節でも触れた紫水の回想をもう一度引き合いに出すならば、『東洋の理想』の出版に当たって天心は、「『多分英国では、印度をして自覚せしめる様なこの文章の出版は許すまい』との御懸念」を述べていた。<sup>(28)</sup> この回想だけでは心許ないが、第一章第一節で見た通り、スレン

ドラナートも、『アジアの覚醒』に関連した回想の中で「明敏な岡倉が真に意図したのは実は我々自身を覚醒せしめることではなかったかという、これは疑念を通り越して確信に近いものとさえなっている」<sup>(28)</sup>と述べている。もしその通りであるならば、「彼が初めて英文によって著作したのは」「まづ何よりも、印度の有識者に訴へようとしたものであつたに違ひない」という浅野の分析は、当時の天心関係者の認識からしても、現在の研究と照らし合わせても、十分に妥当性があるものだと思われる。

木下は、天心が、美術学校校長になる前に欧米視察旅行をした際にも、美術調査に中国へ赴いた際にも、漢詩を書き記していたにもかかわらず、「このインド滞在期、岡倉は一篇の漢詩ものこさなかった」ことを理由に「英文未完草稿は、漢詩を謳うのと同じ表出意識で綴られたもの」で「感興」の「奔出」であり、『東洋の覚醒』は「岡倉の思想の営みのなかで大きな位置を占めてはいない文章群」であるとして、その政治性を否定している。<sup>(29)</sup>しかし、それは、天心の執筆意図に政治性がなく情動的な感興吐露である可能性は提示出来ても、英文で著述が綴られたことの理由説明にはなっていないように思う。仮に感興吐露に過ぎないとしても、漢詩でなく敢えて英文で行った以上は、それまでとは異なる聴衆ないし読者の想定がなければならぬはずである。また、ラビンドラナートやスレンドラナートの回想を見る限り、天心は、『東洋の理想』『東洋の覚醒』が執筆されたと思われる時期に、盛んにインドの青年たちと意見を交わしていた。つまり、聴衆ないし読者とされたのは、恐らく、浅野の分析の通り、「印度の有識者」であつた可能性が高いのではないだろうか。

また、スレンドラナートやニヴェディタが、ベンガルの革命的グ

ループに関与していたことについては、第一章第一節で既に触れた通りである。そして、金子は、天心が「実際にインドの独立運動に直接的に参加したという考えは唐突すぎると思われる」としながらも、横山大観の回想や、天心の孫に当たる古志郎氏の研究などから、インド政庁が「天心と独立派との関係を前々から問題視」していたことは認めている。<sup>(30)</sup>

横山大観は、一九二六年に出された自叙伝の中で、一九〇三年に天心の命を受けて菱田春草と共にインドに赴いた際を回想して、「然し船がカルカッタ市のガンヂス河の岸壁に着くと、我々一行は意外な障害に遭遇しなければならなかった、といふのは英国の官権が何故か我々二人の上に疑惑の眼を光らした」と述べている。<sup>(31)</sup>

また、古志郎氏はベンガルの革命家と天心の関わりについて、多くの史料を元に裏付けを行っている。<sup>(32)</sup>それに拠れば、一九一一年頃に「一九〇〇年頃」の出来事として回想された、英印政庁犯罪調査局長 J.C. ニクソンの『ベンガルにおける革命運動の成長に関するノート』において、「ベンガルの秘密結社は一九〇〇年頃結成されたが、その結成会合には弁護士のカミッテル、シヨロラ・デービー・ゴーシャル、およびオカクラという名の日本人が出席したと信ずるに足る理由がある」という記述があるという。ここで挙げられている「カミッテル」というのは、スレンドラナートが会計役をしていたアヌシラン・サミテイの会長であるし、シヨロラ・ゴーシャルというのは、タゴール一族の一人であるという。また、インドの独立運動家でアヌシラン・サミテイの副会長でもあるオーロピンド・ゴーシユの回想にも、秘密結社について「私はその創立者でもなく、同志でもなかった。オカクラ男爵から受けた感銘のもとに、それを創立したのはカミッテ

ルとミス・ゴシヤルであった」という言葉があるという。

一雄氏が『父天心』の中で綴っている、「私の知っているだけでも、ベンガル青年が、天心の身を庇うべく、匕首を揮って裏切りものを刺し、みずから従容として罪に服した」とき秘話もあるくらいである<sup>(284)</sup>という記述は特に典拠もない伝聞の話である。しかし、少なくとも、天心がインドで交流していた人物は、ベンガルの独立運動の中心人物であったし、天心の言説が彼らに影響を及ぼした面もあったであろうと思われる。これらを踏まえると、天心の『東洋の覚醒』の執筆背景に、必ずしも政治性が皆無であるとは言い難い。

とはいえ、外川昌彦に拠れば、「インドの歴史家シュミット・シヨルカルは、ベンガルの近代史研究を代表するその著作の中で、革命運動家と共謀する岡倉天心という風聞は、『全く裏付けがないもの』と否定して」おり、また、「アメリカ人のインド史家で、オーロビン・ド・ゴシユの伝記的研究で知られるピーター・ヒースは、ベンガルの革命運動に岡倉天心が及ぼした影響を検証すると、天心がインドから帰国した後は、その影響は『すみやかに忘れ去られた』としている<sup>(285)</sup>」。

第一章第一節で引用したラビンドラナートの講演での「彼が原動力を与えた運動は、今もなお私どもの地方で進んでいます。(中略)『ベンガルの芸術運動』はその一つであります」という言葉などを見る限り、天心がインドに残したのは、やはり主としては芸術面での影響であったのだらうとも思われる。ラビンドラナートの甥であるオボバニンドラナト・タゴールは、「日本の水彩画の技術を横山大観から習い、聖像画『バラタマータ(母なるインド)』(一九〇五年)を、日本画の描法を使って描いた」というから<sup>(286)</sup>、少なくとも、天心の渡印により、

美術分野でインドに多少の影響が残されたのは確かである。

金子は、『東洋の覚醒』に関しては、「情熱的な性格」の天心が、「インド独立派との交流」、そしてそこから生まれた「陶醉感」によって生み出したものとして考えている。他方、『東洋の理想』に関しては、「彼のインド行きは日本美術院の経営の行き詰まりが大きなきっかけであった」ことから、「あらたな活動の場を新天地アメリカに求め」「アメリカでの雇用条件をよくするために英文で書く必要を感じていた」のだとして、『東洋の覚醒』と『東洋の理想』は、執筆時期が近い故に内容が関連付けられて考えられることが多いが、帯びている性質は別物であるとしている<sup>(287)</sup>。

スレンドラナートの回想によれば、彼と出会った時、天心は「主著『東洋の理想』をちょうど書き終えたところ」であったという<sup>(288)</sup>。また、清見は、塩田力蔵から聞いた話から、インド出発前の時期に「天心はしきりに英文で何か草稿様のものを作つてみたといふ。察するに、これは『東洋の理想』の草稿の一部ではなかつたらうか」と推測している<sup>(289)</sup>。これらから考えると、天心は、インド到着時には既に『東洋の理想』をある程度書き終えていた可能性が高い。したがって、金子の指摘の通り、『東洋の理想』と『東洋の覚醒』の執筆目的が別々であった可能性は確かにある。しかし、第一章第一節で見た通り、天心は渡印前から既に、マクラウドとの交流によって、ヴィヴェカーナンダに関心を持ち始めていたようである。したがって、『東洋の理想』が日本である程度の形になっていたとしても、意識の向けられる先がインドであった可能性は十分に残っている。また、『東洋の理想』『東洋の覚醒』ともに、インドでニヴェディタの影響を受けている点も忘れてはならない。

浅野は、『東洋の理想』の第二章、第三章、第四章、そして第六章から第四章までは「日本に於いての述作であるかも知れない」が、第五章は「印度に於いて大いに加筆訂正され」、第一章と第五章は「大体に於いて印度に於いて書かれたものと、わたしは考へたい」としている。<sup>290</sup>堀岡は、『東洋の理想』の日本美術史の部分は日本で書かれ、前後の二章は航海中とインド旅行の合間に書かれ」としている。<sup>291</sup>この辺りについても、浅野の分析は現在までの研究成果から大きく外れたものではない。

インドでの加筆修正を加味して考えると、当初は金子の推測のように、長期的にはアメリカで美術評論家としての地位を得る為に筆を執ったのかも知れないが、ヴィヴェーカーナンダやラビンドラナート、スレンドラナート、ニヴェディタらとの交流によって、執筆の目的が徐々に変わったと考えるのが妥当ではなからうか。それならば、日本で既にある程度『東洋の理想』の原稿が完成していたらしきことも、紫水の回想にある「印度をして自覚せしめる様なこの文章」という天心の『東洋の理想』に対する位置づけとも、矛盾が生じないだろう。そして、主として日本美術について述べた『東洋の理想』への加筆修正だけでは、インドの人々から受けた感化を表現するには書き足らず、また、ニヴェディタからスレンドラナート達への促しある言葉などを求められたこともあり、新たに『東洋の覚醒』を著したのではないだろうか。

また、金子は、『東洋の覚醒』が未発表に終わった理由について、天心が、インド独立派との交流によって「欧米のアジア支配を糾弾するようなもの」を書いてしまったが、「インドを離れて冷静になるにつれ」「アメリカで就業することを計画していた」ことを思い出し、

自身の今後の地位の為に原稿を隠すことになったのだとしている。<sup>292</sup>それも十分に妥当性のある見解であるが、金子の考え方は、天心がアメリカにおける自身の再出発に専心し過ぎているような印象を受ける。『東洋の覚醒』ほど過激な言葉は綴っていないにしても、『日本の目覚め』、『茶の本』まで、西洋を「白禍」と詰る天心の姿勢は変わらない。また、『日本と黄禍』から『日本の目覚め』に至る過程で、「スラヴ禍」から「白禍」へと批判の対象範囲を広げていることを考えると、売れる本や評価される本という観点から天心が著述を行っていたとは思えない。

浅野は、『東洋の覚醒』が未発表に終わったことについて、「わたしは、少くとも二つの原因を想像することが出来る。一つは、当時の印度は、カーゾンの印度だつたといふことである。二つは、当時の日本は、日英同盟の締結されたばかりの日本だつたといふことである」と述べる。<sup>293</sup>カーゾンとは、一八九九―一九〇五年までインド総督兼副王を務めたジョージ・カーゾンのことであり、民族運動分断の為にベンガル分割令を発した人物である。

天心は、『東洋の理想』の内容ですら紫水が回想したような懸念を述べているのだから、カーゾンの下で独立運動弾圧政策が執られているインドで、より過激な言葉を記した『東洋の覚醒』を発表することを躊躇った可能性は十分にあるだろう。また、日露戦争を意識しつつ『日本の目覚め』を出版する天心であるから、日英同盟に配慮した可能性も十分にある。外川は、これまで英語圏でも日本語圏でも紹介されてこなかったインドでの天心の足取りを示す史料として、ヴィヴェーカーナンダの信徒の一人であるノレシュチョンドロ・ゴーシユの回想記を挙げており、そこには、一九〇二年一月二八日のブツダガヤ訪問

の際の様子に関して、「岡倉は、当時のインド総督カーゾンの照会状を携えており、あらかじめ電報でそのことは伝えられていました。ガヤ駅では、地方政府の担当部署の役人が出迎えにきました」と書かれているという。外川は、この記述から、「天心は、正式な外交ルートにその渡印の記録は見られないが、カーゾン総督の照会状を携えていたというエピソードは、少なくとも英領インド政府が天心のことを、日本政府の関係者と見なし、接遇していた可能性を示している」としている。<sup>(294)</sup>日英同盟の調印・発効は、この二日後の一月三日である。天心がその辺りの政治的事情をどの程度把握していたかは定かではないが、外川の言うところの「準公人としての扱い」を受けていた以上、天心も、個人的な考えが如何なものであれ、表立っての行動は、日本の今後配慮して慎まなければならないという意識は働いていたであろう。

このように、浅野の天心研究は、史料不足の中で書かれたことを考慮に入れられるべき点もあるし、現在も評価されて然るべきものもある。

尤も、それが、浅野が描いた天心像の歪みを正当化するものではない。一九四三年刊行の浅野の『米英思想批判』における天心描写は、次のようなものである。

『東洋の覚醒』は、「アジアの兄弟姉妹よ」といふ言葉で始まる。

悲壮にして痛烈な全アジア民族への公開状である。(中略)日本の明治維新は、皇政復古であった。その古へのまことの国ぶり、大御手ぶりに立ち帰つたのが明治維新であった。これによつて、日本は、米英の如何ともすべからざる神国であることを立証した。アジア十

億の民よ、わが日本の下に蹶起せよ。武器を執つて起て。そして汝らの敵、米英を撃つて斃せ。そして汝らの光榮ある歴史を回復せよ。歴史への回帰のなかにこそ、アジア復興の唯一の方法があるのだ。かやうに天心は叫び、そして、アジアの文化が、米英のそれに比して何ら卑下するに当らぬすぐれたものであることを説いた。<sup>(295)</sup>

このような、浅野が描いたような解釈が、果たして天心を理解する上で相応しいものであろうか。

そもそも、他の本よりも過激な言葉の多い『東洋の覚醒』においてすら、アメリカに関しての非難めいた言葉は、日本の開国に関する「その翌年、おびただしい武装使節が、アメリカ合衆国を先頭に日本の門戸を叩き、日本の意に反して開港を命じている」という記述程度である。<sup>(296)</sup>そして、『日本の目覚め』では、「白禍」の章で「日本にとっては、一八五三年のアメリカ合衆国の武装使節は、他の東洋諸国にとつてその出現が非常に致命的なものであると証明されていた、白禍の非常に恐ろしい具現だった」としつつも、次の章では、出だしから「もしも、アメリカ使節の折良い到着と、彼らが日本の対外関係に関して取った断固とした態度がなかったならば、国内不和が最高潮に達し、一八六八年の王政復古に先立つどんな事件よりも遙かに酷い内戦の時代に突入していただろう」と述べたり、「また我々は、アメリカの提督に対し、彼が交渉中に示してくれた限りない忍耐と公平性に、心からの感謝を捧ぐべきである。東洋の国民は、決して親切にされたことを忘れない。そして不幸なことに、国際間での親切は、極めて稀である。ペリー提督の名は我々にとつて非常に親愛なるものなので、彼の到着五〇周年記念に際して、人々は彼の上陸地点に記念碑を立て

たほどである」と述べたりしている。

セントルイス講演や『日本と黄禍』での天心の言葉を知らずとも、少なくとも、『日本の目覚め』において、清見も浅野も、天心の弟子たちも、この記述を目にしていたはずである。聖文閣の『岡倉天心全集』でも、六芸社の『岡倉天心全集』でも、村岡博訳の『日本の目覚め』でも、この件はきちんと邦訳され載っている。創元社の『天心全集』での英文収録上でも欠けていない。この点を、彼らが当時どのように受け止めていたのかまでは、今回、力が及ばず明らかにすることが出来なかった。また浅野が出した聖文閣版『日本の覚醒』は目に出来なかったので、可能であれば後続の研究の方に確認して頂きたい。

塩崎は、こういった『日本の目覚め』における記述から、「アメリカは日本にタイミングよく刺激を与えてくれた『恩人』として扱われている」としている。一方、「西欧諸国の一国として、イギリスは『白禍』陣営に入れられ、アメリカのような特別待遇を受けていないので」、第二章第二節で触れたソントン不破直子の研究にあつたように、アメリカでの書評が好意的なのに対しイギリスでの書評で不評なのは「もつともである」ともいう。

また、川島一穂も、天心は「〔山越注：『東洋の理想』で〕アメリカの武装使節団の脅威について語りつつも、鎖国の扉を開いたアメリカの目的は、自国の勢力拡張ではなく文明開化の精神にもとづく日本の開国だったとアメリカに対する感謝を述べている。彼の場合、日本美術院の開設のときの財政的援助を請うたのもアメリカ人、英文著書出版のきっかけを作ってくれたのもアメリカ人女性、晩年に職を得たのもアメリカ、ボストンの美術館であることなどを考えれば、アメリカ批判はできないであろう」としている。

こういった観点から考えると、天心の考えに「米英を撃つて斃せ」などというものがあるとは、到底思えない。イギリスの植民地であったインドの立場に立つ上で、イギリスに対し多少非難めいた考えはあつたかも知れない。『東洋の覚醒』における「西洋諸国のうちでもっとも高慢な国が日本との同盟を求めにいたつた」というイギリスを指すと思われる表現からも、その点は推察される。しかし、少なくとも、アメリカに関して言えば、天心はむしろ好意的であつた。加えて言うなら、イギリスに関して、非難の感情ばかりであつたとは思えない。天心は、インドへ出発する前、一九〇一年十一月二十九日付で、同行する堀至徳の母へ次のような手紙を送っている。

(前略) 印度は古代と違ひ此頃は英国領土と相成交通も開け到處ニ鉄道モ有之生活の便利は日本と異なること無之危険杯毫無之候 殊に今般至徳君の留学セラルヘキカルカッタ府ハ印度総督の首都ニテ保護行届き居候ニ付更ニ御心配ニ及ハス 且又先方ニテ御世話可致ビベカナンダ師は同国一流の学者 人の皆尊崇スル人ニ御座候(後略)

木下は、この手紙に関して、天心がヴィヴェカーナンダへ言及している点と、至徳の母を安心させる為に気を遣っている点にしか触れていないが、この手紙からは、ヴィヴェカーナンダを敬いつつも、至徳の母への気遣い故とはいえ、生活の利や安全の面でイギリスのインド支配に肯定的とも言える態度を取る天心の一面も感じられはしないだろうか。

また、登志氏は、『茶の本』の第一章における英語表現に、シェークスピアを意識した言い回しがあることなどを指摘している。天心が

イギリスの文学によく親しんでいたらしいことは、一雄氏の『父天心』における記述からも、『茶の本』に与えられている評価からも、よく伺えることである。欧米の文物に通じていることが、必ずしも国粹主義的でないことを意味するわけではないが、それでも、天心の言説と生涯を総合的に見た時、米英に対する苛烈な反感があったとは言えないだろう。

確かに、『東洋の覚醒』には、「日本の輝かしい復活はアジアの復興の一つの実例としてきわめて教訓的である」という記述がある。しかし、それは「一つの実例」として挙げただけで、「日本の下に蹶起せよ」などという意味にはならないだろう。その「復活」の過程を「偉大な献身」や「愛国の精神」によって為されたとしている点などは、一九三〇年代当時に読まれたら、非常に都合の良い精神論として機能する語であったかも知れない。しかし、全体の文意を考えた場合、ここに天心の主張の中心があったとは思えない。大名らが天皇に領地を返還したのは、「国が統一されて強くなり、外国の攻撃に直面せしむるため」であったとしている。この記述がある節の前半では、「ヨーロッパ人の政策は、支配する為に分割することをけつして忘れない」として、アジア各地で宗教対立や国内紛争・外交対立が煽られてきたことを述べている。そして、「われわれが欲するのは統一と指導力であって、数の優勢ではない」「義和団は、かりに清国政府軍が共同行動に加わることを許されさしたら、成功しただろう」とも述べる。つまり、天心は、東洋諸国がヨーロッパの国々に対抗するには、まず国内を分裂させない為に、統一的な権力が必要であること、そして、日本の場合は、天皇という統一に最適な存在が居たことを述べているだけでも言えよう。

また、『東洋の覚醒』には、次のような記述もある。

西洋のやましい良心は、しばしば黄禍の幻影を呼び招いた。それならば、東洋の静かな凝視を白禍に向けようではないか。私は諸君に暴力をではなく、男らしさを呼びかけているのだ。攻撃をではなく自覚を呼びかけているのである。

そして、『日本の目覚め』と『茶の本』には、それぞれ、このような記述がある。

いつになれば戦争は止むのか。(中略) 自身を守る勇氣も力もない者は、奴隷とならねばならない。我々の真の友が未だに剣であることを直視せねばならないのは、悲しいことである。(中略) ヨーロッパは我々に戦争を教えた。いつになれば彼らは平和の恩恵を学ぶのか?

もし、我々が文明の名に値する為には、戦争のおぞましい栄光に基つかなければならないと言うのであれば、我々は喜んで野蛮人のままで居よう。我々の芸術や理想に然るべき敬意が払われる時まで、喜んで待てよう。

天心の著述には、一見すると矛盾して読める表現が多い。それ故に、浅野のように天心の過激な発言のみを切り出すことも可能である。確かに、『東洋の覚醒』や『日本の目覚め』の記述を見ると、天心は、現実的には武力に対して武力で応じる必要性があると認識していたと

思われる節もある。しかし同時に、武力を美の理想に反する忌むべきものと見なす姿勢も、一貫して著述に残し続けた。天心は、武力を正当化することの容易さと危うさを認識していたが故に、そのような矛盾を孕んだ言葉を書き、時には原稿を筐底に秘したのではなからうか。

### 第三章 岡倉天心の思想とは何だったのか

#### 第一節 天心の思想に対する戦後の分析

進藤曰く、二度目の天心ブームが現れたのは、一九六〇年代から七〇代であった。それは「高度成長期日本のナショナリズム高揚と、七年日中国交正常化に始まる中国とアジアへの関与の高まりを背景に」したものであったという。そして、その時期の主要な天心研究者が、竹内好、橋川文三、丸山真男、色川大吉などであるという。<sup>(314)</sup>

そういった一人である竹内に拠れば、「戦後しばらくは、天心の名はファシズムとともに忘れられていた」という。天心というよりは、天心を扱った日本浪漫派に関する証言だが、橋川も「私の見たかぎりでは、日本ロマン派の批判らしきものを含んだ文章は必ずしも少いわけではないが、しかし、一般的には、この特異なウルトラ・ナショナルリストの文学グループは、むしろ戦後は忘れられていた」という。<sup>(315)</sup>そして、竹内に拠ると、その後には起きた「『汚名』をそそぐ『復権運動』」の中で現れたのが、宮川寅雄であるという。<sup>(316)</sup>

宮川は戦争中の浅野らの天心論を「立派なものだなぞとは断じて考えていない」としながらも、「侵略的帝国主義者の天心賛美が、火のないところに入った煙だとは考えていない」としている。<sup>(317)</sup>宮川は、天

心が英文著作を執筆した当時、まだ不平等条約改正こそ為されていないかったものの、既に日本は植民地化の危機を脱し、逆に侵略する側へとなっていたにもかかわらず、『東洋の理想』や『東洋の覚醒』において「そしらぬ顔をして、インドの自由と日本の解放を、おなじものにすりかえた」こと、<sup>(318)</sup>そして日本には解放の指導的役割があるとされたことが、太平洋戦争時に天心が利用された原因であるとされる。<sup>(319)</sup>そして、『日本の目覚め』においては、黄禍論への反撃としてヨーロッパは非難するがアメリカは棚上げし、日露戦争における日本の帝国主義は擁護していると批判的に見る。<sup>(320)</sup>ただ、宮川は、これらを記した著書『岡倉天心』の「はじめに」で、既存の天心評伝を挙げた上で、「正直にいうと、天心を愛すべき、畏敬すべき人間とはうけとれない」「このような人物をつうじて、明治の美術を語らねばならぬことは、かなり苦痛な仕事であった」と述べるなどしているので、そういった個人的感情を踏まえると、どの程度天心を公正に評価したのか、少々疑わしくもある。その為か、後年、橋川が戦後の天心研究者を挙げた折に「これらはいずれも天心をよく理解せんとした人々であるが、中には天心の自由奔放な生き方にあきたらず、その評価の低い例もある。その一例が宮川寅雄である」と言わしめている。<sup>(321)</sup>

竹内は、英文著作だけで「彼の思想を代表させ、それを前期の美術運動と切り離して論ずるのは当を得ない」としている。『東洋の理想』以降の英文著作が書かれたのは日本美術院の行き詰まり後、即ち理想の実現に敗北した後であることから、天心は日本で訴えられない代わりに世界に訴えようとして英文で著述したのだとし、天心の真意は「日本国家の自己主張を代弁」することにはなく、美の使徒として「物質」化した日本国家を「弾劾」することにあるとしている。そ

して、『東洋の理想』の「アジアは一つ」が「天心の思想の核心である」とし、これと『東洋の覚醒』の「ヨーロッパの栄光はアジアの屈辱である」という文言とを合わせて、「アジアは屈辱において一つである」というのが天心の思想の命題であると位置づけ、「天心はアジアの名で愛または宗教を考えている」のであり、「武力は非アジアまたは反アジアである」という考えであるし、「一つという判断は、事実でなくて要請である。一つで『あらねばならぬ』と説いているのだと解釈する。<sup>(322)</sup>

橋川は、竹内の「アジアは一つ」への解釈を「現在までにこの言葉の意味を唯一つ明らかにしたものだ」と受け止め、福沢諭吉の「一身にして二生を経たり」という言葉を借り、「その身体がアジアと西洋にまたがり、その才能が美術と政治に引き裂かれた」二重性を背負わされた明治期の文人の生き方の中に天心も連なるものであるとする。<sup>(323)</sup>

色川の天心解釈も、概ね竹内の研究に賛同する流れに組み入れられる。色川は、天心の「国粹」観は、政治的、世俗的な動機を退けた、もしくは軽んじた「精神的貴族」としての美の探究に傾斜したものであるとしている。そして、「天心の歴史意識」は「明治維新の革命の強烈な印象はあっても、自由民権運動の意味はまったく欠落しており」「日本の民衆への痛覚が欠如」し「日本の国家権力への認識を欠いた」粗雑なものであるとする。故に、天心は「詩人であって、生涯に一度たりとも政治運動家にはなっていない」とし、また、そういった天心の生き方が、彼を「不透明で複雑なものと感じさせているのだとする。そして、『東洋の覚醒』が日の目を見なかった理由については、インドにおける熱情が冷めたからという説も、日英同盟の締結に遠慮したという説も賛同出来ないものとし、一九〇一年から日本と

アジアの間で高まった緊張が、日本の側から「アジアは一つ」という呼び掛けを無効にしてしまうものであったからであるとする。それにより、「アジアは一つ」の意味は「西洋への対抗において一つ」から「アジアの普遍的な愛と理想主義において一つ」に変えられていったと解釈し、それは『日本の目覚め』で「白禍」と呼んだ西欧文明への懐疑、『茶の本』における東洋の内面性の主張まで一貫したものであるとする。<sup>(324)</sup>

進藤に拠れば、丸山の天心分析は、あくまで近代国家と近代人の理念という観点に基軸を置き続けた点で、「近代主義への批判を軸に」「コスモポリタンなアジア主義者としての天心」を読み解こうとした竹内らとは系統を異にしているという。<sup>(325)</sup>丸山は、福沢諭吉や内村鑑三と並べて、天心も「日本にたいする自己の使命と、世界にたいする日本の使命とを不可分に結びつけ、そうした『天職』の強烈な意識で生涯を貫いた思想家」の一人であるとしつつも、二者に比べて天心は「生活態度においても、発想様式においても真底からの詩人」であるとし、それ故に「政治的ロマン主義の『論理』に特有な陥穽」が明確に表れているとする。丸山は、天心は『東洋の理想』でその理想を「近代の衝撃」を受けない以前の歴史に求め、「日本の目覚め」で「自己内部からの発現」のうちに進歩の原動力をみとめ、「外発的な欧化に対立させ、『東洋の覚醒』で「個人」を基盤とする欧米の自由よりも普遍性と合一する東洋の自由を「高次のもの」として賛美」しているという。そういった過去の美に理想を求めるロマン主義的な歴史観が政治の世界にまで援用されてしまうと「体制批判の面が著しく乏しい」ために「社会的停滞を不当に美化する結果」を招くことになるのであり、天心は「後年ファシストたちが担ぎ上げた『大東亜新秩序

の予言者」という祭壇から『名誉恢復』されて然るべき」であるが、彼の論理が「致命的な個所」を持つていたのも事実であるとしている。<sup>(326)</sup>

進藤は、自身が論考を載せた二〇〇八年当時を、『アジア』の世紀の到来」と共に訪れた「第三の天心ブーム」と位置付けている。<sup>(327)</sup> 進藤の論文と同じ特集の中で天心分析を著した孫歌は、天心は、ヨーロッパ内部の矛盾や対立をきちんと認識しながら、利益のため、アジアに對する「侵入の連合体」として、「ヨーロッパは一つである」と捉えたのだとしており、これへのアンチテーゼとして出された「一つ」の在り方が「愛と平和の本能」に基づく「アジアは一つ」であるのだと述べる。そして、『東洋の理想』と『東洋の覚醒』をイギリス人とインド人それぞれに向けたものとし、また、天心の説いた「愛」を一般的な自然感情としての理解から単純に非暴力的で政治や経済とかけ離れたものとして定義してはならないと唱える。孫は、天心の唱えた「愛」は、曖昧なイメージながらも、「平和、調和、同情、礼讓」など「東洋の道義」に基づく「社会秩序」としての「愛」であるにも拘わらず、その道義と力の関係、社会秩序と政治力との関係を論じなかつたことが、天心の思想を継承する際の障害であり、また、侵略のイデオロギーとして利用されることにも繋がったのであるとする。<sup>(328)</sup>

徐興慶は、こういった天心研究を通観した上で、天心は「欧米の『自国中心』志向を批判し」「東洋文明の伝播者として、美の伝統の擁護に立ち上がり、アジア文明の振興をわが使命とした」一方で、その著述には「日本の優位性」「日本の正当性」などが見られ、日本に關しては「自国中心」で客観性を失っていたと総括している。<sup>(329)</sup>

また、小熊英二は、天心の言説が矛盾を孕んで見える原因は「しばしば彼の詩人的資質によるものとされてきた」が、その内容は「東

洋」と『西洋』という枠組みのなかで日本の立場を正当化しようという狙いにおいてはまったく一貫して」おり、「それぞれの著作の目的に合わせて」「意図的な作為」として『アジア』像を変更」してきたことが「歪み」をもたらしたのではないかと分析している。<sup>(330)</sup>

いずれの説も天心の言説の矛盾や欠点を確に指摘したものであり、殊更にどの説を支持するとも言い難い。しかし、表面的な総評となつてしまいが、いずれの説も、一九三〇年代に為されたような形ではないとしても、固有の「天心像」を描いてしまつてはいないだろうか。

日露戦争時にアメリカ言論界で活動した明治日本人を指し、塩崎は「明治はある意味で、『プロ不在の時代』だった」と述べる。「その道の訓練を受けていなくても、自分の意志一つで立ち上がり、国家の命運を賭けて全力を尽くす」「孤軍奮闘」の時代で、専門家による処理・解決がマニュアル化されていない時代であったという。<sup>(331)</sup> この塩崎の言葉は、非常に重要な指摘であると思う。天心の孫に当たる岡倉古志郎氏は、著書の『祖父岡倉天心』で、「私が切にのぞみたいのは生誕百年を契機にして人間天心の生涯と思想をありのままに収録し公正に評価してほしいということである」と述べた。<sup>(332)</sup> 天心を、美術の専門家でもなく、偉大な思想家でもなく、海外に渡つて生活せねばならなかつた一人の人間として眺めるならば、その多面性や矛盾は、彼に特異なものであるとは思われない。欧化に対し国粹が現れたのは、西欧を前に日本が何者であるかを問い規定する必要に迫られたという面もある。天心も、その活動の場を世界に広く置いた時、自らが何者であるかを問い、まず日本人であり、東洋人であると規定しなければならなかつたに違いない。それ故に、英語を話しながらも、列強によるアジアの植民地化に憤り、美と理想を尊重しながらも、戦争となれば

母国の為に筆を執ったのではないだろうか。彼の矛盾を帯びた姿は、今日、我々が国際化の中で問われている中立性や公平性と帰属意識との問題に通底している。

## 第二節 美と政治の関係性——自然、天皇、日本浪漫派、そして天心を繋ぐもの

第一章第二節で見た通り、天心が残した英文著作は、少なくとも欧米においては、『東洋の理想』は美術書として、『茶の本』は審美的な書として扱われ、日露戦争に際して書かれた『日本の目覚め』すらも、日本の歴史や文化理解の為の書として見なされていた。それならば、何故、日本において天心の言説が取り上げられた際、非常に強力な政治性を帯びたものとして受け止められることになったのであろうか。

それを理解する上で一つの参考になると思われるのが、橋川の著書『日本浪漫派批判序説』にある「七 美意識と政治」という論考である。橋川は、天心に関する著述も行っているが、本のタイトルの通り、この著書における分析対象は日本浪漫派であり、該当の論考で取り上げている人物は、保田與重郎と小林秀雄である。保田は一九三〇年代以降における天心像の形成において一端を担った人物ではあるが、此処で触れられているのは保田自身の意識や態度であり、この論考の中で天心に触れた部分はない。しかし、この美意識と政治が結びつく構造の考察こそが、何故、天心の思想が国粹主義的に読まれていくことになったのかという問題を読み解く鍵となるのではないかと思われる。橋川は、その論考の中で、政治と美という異なる価値領域に属するはずのものが、何故、日本においては大きく作用しあう構造を持ち得るのかを考察している。この橋川の考察は、非常に豊かな学識に基づ

いて書かれており難解であるが、筆者なりの解釈で概説してみたいと思う。

まず、「日本人の生活と思想において、あたかも西欧社会における神の觀念のように、普遍的に包括するものが『美』にほかならなかつた」という点が、日本における美と政治の独特の関係性の土台となっているものである。日本人の精神風土には、自然がもたらす恵みという側面を和魂とし、病や災害という側面を荒魂とし、そのどちらをも日常生活に寄り添うものとして忍従する生活態度が存在している。では、そのような自然が強い忍従を抵抗なく解消し得るのは、どのような意識であるか。それは、自然を美と見なす、非常に感性的な容認である。その美意識は、個人というレベルでは、「風土と伝承に対する耽美的愛着」、即ち、郷土の「思い出」という形での美化として表出し、全体としては、それを「同心円的拡大」した「伝統」や「歴史」の美化として表れてくる。美化された事物は、肯定し易い、あるいは肯定せざるを得ない価値を持つものに変わる。それを通じて、人は忍従し難いことも納得し、容認するのである。そのように、美という極めて感性的な価値観に基づく事物の肯定が常態化されると、政治決定すらも「一種の自然過程（既成事実への屈従過程）」としか考えられない「状態が生まれ、『比較的少数の人間におそろしく巨大な人間が服従している』という事実に対してこれを『一個の驚くべき現象』と見る能力」、即ち「なぜこの権力がわれわれに服従を要求し強制することができるのか、という不断の問題意識」の欠如へと繋がる。近代においても「天皇権力の正当化は『天壤無窮』を形容詞と」した一種の「自然」な現象として表象されていた。そして、自然がそのようにあるのだから、そうあるべきであり、それこそが美しく、そして

正しいという肯定の原理は、「国家構造の底辺細胞をなす家族と部落共同体においてもひとしく貫通しており、天皇権力への懷疑はそのまゝ個人生活の日常的局面における自壊を意味した」。その為、日本において「天皇支配という『驚くべき現象』に対する懷疑や抵抗は心理的にも不可能であった」のである。<sup>333</sup>

この美意識に基づいて統治構造を肯定する原理が、日本人の共通の価値観として妥当であるか否かという議論は、本論文の主眼ではない。ただ、「美」や「愛」を中心的価値観に据えた天心の著述が、何故政治的なイデオロギーとして機能してしまったのかという問題は、こういった価値構造の延長にあるように思われる。

天皇支配を一種の自然現象と見做すかのような記述は、天心の著書である『日本の目覚め』において、天皇や朝廷から幕府へと政權が移っていった過程を記述している「二蛹」にも登場する。

まず初めに、全ての上にミカドが在った。その神聖な概念は、日本の真の始まり以来の思想的遺産である。神話がそれを神聖化し、歴史がそれを愛すべきものとし、そして詩歌がそれを理想化してきた。仏教は、インド人が『護法神』に対して払うあの崇敬によって、それを豊かにし、儒教は、中国人が『天子』に対して捧げるあの忠の念によって、それを強固にした。ミカドは統治を止めることはあるかも知れないが、常に君臨している。ミカドは王権神授説によって存在するのではなく、神の法、即ち、人と自然の事実によって存在するのだ。彼は、我々の愛する富士山が静かなる美の中で永遠に聳えているように、あるいは、麗しき海が永遠に我らの岸辺を洗うように、常にそこに在るのだ。<sup>334</sup>

ここで特に注目すべきは、「ミカドは王権神授説によって存在するのではなく、神の法、即ち、人と自然の事実によって存在するのだ」という部分である。後に続く文章を見れば分かる通り、天皇の存在を、山や海のように動かしがたい自然の事物に擬えて扱っているのである。そういった言い回し自体は、詩歌にも見られる国家安泰の表現手法の一つであるかも知れないが、それを抜きにしても、神との間で交わされた契約によって天皇に権限が与えられたのではなく、遙か昔から変わることなき「自然の事実」として、天皇はそこに存在しているのだと、天心は記述しているのである。これはまさに、橋川氏が指摘した政治過程を「一種の自然過程」として捉える在り方に該当するのではないだろうか。

また、この他にも、天心は、『東洋の覚醒』において、西洋社会と対比して東洋社会を肯定する上で、家族制度を調和という名の「美」で肯定している。次に挙げるのがその例である。尚、傍点は筆者が補ったものである。

家という中国の表意文字は、一つの屋根の下に三人が住むことをあらわしていて、それ自体、西洋の夫と妻の二重唱と対照区別して父と母と子の三和音という東洋の理想を意味している。それはただちに、父性の保護と母性の内助と子の服従が、相互の愛と義務の断ちがたいきずなによって結ばれている三重の関係を意味することになり、それが社会的理想に広がれば、アジアの生活の美と香気を構成している慈悲と同胞愛と忠誠と礼節に開花する。(中略)彼ら〔山越注：西洋人〕がゲルマンの森の中をさまよい、バルト海の波に揺られていた時代よりも以前に、われわれの先祖が、すでに家族

統一的、美しさの中にいたことを見た。(中略) 東洋の社会は、相互に関係ある義務の調和において、不思議なくらい美しい。土地は仕事を供給し、仕事は共同体の理想を供給し、共同体の各成員は結合して、欠くことのできない全体を形づくっている。(後略)<sup>(335)</sup>

この辺りの文章は、浅野が一九四三年に刊行した『米英思想批判』の中で引用した言説でもある。竹内は、戦後、「戦争否定の時代」における日本浪漫派による天心解釈では、天心像が「美の使徒」に立ち返っていると、「美は科学に対抗するものであり、科学は戦争へつながるが、美の道はそれを越える」としている。<sup>(336)</sup>しかし、天心が本来目指した「美」が、一種の国境を越えた平和的な観念として機能する「美」であったとしても、太平洋戦争時には、「美」を説いた部分も含めて、戦争推進のイデオロギーとして機能してしまったのが実態ではなからうか。孫は、天心の「愛」や「美」という「東洋の道義」による東洋古来の社会の無条件の肯定が、結果的に天皇制など当時の政治力までも無条件に擁護するものとして機能することになったのだと指摘している。<sup>(337)</sup>美による事物の肯定は、感性に基づくものでありながら、一度大きな共感を得ると、非常に否定が難しい価値観となってしまう。そのような観点から考えると、天心の言説は、美を追求する者として、美を価値観の中心に据えて著述したが故に、却って非常に政治的には危険なものとなってしまうのではないだろうか。

天心は、美という価値観が帯びる危険性について、今少し自覚的になるべきであった。あるいは、自覚的であったからこそ、英文著作を国内で出版することに、積極的ではなかったのかも知れない。

孫はまた、天心が「東洋の道義」とした「美」と「愛」は、世俗を

離れた視座から説く「普遍的な愛」であるという点を踏まえずに読むと、本質的に西洋の「暴力」と区別できないものになってしまいう危険性を指摘している。<sup>(338)</sup>「美」や「愛」を世俗的に、即ち、安易な言い換えかも知れないが、現実的、政治的に理解すると危険である理由は、『日本の目覚め』の「八 復古と維新」にある次のような記述を見ると、理解し易いのではないだろうか。

国民全体に関して言えば、何世紀もの社会的差別が帯刀階級に栄光を投げかけてきた一方で、最近五十年ほどの間、流行の小説や戯曲が愛国的な兵士を非常に理想化したので、その階級に入るべく徴集された農民は、非常に自分自身を高貴になったように感じた。それは彼自身の評価の中ばかりでなく、彼の仲間からの評価においてもそうだった。彼は今や剣士であり、誉れ高い人なのだ。(中略)

最初は、従来の平和な生活のせいでも、自身の勇氣に対して幾らか不安があったが、砲火の洗礼は、彼が最高のサムライに並び比し得ることを証明してくれた。我らが徴兵たちの表す死への軽蔑は、一部の西洋の著述家たちが考えたように、将来の報酬の望みに基づくものではない。(中略) 全ての背後にあるのは、君主への献身と、祖国である。我らが徴兵は、ただ、国家の利益のために喜んで自身を犠牲とした英雄たちの歴史的な事例に続こうとしているのである。彼が時として、あまりにも惜しげなくその血を差し出すことがあるのは、強い愛国心の愛が溢れたからなのだ。というのも、愛とは、死のように、限界を知り得ぬものだから。<sup>(339)</sup>

色川は、天心は、「美と理想」を「永遠なるもの」として真摯に求

めた人物であるとして(34)いる。天心にとつて、「美」とは普遍的な価値観となり得るものであり、また、人生の目指すべき一つの理想の観念だったのかも知れない。それ故に、天心が唱える「愛」や「美」は、時として、死までも内包したのである。この傾向は、『日本の目覚め』以外の著述でも見られる。天心は『茶の本』において武士道を「the Art of Death」と呼び、それに対比するものとして茶道を「our Art of Life」と呼んだ(34)。しかし、その「Art of Life」を説こうとしたはずの『茶の本』にあつてすら、幾度か美と死を結び付けている部分がある。天心は「花」の章では「花は人間のように臆病ではない。まさに日本の桜が惜しげなく風に身を任せゆくように、死を誇りとする花もある」と記し(34)、また「茶人」の章では、利休の死に触れて「美と共に生きた者だけが、美しく死ぬことができる」と綴っている(35)。こういった美と死とを折に触れ結び付けて描写する点が、天心の思想に潜在する危うさの一つであつたに違いない。ただし、生死と向き合う精神を、美と結び付ける捉え方は、天心に特異なものではない。『武士道』の冒頭で、新渡戸は「It is still a living object of power and beauty among us (武士道は今も我々の間で力と美の物象として生きています)」と書いている。当時の価値観の中で、美と死は近い位置にあるものとして描かれていた。しかし、この一種の文学的な感傷とも、宗教的な理想とも呼び得るような死に対する「美」の観念は、現実社会において機能するものとして援用されれば、時として命を軽視する思想にも繋がり得る。

金子は「浅野はさかんに天心を取り上げたが、天心思想の流布でもっとも影響力のあつた作家は保田與重郎であつた」として(36)、自著の一節を割いている。その中で金子は、「保田はミリタリストないしフ

アシストと見なされがちだが、それは伝統への回帰と反西洋の立場が当時の軍国主義者、全体主義者の主張と重なりあう部分が多かつたため」(36)その思想は本質的にはファシズムからほど遠いものであり、保田は「文明開化の成果のすべてを否定した」「原理主義者」で、保田の文学の特徴は「滅びの美学」であつたとして(36)いる。筆者が触れた保田の天心評は僅かだが、同氏の全集に所収されている一九三八年の論説で、天心を「日本の世界人」と呼び、「天心が単純な保守派や固陋な国粹派でなかつたことは、恐らく彼の大事業を知るものに理解できる」と述べる姿勢は、確かに、第二章で見てきたような浅野が描こうとした天心像とは、少々異なるものと思われた。金子は、保田の天心解釈を、「文明開化を伝統の破壊、固有性の喪失の悲劇」として受け止めた保田の「文明開化の知性」への「幻滅」に引き寄せて為されたものとしており(37)、この金子の分析は適切であると思われる。ただ、個人的に保田の天心評の中で目を引いたのは、「天心はその日本論の中で極めて象徴的に書いた——日本の礼法は、初対面のひき合ひに初り、自殺の作法に終わつてゐる、と」という部分である(38)。「日本の目覚め」には、先に触れた徴兵制に関する愛と死を結び付ける描写以外にも、飢えた民の為に乱を起し死す大塩平八郎や、ミカドの為に死す楠正成などが劇的に描かれている。しかし、『日本の目覚め』は、全体としては、ミカドからサムライへ、サムライから再びミカドへと推移する政治権力の歴史を解説したものとして読むことが可能である。また『茶の本』も前述の通り死について触れているが、それでも茶道を「It is a religion of the art of life (生の術を教えてくれる宗教なのだ)」としているし、全体としては茶の歴史、また茶や花など芸術と向き合う上で必要な精神性について記述している。それにもかかわら

ず、「滅びの美学」を持つ保田の目には、天心の著作は「自殺の作法」を教えるものとして映った。これは、美と死が近接して描かれることの危険性の例証とも言えないだろうか。

橋川は、「戦争中の日本における一種のウルトラ・ナシヨナリズムは、政治的なナシヨナリズムというより、むしろパトリオティズムとよんだ方が適当であろう」と述べている。<sup>(349)</sup>それは「産土神のパトリオティズム」<sup>(350)</sup>「耽美的パトリオティズム」<sup>(351)</sup>とも呼び換え可能な、「故郷」への愛であり美意識であった。そして、「戦争という政治的極限形態の苛酷さに対して」「『美意識』のみがこれを耐え忍ぶことを可能ならしめた」こと、「人間にとってもっとも耐えがたい時代と生きるもののために、あたかも殉教者の力に類推しうるものとして」「『美』を説いた」ことが、保田らが「『戦争イデオログ』<sup>(352)</sup>」としてもっとも成功した要因であるとした。そうであるならば、天心の思想が、保田を含む日本浪漫派の手によって、「戦争イデオログ」として用いられることになったのも、彼の著述が、時に「死」までも内在する「美」や「愛」を中心に据えて、東洋の在り方を肯定していることとしいた為であろう。

「美」や「愛」という価値観は非常に危うい。それは、極めて感性的なものでありながら、一般に、善きものとして扱われるものであり、反証や否定をしないものだからである。そしてまた、感性的なものであるが故に、内包する範囲を随意拡大可能だからである。「美」や「愛」に基づく事物の正当化は、時に、人の死にまで及ぶ。死の美化は、故人を悼む心の苦痛を和らげる原理でもあるが故に、感性として否定し難い。しかし、それも度を過ぎれば、多くの死を肯定し、戦争を加速させる原理となり得る。

我々が、日常の中にあつては、殊更問題視や疑問視をすることのない価値観も、非日常の事態においては、容易に社会を麻痺させてゆく原理となり得る。そのことを、天心を巡る問題は示唆してくれている。

### 第三節 英文著作の邦訳上の問題

木下は、天心が「アジア主義者」「日本主義者」「国粹主義者」と規定されがちである理由について、天心の英文著作の邦訳文上の問題を指摘している。<sup>(353)</sup>木下は、『日本の目覚め』の「四 内からの声」における、日本国内において儒教から古学・陽明学が発展し、やがて国学が興り神道が復活してくるといふ説明中の一節を事例に、この問題について考えている。指摘されている件は、英文では、次の通りである。

Shintoism as formulated in the beginning of the nineteenth century is a religion of ancestorism—a worship of pristine purity handed down from the age of the gods. It teaches adherence to those ancestral ideals of the Japanese race, simplicity and honesty, obedience to the ancestral rule vested in the person of the Mikado, and devotion to the ancestral land on whose consecrated and divine shores no foreign conqueror has ever set his foot.

木下は、この部分を、以下のように訳すべきであるとしている。

一九世紀始めに体系化された神道は、祖先崇拜の宗教——神々の時代から伝えられてきた原始の清浄への礼拝である。それは、日本民族の祖先の理想に忠実であることを教え、簡素で正直であること、

帝という人物に付与された祖先伝来の決まり事に従順であること、その岸辺に外国の征服者がまだいちども足を踏み入れたことのない清い神聖な祖先の土地に献身することを教えるものだった。

この件の中で、特に木下が注目すべきだとしているのは、「in the person of the Mikado」という部分である。ここで「帝という人物において」と英語で述べている以上は、「岡倉は、天皇を人間として扱っている」というのである。それにもかかわらず、同じ件が『明治文学全集三八 岡倉天心集』の齋藤美州訳では、次のように訳されていると指摘する。

十九世紀にいたって装いを新たにした神道は、一種の祖先崇拜教であり、それは八百万の神々の御代から伝わり伝わった国粹の尊崇であった。この新しい神道は、日本民族古来の理想たる単純率直の精神を守ることを教え、万世一系の天皇の親政に服し、いまだかつて外敵の足跡をとどめぬ神国日本に身を捧げることを教える。

このように、戦後に出版された本でありながら、「伝わり伝わった国粹」「万世一系の天皇の親政に服し」と、意図的に国粹主義的な天心像を構築するような言葉が選ばれ、あまつさえ、「神国日本」という、原文から離れ過ぎた邦訳が為されている点が、今日まで論じられてきた天心像の構築の上で非常に問題であると、木下は指摘する。齋藤の邦訳では、意識の程度が大き過ぎて、本来の天心の言葉の通りに著作の内容が伝わらない可能性があるという点に関しては、非常に木下の指摘に同意するものである。しかしながら、木下の邦訳は、

やや現代的な価値観に近過ぎる邦訳ではなからうかという印象を受ける点もある。

「person」は、確かに、「個人としての人間」を意味する単語ではあるが、同時に、キリスト教の神学用語として、三位一体の父・子・霊の位格を表す為に用いられる単語でもあり、「in the person of」では、「.:という(人の形で)」という意味にもなる。そして、此処で忘れてはならないのは、『日本の目覚め』は、そもそも、欧米の読者を対象として書かれたからこそ、英文で著されたと考えられる点である。異なる言語で自国の文化を語るということは、時として、対象となる言語圏の文化における近似した価値観に、自国の価値観を置き換えて説明すること、あるいは、置き換えられずとも想像可能となるような言い換えを用いて説明しなければならないことを意味する。欧米向けに英語で書くということは、即ち、主としてキリスト教圏の人々を讀者として想定して書かねばならないことを意味する。宣教師の塾で英語を学び、欧米の文学にも造詣が深かった天心が、そのような認識を欠いていたとは考えづらい。したがって、『日本の目覚め』の問題の箇所は、キリスト教圏の人々に向けて、日本で育まれた宗教や価値観を解説しようと試みているものであることを念頭において解釈を行うべきではないかと思われる。そして、その前提に基づき、「person」の意味について考えるならば、前述した単語の意味の範囲から考えて、単純に一個人を指す意味合いでの「人物」と邦訳し、そこから「天皇を人間として扱っている」と結論付けるのは、少々断定的な部分が否めないのではないかと思われる。

この問題について考える上で、同じく『日本の目覚め』の「二 蝸」の九段落目にある、次の部分を参照してみたい。

The Mikado, unseen and unheard, commanded a mysterious awe. His palace now became the "Forbidden Interior" in the strict sense of the word. The ancient political significance of the court was lost in a semi-religious conception. No wonder that the Westerners who first visited our country wrote there were two rulers in Japan, the temporal in Yedo, and the spiritual in Kioto. In spite of the constant loyalty which our forefathers expressed for the Mikado in Tokugawa days, they had none of the fiery enthusiasm which inspires us to-day. With them it was symbolism; with us it is a living reality.<sup>(19)</sup>

この部分を訳すと、「姿が見えず、声も聞こえないミカドは、神秘的な畏敬を集めていた。彼の宮城は今ではまさに文字通りの意味で『禁じられた内側（禁裏）』となった。朝廷の古来の政治的な意義は、半宗教的な概念の中へと失われた。初めて我が国を訪れた西洋人たちが、日本には、江戸には世俗的な、京都には宗教的な、二人の支配者が存在していると書き記したのは、何の不思議もないだろう。我々の先祖が徳川期にミカドに対して表してきた不変の忠誠心にも拘らず、彼ら先祖は今日我々が感じているような激しい熱狂を抱いていなかった。彼らにとってそれは象徴的意義だったのだ——我々にとっては、それは生きた現実である」となる。

この部分から天心の天皇観を読み解こうとすると、後半部分がやや解釈に悩むところである。「彼ら先祖は今日我々が感じているような激しい熱狂を抱いていなかった。彼らにとってそれは象徴的意義だったのだ——我々にとっては、それは生きた現実である」という部分は、

独特の言い回しの効果もあり、特に解釈が難しく思われる。天心自身もそのミカドに対する「激しい熱狂」の中に参加しているのか、あるいはその「激しい熱狂」をあくまで客観的事実として眺めて記しているのか、この部分のみを切り取る限りでは、どちらとも解釈可能という印象がある。後に続く「我々にとっては、それは生きた現実である」という言葉からすると、日々の生活の中に現実として息づいたその「激しい熱狂」の中に、天心自身も身を置いているかのようにも思える。しかし、先祖たちにとって天皇の存在が「象徴的意義」でしかなかったと記している点からは、「激しい熱狂」とは対照的な、やや冷めた眼差しを天心の中から感じるようにも思われる。

解釈の分かれそうな点については一旦保留にするとして、ほぼ確実に読み取れると考えて差し支えない点について述べるならば、少なくとも、天心は、天皇を「神秘的な畏敬」や「不変の忠誠心」を集めてきた存在として記述すべきものとして捉えているようである。また、「我が国を訪れた西洋人たちが、日本には、江戸には世俗的な、京都には宗教的な、二人の支配者が存在していると書き記した」と書いてある辺りからは、日本の天皇と将軍の関係が西洋の書物などにおいては教皇と皇帝の關係に喩えられて説明されることがあったことなども、天心は知識として持ち合わせていたように思われる。もし、そうであるならば、『日本の目覚め』を著す上でも、キリスト教圏の文化に寄せた単語で日本の文化を置き換え記述する必要性を考えていた可能性は高いと見て良いのではなからうか。そのような考えに立ってみると、問題となっている神道の説明文における「in the person of the Mikado」は、やはりキリスト教の神学用語としての「person」に引き寄せて考える方が、より適切な解釈になるのではないだろうか。

問題の一節を筆者が訳すならば、「十九世紀の初めに体系化された神道は、神代の時代から伝えられてきた原始的な清浄さの崇拜という祖先崇拜の宗教である。それは、日本人種の先祖代々の理想を信奉し、純真さと誠実さ、帝という人物（一個人・一人間というよりは、神の代理人的な役割人格を社会・文化内で持たされた一存在）に帰属させられてきた先祖代々からの統治権に敬服すること、そして先祖伝来の如何なる外国の征服者もいまだその足を踏み入れたことのない清く神聖な岸辺を持つ土地への献身を教える」とするのが適当ではないかと思われ<sup>356</sup>。

このように考えると、宗教上の役割を与えられた人間として捉えているという方向で読み解くならば、「天皇を人間として扱っている」という木下の解釈も確かに当てはまるものだと思う。しかし、同時に、天皇の立ち位置を、キリスト教における三位という神の現れ方に寄せて説明しているという意味では、それが異文化間の理解し易さを優先した解説手法の一つだとしても注目に値する点であり、現代的な意味で「天皇を人間として扱っている」とは帯びる意味合いが異なっているのではないかと思われる。

木下は他にも、天心の天皇観が国粹主義的ではない点の裏付けとして、『東洋の理想』の「明治時代」の章の冒頭における「The Meiji period begins formally with the accession in 1868 of the present Emperor, under whose august direction a new ordeal, unlike any in the annals of our country, has had to be faced.」という一文にも着目している。訳すと、「明治時代は現在の天皇の一八六八年の即位によって正式に始まったが、それは彼の威厳ある指導の下、我が国の如何なる年代記においても類を見ない新たな厳しい試練に直面しなければなら

ずにいる中でのことであった」となる。木下氏は、この「the present Emperor」の邦訳を「今上天皇」とするか「現在の天皇」とするかで、読者が読み取る天心の思想と主義は変わってくるはずであり、「Mikado」や「Emperor」を用い、「Majesty (陛下)」を使わない天心の姿勢には注目すべきであるというのである。確かに、いずれの訳語を取るかで、天心の印象が変わるのは事実であるが、「Majesty」を用いない点が、当時において殊更目立つ点であるかというのは、やや疑問が残る。天心の『東洋の理想』の出版よりも三年早い、一九〇〇年に刊行された新渡戸稲造の英文著作である『武士道 (BUSHIDO : The Soul of Japan)』では、やはり天皇は「the Emperor」と書かれている。さらに言えば、キリスト教徒として知られる新渡戸であるが、同著の「二章 武士道の源」における神道に関する記述では、次のように記している。

Its nature-worship endeared the country to our inmost souls, while its ancestor-worship, tracing from lineage to lineage, made the Imperial family the fountain-head of the whole nation. To us the country is more than land and soil from which to mine gold or to reap grain—it is the sacred abode of the gods, the spirits of our forefathers: to us the Emperor is more than the Arch Constable of a Reichsstaat, or even the Patron of a Culturstaat—he is the bodily representative of Heaven on earth, blending in his person its power and its mercy.<sup>(357)</sup>

これを訳すと「この自然崇拜は我々の魂の最奥に祖國を愛する気持

ちを育み、同時に、家から家へと辿られてきたその祖先崇拜は、皇族を全国民の根源の頂点とした。我々にとって、祖国とは金脈が採掘でき穀物が収穫できる土地と土壤である以上に、我々の祖霊という神々の神聖な住まいなのだ。我々にとって、天皇とは法治国家の第一の守護者である以上に、文化国家の保護者でさえもあるのだ。天皇は、その人格の中に力と慈悲とを併せ持ったこの世の楽園の体現者なのだ」といった内容になるかと思う。

僅かな例で一般化するのは危険であるが、この新渡戸による記述を、天心の『日本の目覚め』とほぼ同時代の対外的な神道の説明の事例として、先の天心による神道に関する記述と比較すると、新渡戸は「Reichsstaat」や「Culturstaat」といったドイツ由来の国家概念の用語を交えているのに対し、天心はやや平易で詩的な言い回しをしているという文体の相違は感じられるが、祖先崇拜への言及、国土への神聖視、それらの総合的な天皇への帰属という、概ねの説明趣旨は類似したものであると思われる。

これを踏まえて考えると、天心が、天皇を英語で表す際に「Myself」という語を選ばなかったことが、同時代の人間と特別に相違している態度であるとは結論付け難い。「皇族を全国民の根源の頂点とした」「天皇は（中略）この世の楽園の体現者なのだ」とまで述べる新渡戸の姿勢を見ると、むしろ、天皇を「the Emperor」という単語で表しているも、それは天皇を特別視する心理を欠くことに直結するものではなく、天心の言うところの「今日我々が感じているような激しい熱狂」に相当する畏敬を十分に持って記述している場合があり得るのではないかと思われる。この新渡戸の神道の説明における、天皇への尊崇の念を厚く感じられる記述に比べれば、確かに、天心の天皇

に関する記述は幾分客観的な印象を受けないでもない。しかし、そうだとしても、当時として一般的に持たれていたであろう程度の実態への崇敬を、天心が持ち合わせていた可能性の余地は十分に残っており、天心が「天皇を人間として扱っている」と言えるほど現代寄りの価値観の持ち主だったとは断定出来ないのではないかと思われる。

無論、木下が論拠としているのは、英語における「天皇」を表す語の選び方だけではない。天心が「今上天皇」よりも「現在の天皇」というニュアンスに近い姿勢であることは、日本語で書かれた文章からも窺い知ることが出来るとしている。木下は、『国華』における天心と九鬼の文章を読み比べると、その相違がよく分かるという<sup>(309)</sup>。天心研究において一般に『国華』発刊ノ辞と呼ばれる『国華』第一号における巻頭の論考は、実際のタイトルは「国華」と記されているのみであり、何処にも著者の署名がない。しかし、文体と内容から天心が書いたものとされ、平凡社版『岡倉天心全集』にも収録されている<sup>(360)</sup>。この『国華』発刊の意義をそれぞれ天心と九鬼が述べている文章を比較して、「九鬼は、書き出しから『我日本人種』の芸術の才能を讃え、『我万世一系ノ国体』とも書いているが、『そんな紋切り型の』万世一系』を岡倉は使っていない」し、『国体』も常用語のように使っているが、九鬼ほどの高揚したナシヨナリズム「皇国主義」を文章にしていない」と木下は述べる<sup>(361)</sup>。

二つの文章の内容比較としては、木下に大いに同意するものである。天心の『国華』発刊ノ辞」がほぼ三ページ半に当たる分量であるのに対し、九鬼の「国華ノ発兌ニ就テ」はほぼ一ページ分の分量であるから、論じる内容の幅にある程度の差が生じるのは仕方のないことも言える。しかしながら、九鬼が「我日本人種」の「古来巧妙ノ天

性」に始まる日本美術の賞賛と、維新以降の伝統技術の衰退消失への憂いに終始するのに対し、天心は、頻りに「国体」の発達について触れながらも、「遍く標範ヲ古今ニ取り、広く智識ヲ東西ニ求メ」る姿勢を最初の段落から説き、また、「何ソ必スシモ故人ノ軌轍ヲ踏ミ、死法ヲ因襲シテ、以テ純正ノ国家精華ヲ保ツトセンヤ。明治ノ画家ハ奮勵揮擢我邦ノ特質ニ基キテ進歩スルニ躊躇スルヘカラサルナリ」と述べるなど、元からの「日本絵画ノ特質」を重んじつつも、古今東西の知識を問わず新たな手法を取り入れて発展させていくのが明治の画家の在り方であると主張している。また、日本美術の起源に古代以来の諸外国からの影響がある点についても、九鬼が「異邦ノ文芸」から「自己ノ様式」を生み出し洗練させてゆく日本美術の優秀さについて賛辞を尽くすのみであるのに対し、天心は、「誰カ能ク史筆ヲ執テ本邦ノ上古韓漢及中亜細亞諸邦ト交通来往シテ得タル所ノ美術的性質ノ包含ヲ分析シ、其來歴沿革ヲ詳叙スルモノ」と、日本美術の起源を外国に求め詳細に探ることの大切さも説いている。

また、注目したいのは、天心が、美術は「国民ノ尊敬、欽慕、愛重、企望スル所ノ意象、觀念、渾化凝結シテ形相ヲ成シタルモノ」であると述べている点や、「國民ト共ニ邦國ノ精華ヲ發揮セント欲スル」であるとか、「將來ノ美術ハ國民ノ美術ナリ。國華ハ國民ヲシテ自國ノ美術ヲ守護スルノ必要ヲ唱道シテ止マサントス」などという旨を、この『國華』発刊における抱負として掲げている点である。これらの言葉からは、天心が、今後の美術の担い手は「國民」でなければならぬと認識していると読み取れる。

この天心の姿勢は、九鬼の「歴世二千年皇恩ノ優渥ナル悠遠ニ文芸ヲ奨励シ、長久持續シテ間斷ナク高尚優美ノ域ニ進マシメタル」と

いう、美術の発展を「皇恩」に帰することを強調し、さらに、「我万世一系ノ国体ニ伴隨シテ実ニ万邦其比ヲ見サルナリ」と、その美術を皇室に連なる日本の特質として賛美する姿勢とは、少々異なるものであると思われる。尤も、九鬼の「皇恩」に比較対応させられる部分として、天心にも「千年ノ史乘ヲ芳艷ナラシメタリ。是レ實ニ歴朝仁聖洪恩ノ余沢」という記述がある。このことから、九鬼の用いた「皇恩」という語に比べ、よく見る儒教道德の言い回しの一つとして読めるような表現ながらも、天心も、美術の発展が時の権力からの保護・奨励に拠るところがあるという認識は持つており、それが「歴朝仁聖洪恩」すなわち代々の仁徳ある天皇・朝廷がもたらした大きな恩であると記述すべき事項であると考えていたことが窺える。しかし、天心は、日本美術が今日まで受け継がれてきた成果を、「実ニ歴朝仁聖洪恩ノ余沢」であると同時に、「我カ先民ノ精ヲ抽キ華ヲ萃メタルモノナリ」として、皇室一点ではなく、古来の賢人達、あるいは広く先祖全体に帰するような記述をその後に行っているのである。

さらに言えば、天心は、「国体」の発展が滞った理由について述べる件で、「文学独り上流ニ行ハレテ教育普及セス」などとも記している。これを見ると、天心は、知識が上流階級など特定の層に独占されることには弊害があるという認識を所持していたように思われる。

それらを踏まえ、頻りに連呼される「國民」や「国体」を見ると、天心の言う「国体」とは、歴史や伝統を知識として有し、それらを一体性の基盤として「國民」が纏まり、日本という国を形作って発展していくことを目指す「国体」であり、統治形態における皇室の中心性を強調する方面の「国体」とは、やや趣旨が異なるのではないかと思われる。また、明治天皇の治世下を表すのに、九鬼は一度、「聖世」

という言葉を用いているが、天心が用いたのは、「明治ノ昭代」「明治今代」という語のみであることも、注目に値する。

これらの分析から立ち返り、天心の英文著作における「the present Emperor」を見直すと、「今上天皇」という訳語が当時の感覚として必ずしも当てはまらないとは限らないが、天心の中においては『現在の天皇』のニュアンスに近い」という木下の見解は、非常に重要な指摘である。

それを踏まえて考えると、天心の思想は、その英文著作の邦訳文に間々見られるほど国粹主義的であるとは言い切れず、どのような天心像が描かれるかは、翻訳者の持つ既存の天心像に拠って容易に変化してしまう危険性があったことが分かる。

では、このような邦訳上の歪みは、いつから生まれたものなのだろうか。一九三九年に刊行された聖文閣の岡倉天心全集における福田久道訳（一九三五年に出された聖文閣『岡倉天心全集 天の巻』に掲載されたのと同じ邦訳文のようである）では、冒頭で取り上げた『日本の目覚め』における神道に関する説明の部分は次のように邦訳されている。

第十九世紀の初期に形式づけられた神道は、祖先礼拝の宗教である——神代から伝来せる原始的清浄の礼拝である。それは、日本種族の祖先伝来の理想、即ち質朴や誠忠、天皇の御身に授かり給へる皇祖伝統の統治権の遵守、及びその神に捧げられたる神聖なる浜辺には、未だ嘗て外国の戦勝者が足を置けることなき祖先伝来の陸地への奉仕を教へてゐる。<sup>(32)</sup>

先に述べた齋藤の邦訳と、福田の邦訳とを比較すると、福田の邦訳は「天皇の御身に授かり給へる」など、天皇への敬意を表現する語の丁寧さはあるが、齋藤の邦訳のように「伝わり伝わった国粹」「万世一系の天皇」「神国日本」などといった表現はされておらず、意外にも原文の単語一つ一つに忠実な邦訳をされているという印象を受けるのではないだろうか。そうであるとするならば、齋藤の邦訳から国粹主義的な印象を受けるのは、戦後、多大な犠牲を生んだ戦争に対する反省へと向かう流れの中で、天心の「アジアは一つ」を初めとする思想が「大東亜戦争」において標語的に利用されたという事実を大前提として、天心の思想について解釈を為そうとしたからであると言えるだろうか。天心の思想が太平洋戦争へ向かう時代の中で時流に迎合する形に読み替えられていったのは事実だとしても、そのような先入観ありきで天心の思想を見直すのは、公平な見方ではないと思われる。天心を巡る研究は、史料原文に拠る事、また史料の全体を入手することの重要性を多く感じさせてくれるものである。

#### 第四節 天心と国粹主義グループ

長谷川如是閑は、一八八〇年代後半から一九〇〇年代前半頃を振り返り、新聞『日本』や雑誌『日本人』が現れたことの背景を、次のように語っている。

世間では、「日本」派の一派を「国粹保存派」と称していたが、その人たちが自身がそういつていたのではなかった。要するに、ヨーロッパの近代国家は、ギリシャ精神の復活を伴った、すなわちギリシャ的種族国家の伝統を追った民族国家として成立したものである

という近代史の認識から、遅れてその後を追う日本も、江戸中期に起こった民族精神の復活にもとづく、近代的国民主義への動向をとってはじめて、植民地ではない自主的の近代国家としての発展を期待し得るといったような立場から、主として英仏学者が結束して立ったものだった。世間ではそれを、当時の欧化主義に対するトラディショナルリズムと見たのだが、そのころはまだトラディションを「伝統」と訳さずに、「国粹」といったので、そういう名称をもって彼ら呼んだのである。

そのころは、欧化主義に対して、他の極端に立つ、維新後の神風連の系統をついだ反動主義の一派があつて、それが平田篤胤派の神国思想に拠つて欧化主義を排撃したので、世間ではそれを「高天原派」と称した。「国粹派」は、一方で政府の欧化政策と、それにもとづく条約改正案に反対すると同時に、この「高天原派」をも排撃すべく起こつたものであつた。<sup>(363)</sup>

この如是閑の自叙伝が出されたのは一九四八年から一九四九年にかけてであるから、記憶としてはかなり昔のことを書いていることになる。如是閑が『日本』新聞の記者を勤めた経歴から、戦後に『日本』新聞の立場を悪く書くはずがないと見るか、『日本』新聞の記者をしてきたからこそ、その成立背景や主義主張を正しく記憶しているはずであると見るかは、人により判断に相違が生じる点であるかも知れない。

今日、一般的な日本史知識として、「国粹」を調べれば、「国粹」は nationality の訳語である旨が記されている。中野目徹に拠れば、nationality の訳語としては、一八七五年の『文明論之概略』の中で福沢諭吉

が「国体」を用いたのが早く、「国粹」を当てたのは志賀重昂が最初のものである。そして、同氏の調査の限りでは、「国粹」という語の典拠となりそうな中国古典や日本古典は見当たらず、上田敏や小島鳥水の回顧から、「国粹」は重昂の造語であると思われるようである。

ただし、重昂が編集補助として参加していた一八八六年刊行のヘボンの『改正増補和英・英和語林集成』を見ると、nationality の訳語は「Kuni, Koku」即ち「国」となっているのみであるという。<sup>(364)</sup>「国粹」という言葉が重昂の中で生まれた時期と契機は判然としていないようであるが、少なくとも、「国粹」は訳語として登場した語であり、即ち欧米諸国との出会いや世界情勢の見分があつたからこそ「国粹」も生まれたものであると言つても良いのではないだろうか。しかしながら、「国粹」が元は tradition (伝統) であつたとの記述は、寡聞にして如是閑の先の記述しか存じ上げない。

本来「国粹」が何を意図していたかという問題に関しては、一八八九年、三宅雪嶺が雑誌『日本人』において、「国粹保存」という表現について次のように述べたと伝えられているようである。

余輩しばしば国粹論を唱道し、日本特得の元気を発揚し、日本固有の秀質を振興して、もつて国家の独立開達を維持せざるべからざる理由を明らかにし、重ねていたずらに他国の秀美を見て自家の国を忘れ、自家の身をも忘るる、いわゆる欧州主義の人士を警戒して、今日すでに振作せるの流弊を挽回せんと勉めたり。しかるに余輩と其の見解を異にするものは、国粹保存と言ふこの保存なる文字を見て急断速了し、余輩をもつて祖先伝来の旧事物を保存して欧米の事物に拮抗せんとするものなり、今世開化の結果たる新種輸入の路

を閉塞し、その普及伝播を欲せざるものなりと誤解し、否、真に誤解したるにあらざるべきも、余輩とその意向を異にし、余輩とその好尚を均しゅうせざるがゆえに、ことさらに誤解したるまねして種々に醜名を付し、余輩の旨義を傷つけんと試みたり。(中略) 旧来の事物をあくまでも保存すべしとはその主義にあらず、旧来の制度に拘泥し、旧来の風俗習慣を維持せんとするはその本意にあらず、(中略) たとえ泰西産出の事物といえども、用いてもって利あるときは、これを用うべし、(中略) しからばすなわち国粹論者本来の主旨如何と云うに、余輩はまさに言わんとす、たとい欧米の風俗を採用するも、たとい旧来の習慣を打破するも、日本在来の精神はこれを保存せざるべからず。(中略) 開明社会の智識思想より生出したる国粹主義は、旧物保存主義にあらざることを識別する、豈にそれ難からんや。(365)

この「余輩国粹主義を唱道する 豈に偶然ならんや」の論説は、元々は無署名であったことや、文体や内容の分析などから、中野目や小畑嘉丈は、雪嶺ではなく菊池熊太郎の手によるものである可能性を唱えており、特に中野目は、『日本人』の第一号から第七三号まで「三宅雪嶺は一度も『国粹』という言葉は使っていない」とまでしている(366)ので、この論説を、そのまま雪嶺の思想として受け取ることには出来ない。しかし、西洋の採用すべきところは取り入れ、日本のものでも旧くて世に適應していかないものは打破していかうと論じる姿勢が、少なくとも当時の国粹主義グループの中にあつたのは確かであろうし、その考え方は天心の「『国華』発刊ノ辞」と通じる部分もあるように思われる。

天心の思想が国粹主義的であつたのか否かということを考える前に、そもそも国粹主義とは何であつたのかということをも、よく再確認せねばならない。言葉の帯びる意義は、発信者と受信者との間で、また社会情勢の変化の中で、さらには一個人の思想の中でも時期によって変わるものである。中野目は、「国粹」という言葉は、登場当初から保守的・反動的なものと曲解されることがあつたが、一九一九年に大日本国粋会が結成された頃から「『国粹』の字義は明確に転回」し始め、その後、太平洋戦争と戦後処理を経て、「侵略戦争の元凶の一つと見なされた」という(369)。また、そもそも「国粹」理論化の方向性も、政教社内で様々にバリエーションが見られるという(370)。

そういった点を踏まえつつ、天心と、主に『日本』新聞や雑誌『日本人』で活動した、いわゆる国粹主義グループの人々との間に見える繋がりについて考えてみたい。

天心と雪嶺には、多少の交流があつたようである。天心は、まだ東京美術学校に勤めている頃、雪嶺に何通か手紙を送っている。一八九五年五月四日、五月十日の内容は、東京美術学校の課外講義として開かれた美術講話会への参加の確認であり、六月二日には晩餐への誘い、六月三日には講話会参加の礼を述べる手紙を送っている(371)。内容的には業務上の手紙といつて差支えないし、この後、数年間、雪嶺宛の手紙はない。しかし、東京美術学校非職後の一八九八年九月二九日には、雪嶺に、日本美術院の賛助会員になるよう依頼する手紙を送っており、さらに、一八九九年四月一六日には、日本美術院同好会への加入も依頼している(372)。いずれにせよ、個人的な親交を窺わせる手紙ではないが、少なくとも、日本美術院時代にも関係が続いているということは、天心は、雪嶺のことを、東京美術学校非職後も支持者と

なってくれる人物であると認識していたのであろう。平凡社版『岡倉天心全集』に収録されている範囲を見る限り、天心が雪嶺に宛てた手紙は以上の六通のみであるようだから、後年まで続くような個人的に深い関わりはなかったのかも知れない。これらの手紙よりも前の、一八九一年一月二十六日には、『日本』新聞に宛てて、「東京美術学校々友会々員 岡倉覚三 他二十三名」が、美術工芸品の図案を必要としている者があれば送付するので紹介して欲しいという旨の手紙を送っているが、『日本』新聞はその手紙を「左の如き書状を所々に配布せり」として掲載していたというから、格別に『日本』新聞にのみ送ったものではないとも思われる。<sup>(374)</sup>

ただ、天心は、幾度か『日本』新聞や雑誌『日本人』に寄稿しているようである。平凡社版『岡倉天心全集』に拠って、時代順に挙げてみよう。まずは、筆名の渾沌子で書かれた『美術展覧会批評』であり、内容は一八八九年「四月一日から五月十五日まで開かれた日本美術協会展を批評したものであり、同年の『日本』新聞の「四月十八日、十九日、二十四日、二十五日、二十六日、二十八日の『雑報』欄に連載」されたという。<sup>(375)</sup>次に、やはり渾沌子の筆名で書かれた『帝國議會に蟠まる一種の勢力』がある。これは、一八八九年一月三日の『日本人』第三十四号に掲載され、「岡倉の数少ない時事評論のひとつである」という。<sup>(376)</sup>内容としては、大同団結の後藤象二郎と立憲改進黨の大隈重信との二大政党が争う現状をナポレオン戦争のワテローの戦いに喩え、どちらがイギリス軍でどちらがフランス軍となるかは不明だが、戦況を決するプロイセン軍となり得る第三勢力は谷干城である、という趣旨のものである。<sup>(377)</sup>河北倫明は、この内容から「天心は谷派を非常に支持」していると思われ、その在り方は「非常な国粹派と

非常な開化派との間で、その両方をにらみながら是非々々に出て」いこうという天心の美術における態度に通じているとしている。<sup>(378)</sup>その次は、渾沌子の筆名で書かれた『二種類の集會』で、これも時事評論であり、一八九一年一月二二日の『日本』新聞に掲載された。<sup>(379)</sup>内容としては、集會には「示威會」と「相談會」の二種類があり、「示威會」は味方を鼓舞し敵対者を威嚇するためのもので、「相談會」は時として秘密裏に行われる進退や誓盟などに関わるものであり、示威的なものは空虚で結論の出ないものに終わりやすいので、「相談會」の方が効用のあること、そして、立憲政体は集會を礎石として成るものだから等閑にしてはならないということ述べている。<sup>(380)</sup>その次は、一八九四年に第一回中国旅行の成果として書かれた『支那南北の区別』で、これは岡倉覚三の名で著され、『国華』に掲載された後、『日本』新聞に転載されたようである。<sup>(381)</sup>美術学校騒動以前のものはこれまでで、次は一九〇二年、インド旅行で目にした美術と仏教について短く述べたものが一月三日の『日本』新聞に「岡倉覚三氏の印度談」として掲載されたようである。<sup>(382)</sup>

天心と国粹主義グループについて、より個人的な繋がりを求めるならば、第一章第一節で高田早苗の回想に登場した、天心の東大同窓生の福富孝季が居る。平凡社版『岡倉天心全集』を見る限り、天心から福富宛の手紙は特にないようであるが、福富は天心と「最も親しくしていたといわれる」同窓生で、『日本』新聞の創刊に関わった人物でもある。<sup>(383)</sup>福富は一八九一年に自決し、天心は彼の為に追悼の漢詩を作り、また追悼文も著した。<sup>(384)</sup>漢詩は「縦野便箋に墨書したもので、製作年月日は不明のようである。<sup>(385)</sup>また、天心が書いた追悼文は、福富が没した翌年の一八九二年に日本新聞社から出された追悼文集『臨淵言

行録』にはなく、一八九五年（明治二十八年）の再版増補版での追加となっており、本文の終わりに「明治二十八年六月五日 岡倉覚三」とされているという。<sup>(387)</sup>

この他に、天心との個人的な繋がりがから、国粹主義グループの人物を挙げるならば、『国華』創刊に共に携わった高橋健三が居る。高橋もまた、『日本』新聞の創刊に関わった人物である。しかし、より注目すべきなのは、高橋が、「清・朝鮮・日本の三国による『東亜同盟』という地域秩序を構想していた」人物でもあったことであろう。<sup>(387)</sup>

宮川は、「岡倉は、政論こそ公表しないが、高橋の信条とするナシヨナリズムに、ふかく共鳴していた」としている。<sup>(388)</sup>ただし、その思想的な繋がりにについては、詳細に扱ったものがほとんどないように思われる。

その理由としては、まず第一点目として、天心と高橋健三との交流について、明らかにっていない部分が多いことが挙げられるだろう。宮川に拠れば、天心と高橋が知り合った時期に関しては明確ではないが、両者の間には、九鬼隆一、濱尾新、井上哲次郎、森田思軒、饗庭箕村など、共通の知人が幅広くいたことから、その中から交友が生まれたであろうとしている。<sup>(388)</sup>また、一雄氏は、『父天心』の中で、一八九〇年から一八九七年までの根岸の「お下屋敷」に居を構えていた頃を振り返り、「当時の交友としては、後に名翰長と謳われた自恃居士の高橋健三や、代議士・弁護士の大谷吉備一郎等々の人びとであった。ことに高橋には、天心は非常に憧憬を感じて兄事するがごとくみられた」のちにいたり、天心の詩人的無軌道の行動が、真摯な自恃居士の矚意を買い、さしも深かった交りも絶交同様に打ち絶えてしまったが、このお下屋敷時代には深交の頂点に達していて、その来往

は頻繁をきわめていた」と記している。<sup>(389)</sup>高橋は一八九八年に没し、その翌年『自恃言行録』という追悼文集が出されたが、その中にある内藤湖南が記した「高橋健三君伝」には「岡倉覚三氏は俱に明治美術の進捗に力を効し、交態極めて厚かりしが、後、故ありて交を絶ち、相通ぜざるに至りしも、猶ほ今時真に美術の鑑識ある者君に如く莫しと称せりと云ふ」と書かれている。<sup>(389)</sup>交流を絶ったというその言葉通りと言うべきか、この『自恃言行録』に原稿を寄せている中に九鬼隆一や井上哲次郎の名はあるが、天心の名はない。<sup>(389)</sup>宮川は、高橋の没した頃が、天心の方では美術学校騒動や日本美術院の創設などに関わっていた時期に当たることを指摘しているし、<sup>(389)</sup>福富の例でも天心は追悼文が間に合っていないので、一概に追悼文がないのが絶交のためとは言いきれない。ともあれ、詳細不明な点が多いのである。

理由の二点目としては、高橋健三に関する研究自体が多くないことである。中川未来に拠れば、高橋に関する研究は、高橋本人が比較的短命なことや、言論面において陸羯南との相似が強調されてきた傾向などもあり、国粹主義グループの中でも「陸羯南や杉浦重剛らと比べて立ち遅れて」おり、「彼の『一種斬新なる国家主義』の内容それ自体が検討されることはなかった」という。<sup>(390)</sup>

しかし、天心と高橋が、一時期は親しくしていたのは確かであるし、高橋が国粹主義グループに属していたのも確かである。天心の「アジアは一つ」という言葉が、いつ頃から、何を契機に生まれたものであるのかは、天心研究の上で長らく問題となってきた。一八八五年の福沢諭吉の『脱亜論』の対照として出現したアジア観の一つであるという指摘、同時代人として一八九三年の樽井藤吉の『大東合邦論』などと共に思想の登場背景を探る試み、また、インドとの繋がりがから、不

二一元論の「One」に由来するという指摘などは既に述べられている。高橋が唱えた「東亜同盟」は、天心の「アジアは一つ」に比べて含む範囲は狭いし、天心よりも高橋の方が、明確に政治的意図があると思われる。しかし、直接に親交のあった人物からの影響という点で、高橋にも注目する価値はあるだろう。

中川に拠れば、高橋の中に「東亜同盟」の構想が登場してくる背景には、防穀令事件があったようである。高橋の「東亜同盟」に関連した言説は、主に大阪朝日新聞に掲載されており、まず、一八九三年五月一九日の「己を大にし天下を小にせよ」という題の論説で「日本の特立を全くせんと欲せば、東亜の特立を保つ所以を思はざるべからず」「列国の間に立て、其屈辱を受けざるは、内治の整理、固より忽亡すべからずと雖も、其勢力の四境の外に発するに非ざるよりは、国家一日も安泰なるべからざるなり、東亜諸国、各相保助して、皆其独立の実を挙げ、強隣相援て、欧米列国に対せば、東方の列国、実に四境の藩屏なり」と述べている<sup>(395)</sup>。六月一六日の「東亜同盟の準備<sup>(396)</sup>」を見ると、その同盟の具体的な対象は日本、清、朝鮮となっており、三国は「文字」「史蹟」「人種」「欧米に対する形勢の利害」などに関して通じ合う部分があるが、「感情」の問題で上手くいかずにいる、そうなるを「徳を以て之を懐柔する」ことも出来ないで、「実力を示すに在るのみ」であり、「今回朝鮮防穀事件の若きは実力を示し威信を立るに於て一好例」であると述べる。ただし、中川は「東亜同盟構想はその最終目的として、清・朝鮮・日本の連合による欧米との対抗を視野に入れていたから」「高橋は日清間の不要な外交摩擦は回避しようと考えていたように思われる」としている<sup>(397)</sup>。しかし高橋は、日清戦争に際しては開戦論を唱え、その「旗幟に掲げたのは、『東亜

同盟』であった」という<sup>(398)</sup>。高橋は、当時日清戦争の意義としてよく説かれていた『文明と野蛮の戦争』を正面から批判し、『歴史上中国の『文明に負ふ所多き』日本が『夷狄の支那』を打倒し、『文化の支那』を回復することで、『東洋の文運』を進め世界の『人道』に寄与する』という論理を唱え、『清朝が崩壊し『漢人の故業』が恢復されたならば、旧清の領域を『三分、若くは四分』して、それぞれを独立国家としていわば中国連盟を結成させ』「日本は中国の新指導者と連携し、『諸連盟国』の嚮導者として中国連盟・朝鮮とともに『西欧に抗衡』する』という戦後構想を持っていたという<sup>(399)</sup>。

大枠として見ると、天心の思想が一九三〇年代に辿った道筋を、高橋の場合、日清戦争に際して、本人自ら辿ったような印象である。高橋がこれらの言説を書いていたのは、時期としては、まだ天心と高橋に親交があった根岸在任時代に当たる。中川は、高橋が一八九五年一月六日の論説の中で書いた「嗚呼亜細亜の汚辱は、即ち日本の汚辱なり」を、天心の「ヨーロッパの栄光はアジアの屈辱である」を想起させるものであるとしている<sup>(400)</sup>。日本の文明の源流の中に中国があると考えている点では、天心と高橋は共通している。そして、日清戦争に際し、『文明と野蛮の戦争』ではなく、東洋文明を回復する戦争であるとしたのが高橋であり、日露戦争に際し、一度は『日本と黄禍』で『文明と野蛮の戦争』であるとしたものの、そのような戦争が東洋にもたらされたこと自体が白禍であると『日本の目覚め』で記したのが天心である。

憶測の域を出ないが、高橋の唱えた「東亜同盟」の思想が辿った道筋を間近で見えていたからこそ、天心は、自身の「アジアは一つ」の言葉が日本国内で出版されることを避け、また、その「一つ」の概念を

描く上で抽象的な「美」や「愛」を用いて具体化することを避け、そして、戦争は美の理想に反するものである旨も綴ったのかも知れない。

この他に、天心と国粹主義グループを関連付けた見解としては、色川が、一八八七年に出された志賀重昂の『南洋時事』を、天心の『東洋の覚醒』に見られる危機意識を先取りしたものと挙げている。

『南洋時事』は、南洋の島々の地勢、西洋諸国の植民地となっている現状、オーストラリアとの貿易の展望や南洋の経済事情、オーストラリアの国民意識の発展と独立の展望、ハワイへの日本人移民などの他、附録で、北海道開拓の今後、インド独立の展望、日本と台湾の関係など、幅広く扱っている著作である。<sup>(48)</sup>色川は、これを天心よりも「少なくとも十五年早く」「イギリスなど先進文明諸国のもつ『虚偽』と『侵略の原罪』に想到している」ものとして位置づけている。<sup>(49)</sup>また、『天心の日本美術の復興の運動も、全体としてみれば』三宅雪嶺や志賀重昂らが展開していった「国粹保存の潮流のなかにおいて考えられる」としながらも、第三章第一節でも少し引用したように、天心は「『国粹』といわず『国華』とよぶように、政治的、世俗的な動機をしりぞけて（軽んじて）、精神的貴族らしい『美』の探究にと傾斜していった」という点で、より明確に政治的な意識を持っていた雪嶺らとは異なるものとしている。<sup>(50)</sup>

しかし、天心が政治的な方面に歩み寄らずとも、国粹主義グループの側は、伝統美術の存在を、ある程度重要視していたとは思われる。

雪嶺の著作の一つに、一八九一年に出版された『真善美日本人』というものがある。<sup>(51)</sup>この著作では「日本人の任務」というものが説かれているのだが、それは端的に表すと、「真を極め、美を極め、善を極めて、よく円満幸福の域に到達せんとする」ことであるという。真を

極めるというのは、世界の智識の究明、即ち、学術研究のための設備と資金の拡充を意味する。そして、善を極めるというのは、正義を為すこと、また正義を為せるように他国と平等な立場を保つため軍備拡張を進め、それを支える資金を得るために産業育成も行うことを意味する。そして、美を極めるというのは、工芸、建築、音楽、彫刻、絵画などにおいて、自国の特質を以て世界と競争出来るものにしていくべきであるということである。

また、志賀重昂も「国粹」は「美術的の觀念に存在す」としていたようであるし、高橋も、美術品は「『我が国人種歴史、数千年来の涵養』による『国家固有の価値』を集約的に表現している」ものと位置付けていたようである。<sup>(52)</sup>細かく見ると、美術の如何なる点に価値を見出すか、国粹主義グループ内でも各々相違はあるようであるが、彼らがそのように伝統美術を評価していたからこそ、本節の最初で見た手紙にあったように、天心も、講義や支援を頼んでいたのだろう。

色川は、同時代の知識人に比べ、天心は西洋人に対し劣等感を持っていないという特色があると指摘している。<sup>(53)</sup>その点について、天心の場合、幼少期から英語が流暢であったということや、外国でも理解者や支援者に恵まれていたということなどはよく注目されている。しかし、国粹主義グループが、自国の特質を肯定する理論の中に美術を取り込んでいたことを考えると、恐らく、天心の劣等感の無さは、彼が美術を軸に活動した人物であったことも関連しているのではないだろうか。雪嶺の『真善美日本人』の中では、学術も軍備も、拡充資金の必要性が唱えられている。それは、学術も軍備も、西洋から技術や文物を買い入れなければならない分野であると認識していること、即ち、現状では西洋よりも劣っていると感じていることを意味するだろう。

しかし美術に関しては、そういった資金的な問題には触れられていない。現実的には、伝統美術の保護・育成にも資金や政策が必要であるが、恐らく、美術に関しては、国内に既存のもので十分に西洋と渡り合えるという前提であるから、資金的な問題に触れられていないのであろう。雪嶺の言説だけから結論付けられるものではないが、当時、美術という分野に関しては、他の分野に比べて、西洋に対する劣等感が弱まりやすい風潮が見られたのではないかと思われる。

天心と国粹主義グループとの繋がりを明確に示す史料は少ない。しかし、同時代人の中で天心の位置づけを探る上では、英語に精通した国際人としての面ばかりでなく、国粹主義グループの言説との比較分析も、これから一層必要となるのではないだろうか。

## 終わりに

『東洋の覚醒』の原稿ノートの表紙には、「Asia is one」の原型と思しき「We are one」というペン書きがあるそうである。天心がこれを記してから百有余年が経った。「一つのヨーロッパ」を一定の形にした[2]は、加盟国の経済問題や難民受け入れ問題などが浮上する中でイギリスの離脱が決定し、その結果イギリス国内ではスコットランド独立問題が再燃した。スペインでは長らく続いてきたカタルーニャ独立問題による対立が一層深まり、中東では内戦などが続き、アメリカは人種差別や格差拡大の問題を抱え、一地域圏は元より、一国内でさえ一つであるのかという問題が浮上しているように思う。帰属意識の共有は団結を生むが、過度のそれは排他性を帯びることになる。英語を得意とする国際人でありながら、時として西洋を非難し東洋へ

共感し、しかし自国第一とも解釈出来る姿勢も帯びた天心の在り方は、今日の我々に置き換えて他人事ではない。

また、天心の言説が歴史の中で辿ってきた位置づけは、部分的な言説の切り取りや恣意的な史料解釈が如何に危うい結果をもたらすかを我々に教えてくれる。そのような中で、美術、思想、文学などの分野で扱われることの多かった天心について、日本史の分野から再検証するのは無意味ではないと思う。

天心が、美の使徒として生き、美の世界に理想を求めたことは確かであろう。しかしながら、それを理由に、天心の思想から政治性を読み取ることを否定するのは、かつてと同じ過ちを繰り返すことに繋がりがかねないのではないだろうか。美術にせよ、文学にせよ、理想的世界を描くことが可能な分野である。しかし、政治もまた、ある種の理想を人々に語る必要に迫られる時がある。そういう時に、両者は密接不可分なものとして結びついて機能し得る。

天心の思想を、政治的な利用の為に脚色して理解してはならない。しかしまた、天心の汚名をそそぐ為に、天心の思想を美術のみに関するものであると限定して理解してはならない。どちらの思想としても読み解ける多面性、「理想」に内在する危うさと向き合うために、多様な研究分野から分析していかなければならない。

筆者の力が及ばず、既存の研究を越えた生産的意義はもたらせなかったが、それでも先行研究で見落とされた点を幾つかは明らかに出来たかと思うので、後続の研究の一助となれば幸いである。

## 註

(1) 堀岡弥寿子著『岡倉天心との出会い』近代文芸社、二〇〇〇年、

六八頁。

- (2) 堀岡弥寿子著『岡倉天心考』吉川弘文館、一九八二年、一一一頁。
- (3) 金子敏也著『宗教としての芸術 岡倉天心と明治近代化の光と影』つなん出版、二〇〇七年、二一〇頁。
- (4) 森田義之著「エピソード 現代の岡倉天心像」(森田義之、小泉晋弥編『岡倉天心と五浦』中央公論美術出版、一九九八年、三三二～三三三頁)。
- (5) 竹内好著「岡倉天心 アジア観に立つ文明批判」(朝日ジャーナル編集部編『日本の思想家』第一卷、朝日新聞社、一九六二年「同年中、朝日ジャーナルにて掲載」、二八六頁)。
- (6) 岡倉登志著『曾祖父覚三 岡倉天心の実像』宮帯出版社、二〇一三年、一八頁。
- (7) 「年譜」『岡倉天心全集』別巻、平凡社、一九八一年、三七七頁。
- (8) 『岡倉天心全集』第六卷、平凡社、一九八〇年、一六九頁。
- (9) 木下長宏著『岡倉天心 物二観ズレバ竟ニ吾無シ』ミネルヴァ書房、二〇〇五年、一〇～一二頁。
- (10) 同右、一三頁～一五頁。
- (11) 西川武臣著「開港場横浜と岡倉天心」(『大倉山論集』第六〇輯、二〇一四年、三〇～三四頁)。
- (12) 木下、前掲註(九)、一六～一七頁、二二～二三頁。
- (13) 森田義之著「プロローグ 岡倉天心小伝 五浦以前」(森田義之、小泉晋弥編『岡倉天心と五浦』中央公論美術出版、一九九八年、三～四頁)。
- (14) 木下、前掲註(九)、一～八頁。
- (15) 横浜プロテスタント史研究会編『横浜開港と宣教師たち』有隣堂、二〇〇八年、七〇～七二頁。
- (16) 同右、七五～七六頁。
- (17) 同右、七八頁。
- (18) 同右、三四頁。
- (19) 清見陸郎著『岡倉天心』平凡社、一九三四年、六頁。
- (20) 岡倉一雄著『父岡倉天心』(『父天心』聖文閣、一九三九年を復刻)中央公論社、一九七一年、一一頁。
- (21) 宮川寅雄著『岡倉天心』東京大学出版会、一九五六年、一六～一七頁。
- (22) 金子、前掲註(三)、五四頁。
- (23) 岡倉登志、前掲註(六)、二二～二三頁。
- (24) 森田、前掲註(一三)、四頁。
- (25) 前掲『岡倉天心全集』別巻、三七八頁。
- (26) 小泉晋弥著「岡倉天心と異文化交流・研究ノート」(『大倉山論集』第六〇輯、二〇一四年、一一～一二頁)。
- (27) 金子、前掲註(三)、五三頁。及び、「岡倉天心略年譜」(森田義之、小泉晋弥編『岡倉天心と五浦』中央公論美術出版、一九九八年、三四〇頁)。
- (28) 岡倉登志、前掲註(六)、二二～二三頁。
- (29) 岡倉登志著「岡倉天心(覚三)と仏教 平和思想としての宗教・思想」(『LOTUS』第二六号、二〇〇六年、三～四頁)。
- (30) 岡倉登志、前掲註(六)、三六八～三六九頁。
- (31) 高田早苗述、薄田定敬編『半峰昔ばなし』(早稲田大学出版部、一九二七年を復刻)、日本図書センター、一九八三年、四九頁。

- (32) 岡倉一雄、前掲註(二〇)、一六一〜一六三頁。
- (33) 森田、前掲註(一三)、六頁。
- (34) 岡倉一雄、前掲註(二〇)、二四〜二五頁。
- (35) 森田、前掲註(一三)、七頁。
- (36) 竹内、前掲註(五)、二九四〜二九六頁。
- (37) 森田、前掲註(一三)、七〜一二頁。
- (38) 木下、前掲註(九)、九四頁。
- (39) 「岡倉天心略年譜」(森田義之、小泉晋弥編『岡倉天心と五浦』中央公論美術出版、一九九八年、三四一頁)。
- (40) 森田、前掲註(一三)、一五頁。
- (41) 木下、前掲註(九)、一七九頁。
- (42) 岡倉登志著「岡倉天心と万国博覧会(二八九三〜一九〇四)」(岡倉登志、岡本佳子、宮瀧公二著『岡倉天心 思想と行動』吉川弘文館、二〇一三年、三三〜三四頁)。
- (43) 竹内、前掲註(五)、二九六頁。
- (44) 同右、二九三頁。
- (45) 木下、前掲註(九)、一七八頁。
- (46) 森田、前掲註(一三)、二一〜二二頁。
- (47) 木下、前掲註(九)、二二九〜二三〇頁。
- (48) 清水恵美子著「岡倉寛三とインド 転回点としての渡印」(『茨城大学人文科学研究』第三号、二〇一一年、一四〜一五頁)。
- (49) Kazuo Okakura. *The Ideals of the East*, USA: Stone Bridge Press, 2007
- (50) 木下、前掲註(九)、一三七頁。
- (51) 宮川、前掲註(二一)、一八九頁。
- (52) 岡倉一雄、前掲註(二〇)、一六七頁。
- (53) 同右、一六七〜一六八頁。
- (54) 岡倉登志、前掲註(六)、二〇八頁。
- (55) 岡倉一雄著『岡倉天心をめぐる人々』(『父天心を繞る人々』文川堂、一九四三年を復刻) 中央公論美術出版、一九九八年、一六九頁。
- (56) 岡倉登志、前掲註(六)、二〇八頁。
- (57) 岡倉一雄、前掲註(二〇)、一六七頁。
- (58) ソーントン不破直子著「岡倉天心小伝」(岡倉天心著、ソーントン不破直子訳『茶の本』春風社、二〇〇九年、一七二頁)。及び、金子、前掲註(三)、一六三頁。
- (59) 清水重敦著『建築保存概念の生成史』中央公論美術出版、二〇一三年、一四二頁。
- (60) 森田、前掲註(一三)、一三頁。
- (61) 吉田千鶴子著「岡倉天心と久保田鼎 久保田家資料を中心に」(『五浦論叢』第十号、二〇〇三年、一二五〜一二六頁) 及び、木下、前掲註(九)、一八一〜一八二頁。
- (62) 堀岡、前掲註(二)、一二二頁。
- (63) 岡倉一雄、前掲註(二〇)、一六七頁。
- (64) 下村英時編『天心とその書簡』日研出版、一九六四年、一二二頁。
- (65) 稲賀繁美著「ベンガル知識人たちの交流」(『別冊太陽 岡倉天心 近代美術の師』平凡社、二〇一三年、二九頁)。
- (66) 堀岡弥寿子著『岡倉天心 アジア文化宣揚の先駆者』吉川弘文館、一九七四年、一五八〜一六〇頁。

- (67) 前掲註(六四)、一一二頁。
- (68) 森本達雄著「タゴールと岡倉天心」(『タゴール著作集 別巻』第三文明社、一九九三年、一八九〜一九〇頁)。
- (69) 堀岡、前掲註(六六)、一四九〜一五〇頁。
- (70) 同右、一六二頁。
- (71) スワームイー・メータサーナンダ著『インドと日本の関係交流の先駆者 スワームイー・ヴィヴェカーナンダと岡倉天心』日本ヴェーダーンタ協会、二〇一四年、一八〜一九頁。
- (72) 堀岡、前掲註(六六)、一六三頁。
- (73) 同右、一五九頁、一六七頁。
- (74) 森本、前掲註(六八)、一九三〜一九四頁。
- (75) ロマン・ロラン著、宮本正清、波多野茂弥ら訳『ロマン・ロラン全集 第三一巻 日記Ⅵ』一九八二年、みすず書房、一四八〜一四九頁。
- (76) 堀岡、前掲註(六六)、一五九頁〜一六〇頁。
- (77) 前掲『岡倉天心全集』第六巻、一五一頁。
- (78) 堀岡、前掲註(二)、一〇四〜一〇〇頁。
- (79) 岡本佳子著「ラビンドラナート・タゴールと岡倉覚三(天心) ナシヨナリズムをめぐる」(『アジア文化研究』別冊十七号、二〇〇八年、五一頁)。
- (80) 堀岡、前掲註(二)、五四〜五六頁。
- (81) 堀岡、木下がそれぞれ、原稿ノートを添削している筆跡とニヴェディタの筆跡を比較し、彼女の筆跡であることを確認している。また、木下に拠れば、天心のものでもニヴェディタのものでもない筆蹟の部分もあることから、誰かが天心の言葉を口述筆記した時もあったようである。(堀岡、前掲註(六六)、一七三頁。木下、前掲註(九)、二四七頁。)
- (82) 堀岡、前掲註(二)、一一四頁。
- (83) 丹羽京子著「タゴールと日本」(『タゴール著作集 別巻』第三文明社、一九九三年、三六一頁)。
- (84) 森本、前掲註(六八)、二〇〇頁。及び、我妻和男著「タゴール総年譜」(『タゴール著作集 別巻』第三文明社、一九九三年、八〇三〜八〇四頁)。
- (85) ラビンドラナート・タゴール講演、高良とみ訳「東洋文化と日本の使命」(『タゴール著作集 第八巻』第三文明社、一九八一年、四八九〜四九一頁)。
- (86) 丹羽、前掲註(八三)、三六一頁。
- (87) 岡本、前掲註(七九)、四九頁。
- (88) 同右、五一頁。
- (89) 岡倉古志郎著『祖父 岡倉天心』中央公論美術出版、一九九九年、一一〇〜一一一頁。
- (90) 堀岡、前掲註(六六)、一七〇頁。
- (91) スレンドラナート・タゴール著、山口静一訳「岡倉覚三 ある回想」(『The Visva-Bharati Quarterly, Vol. II, Part II, Aug. 1936』初出) (橋川文三編『岡倉天心 人と思想』平凡社、一九八二年、三一〜三三頁)。
- (92) 堀岡、前掲註(二)、七五頁。
- (93) 同右、一一五頁。
- (94) 木下、前掲註(九)、二五九〜二六一頁。
- (95) 金子、前掲註(三)、二三八頁。

- (96) 堀岡、前掲註(六六)、一八九頁。
- (97) 堀岡、前掲註(二)、一二八頁。
- (98) 岡倉天心著、夏野広訳『英文収録 日本の覚醒』講談社、二〇一四年。
- (99) 金子、前掲註(三)、二五三～二五四頁。
- (100) 岡倉一雄、前掲註(二〇)、一九九頁。
- (101) 木下、前掲註(九)、二六三頁。
- (102) 堀岡、前掲註(二)、一二八頁。
- (103) 前掲註(九一)、三五～三六頁。
- (104) 堀岡、前掲註(二)、九九頁。
- (105) 同右、八一頁。
- (106) 同右。
- (107) Surendranath Tagore, "Kakuzo Okakura", in *The Visva-Bharati Quarterly*, Vol. XXV, No.3 and 4<sup>th</sup> Aug. 1960, p.54 (*The Visva-Bharati Quarterly*, Vol. II, Part II, Aug. 1936 に初出のもの)を再版)
- (108) 金子、前掲註(三)、二五四頁。
- (109) 前掲『岡倉天心全集』第六卷、二六～二七頁。
- (110) 前掲註(六四)、一二六頁。
- (111) 前掲『岡倉天心全集』第六卷、一六六～一六七頁。
- (112) 木下、前掲註(九)、二六四～二六五頁。
- (113) 前掲『岡倉天心全集』第六卷、一六三頁。
- (114) 木下、前掲註(九)、二六五頁。
- (115) 岡倉一雄、前掲註(二〇)、二〇五頁。
- (116) 岡倉登志著『世界史の中の日本 岡倉天心とその時代』明石書店、二〇〇六年、二〇二～二〇四頁。
- (117) 岡本佳子著『日露戦争期英米ジャーナリズムに見る岡倉覚三一行『日本美術院欧米展新聞記事切抜帖』について』(『アジア文化研究』三一号、二〇〇五年三月、八二～八三頁)。
- (118) 前掲『岡倉天心全集』第六卷、一六三頁。
- (119) 岡本、前掲註(一一七)、八二頁。
- (120) 岡本佳子著『岡倉覚三と日露戦争 文化の政治的問題の場』(『LOTUS』一六号、二〇〇六年三月、一六～一七頁)。
- (121) 岡本、前掲註(一一七)、八三～八四頁、及び、岡本、前掲註(一一〇)、一八～二二頁。
- (122) 塩崎智『日露戦争 もう一つの戦い アメリカ世論を動かした五人の英語名人』祥伝社、二〇〇六年、五六～五八頁。
- (123) 竹内、前掲註(五)、二九三頁。
- (124) 『国華』『国華』第一号、国華社、一八八九年、一～四頁。
- (125) 前掲『岡倉天心全集』第六卷、一六九頁。
- (126) 横山大観、六角紫水、斎藤隆三、織田正信、岡倉古志郎、橋本政徳『第二回『岡倉天心先生を語る』座談会』一九四三年十月十三日、『五浦論叢』第七号、二〇〇〇年、三一頁)。
- (127) 岡本、前掲註(一一七)、八二頁。
- (128) 前掲註(一二六)、三五五頁。
- (129) 塩崎智著『日本の覚醒』をめぐる金子堅太郎と岡倉天心』(『日本大学精神文化研究所紀要』第三四集、二〇〇三年三月、三～四頁)。
- (130) 塩崎、前掲註(一二二)、八二～九〇頁。
- (131) 岡本、前掲註(一一七)、八四～八五頁。

- (132) 前掲『岡倉天心全集』第六卷、一七六頁。
- (133) 前掲『岡倉天心全集』第六卷、一七五頁。
- (134) 堀岡、前掲註(二)、二二八頁。
- (135) 塩崎、前掲註(一二二)、一六〇―一七頁。
- (136) 『対訳ニッポン双書 茶の本 The Book of Tea』IBCパブリッシング、二〇〇八年。
- (137) 堀岡、前掲註(一)、九六頁。
- この点に関して、平凡社版の岡倉天心全集やソーントン不破直子の研究を含む多くの『茶の本』に関する本が、出版社としてフォックス・ダフィールド社しか挙げていないが、インターネット・アーカイブを見ると、カリフォルニア大学図書館所蔵で、著作権はフォックス・ダフィールド社所有と記載されているが、G. P. パットナムズ・サンズ社が出版している一九〇六年版の『茶の本』を確認出来る。(Kakuzo Okakura, *The book of tea*, London, New York: G. P. Putnam's sons, 1906)  
(<https://archive.org/details/bookoftea00okakrich>) (最終閲覧日:二〇一七年九月二二日)
- (138) 岡本佳子著「ベンガルの民族主義と天心岡倉覚三」(岡倉登志 岡本佳子、宮瀧交二著『岡倉天心 思想と行動』吉川弘文館、二〇一三年、一三五頁)。
- 尚、ここで岡本は『武士道』の初版を一九九九年としているが、草原克豪に拠れば、「著者の序文は一九九九年十二月に書かれているが、出版されたのは一九〇〇年である」。(草原克豪著『新渡戸稲造 一八六二―一九三三』藤原書店、二〇一二年、一七四頁)。
- (139) 堀岡、前掲註(二)、一三七頁。
- (140) 木下、前掲註(九)、二八〇―二八一頁。
- (141) 前掲『岡倉天心全集』第六卷、四四八頁。
- (142) 前掲『岡倉天心全集』第六卷、一六八頁。
- (143) 前掲『岡倉天心全集』第六卷、一七三頁。
- (144) 前掲『岡倉天心全集』第六卷、一八〇頁。
- (145) 前掲『岡倉天心全集』第六卷、一八三頁。
- (146) ソーントン不破直子著「岡倉天心の『茶の本』と当時のアメリカ文壇」(『比較文学』第二五卷、一九八二年、四〇―四二頁)。
- (147) 堀岡、前掲註(二)、一九七頁。及び、木下長宏著「解題」(『岡倉天心全集』第一卷、平凡社、一九八〇年、四九四―五〇四頁)。
- (148) 「岡倉天心略年譜」(森田義之、小泉晋弥編『岡倉天心と五浦』中央公論美術出版、一九九八年、三四三頁)。
- (149) 堀岡、前掲註(二)、一一一頁―一五一頁。
- (150) *The Times Literary Supplement*, Friday, February 13, 1903, London, p.51
- (151) *Ibid.*, March 6, 1903, pp.73-74
- (152) *Ibid.*, February 10, 1905, p.52
- (153) *Ibid.*, December 29, 1905, p.472
- (154) 色川大吉著「解説」(前掲註(九八)、一一九頁)。
- (155) 宮川、前掲註(二二)、二〇〇頁。
- (156) *The Times Literary Supplement*, Friday, June 3, 1904, London, pp.174-175
- (157) *Ibid.*, August 19, 1904, p.260 and September 2, 1904, p.272

- (158) *Ibid.*, December 30, 1904, p.426
- (159) *Ibid.*, August 19, 1904, p.260
- (160) *Ibid.*, September 2, 1904, pp.266-267
- (161) *Ibid.*, December 30, 1904, p.425 and p.428
- (162) *Ibid.*, September 9, 1904, p.275
- (163) *Ibid.*, January 20, 1905, p.24
- (164) *Ibid.*, February 3, 1905, pp.36-37
- (165) *Ibid.*, December 29, 1905, p.470
- (166) *Ibid.*, March 17, 1905, p.92 and December 29, 1905, p.472
- (167) 清水恵美子に抛れば、天心も由三郎の *The Japanese Spirit* を「大和心」もしくは「やまひ心」と訳してゐたものなの、このでの邦題はそれに倣つた。(清水恵美子著「岡倉覚三の英文著作——明治維新観を中心として」『五浦論叢』第二一号、二〇一四年、五頁、一四頁。)
- (168) *The Times Literary Supplement*, Friday, April 21, 1905, p.128
- (169) *Ibid.*, April 21, 1905, p.132
- (170) *Ibid.*, December 29, 1905, p.472
- (171) *Ibid.*, June 2, 1905, p.180
- (172) *Ibid.*, June 9, 1905, p.183
- (173) *Ibid.*, December 29, 1905, p.470
- (174) *Ibid.*, June 30, 1905, p.212 and December 29, 1905, p.470
- (175) *Ibid.*, October 6, 1905, pp.321-322 and p.332
- (176) *Ibid.*, December 29, 1905, p.470 and p.472
- (177) *Ibid.*, October 27, 1905, pp.353-354, and p.363
- (178) *Ibid.*, December 29, 1905, p.470
- (179) 前掲『岡倉天心全集』第六巻、一六九頁。
- (180) 「刊行者の序文」(岡倉天心著、橋川文三訳「日本の覚醒」『岡倉天心全集』第一巻、平凡社、一九八〇年、一七五〜一七六頁)。
- (181) 同右、一七六頁。
- (182) *The Times Literary Supplement*, Friday, August 24, 1906, London, p.289
- (183) *Ibid.*, December 14, 1906, p.415
- (184) *Ibid.*, February 3, 1905, p.36, April 21, 1905, p.128, and October 6, 1905, p.321
- (185) ション・フェザー著、箕輪成男訳、『イギリス出版史』玉川大出版部、一九九一年、二一五頁、二一七頁。
- (186) 同右、三二三〜三二四頁
- (187) ソーントン不破直子の論文(「前掲註(一四六)」、四五〜四六頁。
- (188) 堀岡、前掲註(二)、『一一五〜一二八頁。
- (189) 同右、一四五〜一四六頁。
- (190) 同右、一二九〜一三六頁。
- (191) 堀岡は「ザ・アカデミー・オブ・リテラチュア (*The Academy of Literature*, London, February, 25, 1905)」と記しているが、ソーントン不破直子の論文(「岡倉天心『日本の目覚め』の英米における受容」『比較文学』第二六巻、一九八三年、三七頁)からすると、正しくは「ザ・アカデミー・アンド・リテラチュア (*The Academy and Literature*, London, Feb. 25, 1905)」だと思われる。本論文ではこちらに統一した。
- (192) 塩崎、前掲註(二二九)、九〜一〇頁。塩崎は手紙の英語原文も載せているが、同氏の邦訳の方を引用した。

- (193) 堀岡、前掲註(二)、一三八〜一四四頁。
- (194) 塩崎、前掲註(一二二)、六五〜六六頁。
- (195) ザ・アリーナの邦訳の一部抜粋を載せるに際し、堀岡はザ・アリーナの発行をカナダとしているが(堀岡、前掲註(二)、一三一頁)、これは本来アメリカのニュージャージー州トレントン(Trenton)であるところをカナダのトロント(Toronto)と間違ったのだろうか。当時のザ・アリーナは現在インターネット・アーカイブでも参照出来るが、それによれば発行はニュージャージー州トレントン及びマサチューセッツ州ボストンである(*The Arena*, Vol.33, January to June, 1905, Trenton, N. J. and Boston, Mass.) (<https://archive.org/details/ArenaMagazineVolume33>) (最終閲覧日:二〇一七年九月七日)。ソーントン不破直子の論文などを見ても、ザ・アリーナの発行はニュージャージー州トレントンとなっている。(ソーントン不破直子著「岡倉天心『日本の目覚め』の英米における受容」『比較文学』第二六卷、一九八三年、三七頁) カナダ発行のものもあるのであれば、ひとえに筆者の調査不足である為、お許し願いたい。
- (196) 塩崎、前掲註(一二二)、七八頁、一二二頁。
- (197) 出口保夫著『イギリス文芸出版史』研究社、一九八六年、一八六頁。
- (198) ソーントン不破直子著「岡倉天心『日本の目覚め』の英米における受容」(『比較文学』第二六卷、一九八三年、三〇〜三五頁)。
- (199) 山崎新瑛著『日露戦争期の米国における広報活動 岡倉天心と金子堅太郎』(同志社大学大学院アメリカ研究科修士論文) 山崎書林、二〇〇一年、三三〜三四頁。
- (200) 堀岡、前掲註(二)、一四四頁。
- (201) 堀岡、前掲註(一)、七八頁。
- (202) 進藤栄一著「岡倉天心と東アジア共同体」(『環』三五号、藤原書店、二〇〇八年一〇月、一六六〜一六七頁)。
- (203) 手紙の全文は次の通りである。
- 拜啓 拙著泰東理想論翻訳の儀ニ就テハ 同書は十余年前  
印度旅行中勿々起草セシモノにて 十分校正ヲ経スして上木候モ  
ノニ有之(表題の小生姓名迄ニモ誤植有之候) 本意の箇所不少  
御座候ニ付 再版の際改訂致度考ニ候  
是迄他ニモ翻訳申込の向き有之候へ共 一切御断り候次第ニ有之  
候間 右御印行御見合ヒ下度 此度御原稿相添御回答迄 勿々  
五月十七日  
岡倉寛三
- 小池素康殿  
再伸
- 講義録御掲載の際ニは重ねて御交渉の儀御免しヒ下度候  
(前掲註(六四)、四五五〜四五六頁)。
- (204) 木下、前掲註(九)、二三八〜二四〇頁。
- (205) 同右、二三八頁。
- (206) 六角紫水著「岡倉天心先生の想出」(『美之國』第二二卷三号、美之國社、一九三六年、五〇頁)。
- (207) 木下、前掲註(九)、二四〇頁。
- (208) 前掲註(二〇六)、五〇頁。
- (209) 金子、前掲註(三)、四〇一〜四〇二頁。

- (210) 堀岡、前掲註(二)、一五四頁。
- (211) 金子、前掲註(三)、四〇二頁。
- (212) 同右、四五四頁。
- (213) 色川大吉著「東洋の告知者岡倉天心」(『日本の名著三九 岡倉天心』中央公論社、一九七〇年にて初出)(『色川大吉著作集 五人と思想』筑摩書房、一九九六年、三頁)。
- (214) 竹内、前掲註(五)、二八七〜二八八頁。
- (215) 浅野晃著『樗牛と天心』潮文閣、一九四三年、一五七頁、二八八頁。
- (216) 浅野晃著『岡倉天心』明徳出版、一九五八年、一四頁。  
引用部分は「岡倉天心と私」と題された節にあるのだが、その節とはほぼ同じ文章が、『剣と美―私の岡倉天心』(浅野晃著、日本教文社、一九七二年)に「『東洋の理想』と私」という題で収録されており、そちらでの引用箇所該当する部分では、『アジアのめざめ』でなく『東洋の覚醒』という邦題で記されている。  
ちなみに、聖文閣版『岡倉天心全集』(浅野晃・岡倉一雄著、第二卷、一九三九年)では、浅野訳で『東洋の覚醒』という邦題が書かれている。また、木下に拠れば、浅野が*The Awakening of the East*と題して一九四〇年に聖文閣から出した解説・注釈本が、今日まで『東洋の覚醒』の英語原文が活字化された唯一のものであるとのことである。(木下長宏著「解題」『岡倉天心全集』第一巻、平凡社、四八〇〜四八四頁。)
- (217) 木下、前掲註(九)、二四九頁、二六三頁。
- (218) 同右、二四七〜二四九頁。
- (219) 浅野、前掲註(二一五)、一八〇頁。
- (220) 岡倉古志郎、前掲註(八九)、一二二頁。
- (221) 浅野晃著『岡倉天心論攷』思潮社、一九三九年、三六五〜三六六頁(「跋」一〜二頁)。
- (222) 浅野晃著『岡倉天心論攷』永田書房、一九八九年、二六七頁。
- (223) 清見、前掲註(一九)、一六一頁。
- (224) 同右、二六〇頁。
- (225) 同右、一五七頁。
- (226) 岡倉一雄、前掲註(二〇)、一六九頁。
- (227) 清見、前掲註(一九)、一九三頁。
- (228) 同右、二〇六頁。
- (229) 同右、一六五頁。
- (230) 同右、「自序」三頁。
- (231) 同右、二六〇頁。
- (232) 岡倉一雄、前掲註(二〇)、一八五頁。
- (233) 堀岡、前掲註(二)、一一四頁。
- (234) 森田、前掲註(一三)、二四頁。
- (235) *The Times Literary Supplement*, Friday, February 10, 1905, London, p.52
- (236) 前掲『岡倉天心全集』別巻、四二四頁。
- (237) ソーントン不破直子、前掲註(一九八)、二九頁。
- (238) 松村正義著『ポーツマスへの道 黄禍論とヨーロッパの未松謙澄』原書房、一九八七年、三一六頁。
- (239) 浅野、前掲註(二二二)、九二頁。
- (240) 同右、一〇六頁。
- (241) 同右、一六八頁。

(242) 金子、前掲註(三)、『一三九—二四〇頁。』

(243) 英文は次の通りである。

MR. CHAIRMAN, LADEIS AND GENTLEMEN.—In thanking you for the honor you have conferred on me in inviting me to address you on the “Modern Problems in Painting,” I cannot but acknowledge that I approach you with great trepidation. It is barely a half-century ago that we children of Japan were admitted into the comity of nations at the gracious instance of your first Embassy under Commodore Perry. Since that time the name of America has been for us associated with the best of Western culture. We have been so accustomed to sit at your feet and listen while you discoursed that it seems strange, indeed, that one should ever stand and face your learned audience.

(Okakura Kakuzo, “Modern Problems in Painting”, in *Congress of Arts and Science*, Vol.3, 1906, Boston and New York, p.663)

(244) 平凡社版『岡倉天心全集』第二巻に収録されている「絵画における近代の問題」全文邦訳を基準に言うと、全五十一段落中、三十四段落目冒頭「近代精神は」から三十七段落目終わりまで、四十二段落目冒頭「戦争の」から四十三段落目終わりまで、四十八段落目「保守派の人々は」から五十段落目五文目の「無傷のまま残っているのです」まで、同段落七文目「現在進行中の戦争」から五十段落目終わりまでが、清見が『岡倉天心』内で紹

介している講演内容である。

(245) 同様に平凡社版『岡倉天心全集』第二巻基準で言うと、浅野が『岡倉天心論攷』内で引用しているのは、三十七段落目の冒頭から終わりまで(ただし七文目と八文目の内容が勝手に編集されている。清見「こんな状態の下にあつては、お座なりのお世辞でもいふか、どぎつい皮肉でも浴びせかけるかして、芸術はそつぽを向いてしまひます。何にしても真の芸術は泣くのです」↓浅野「このやうな状態の下では、真の芸術は泣くだらう」)、四十二段落目五文目の「西欧世界において真に誠実な芸術愛好家は」から、九文目の「至上命令のように思われます」まで、四八段落目三文目の「われわれは西洋の方式を」から四九段落目五文目の「無傷のまま残っています」まで(ただし四八段落目九文目、四九段落目二文目が欠落。いずれも清見の方は欠落せず載せている)、そして五十段落目七文目から段落終わりまでである。

(246) 浅野、前掲註(二二二)、『一七二頁。』

(247) 清見、前掲註(一九)、『一九〇頁。』

(248) 同右、『三三三頁。』

(249) 英文は次の通りである。

Perhaps it may have seemed to you that I have painted in too dark a color the modern problems of art. There is a brighter side of the question. Western society itself is awakening to a better understanding of the problem. The suspense of art-activities at the present moment has aroused the anxious inquiry of serious thinkers into the cause of the universal decadence. It is time, in-

deed, that we should begin to work for the true adjustment of society to art. I shall be only too grateful if my words have been of service in drawing your attention to the grave nature of the situation in the East. In the name of humanity, I call on the brotherhood of artists and art-lovers to a solution of these world-wide problems.

(Okakura Kakuzo, "Modern Problems in Painting", in *Congress of Arts and Science*, Vol.3, 1906, Boston and New York, pp.677-678)

(250) 木下長宏著「解題」『岡倉天心全集』第二巻、平凡社、一九八〇年、五〇三〜五〇四頁。

このでの木下の解説に拠れば、同じく一九二二年に出版された『天心先生欧文著書抄訳』に、その日本美術院版『天心全集』の英文に拠った福原麟太郎訳の『日本の見地より観たる現代美術』が収録されているとのことである。清見が載せている邦訳と福原麟太郎訳を見比べるとかなり文体が異なるので、少なくとも清見は『天心全集』の英文の方を参照して自分で邦訳したのだと思われる。

(251) 英文は次の通りである。

This essay is a confession—hence an appeal: an appeal, therefore a protest. And protests are apt to be wearisome. It concerns itself chiefly with the problem of modern art as seen from a Japanese point of view. The situation is not without humor, if we

consider that the present difficulties of Japanese painting are partly due to your Having introduced us to the lights and shadows of a modern national existence. It may be that retribution has overtaken you, in being asked to lend your ears to my incompetent presentation of the very problems of which you yourselves are the remote and innocent cause. I trust, however, that the Far Eastern point of view may not be altogether devoid of interest to you.

(*The International Quarterly*, Vol. XI, April and July, 1905, New York, pp.197-214)

(<https://babelhathitrust.org/cgi/pdf?id=hvd.32044092645340;view=tup;seq=9>) (最終閲覧日:二〇一七年一〇月二二日)

(252) 清見、前掲註(一九)、三二三頁。

(253) 出口、前掲註(一九七)、九八頁。

(254) 「Foreword」『天心全集』乙、日本美術院、一九二二年、二二頁。

(255) *The Quarterly Review*, Vol.203, July and October, 1905, London (<https://archive.org/details/quarterlyreview09murrgoog>) (最終閲覧日:二〇一七年一〇月二二日)

(256) 浅野、前掲註(二二二)、二〇〇頁。

(257) 塩崎智著「岡倉天心没後一〇〇年に思う」(『青淵』七七九号、二〇一四年二月、一九頁)。

(258) 塩崎、前掲註(二二九)、二二二三頁。

(259) 同右、二頁。

- (260) 塩田力蔵著「金子伯と岡倉天心」(塔影社編『国画』二巻八号、一九四二年、三四頁)。
- (261) 塩崎、前掲註(二二九)、四頁。
- (262) 同右、十一頁。
- (263) 同右、十一〜十四頁。
- (264) 清見、前掲註(一九)、一九五〜一九六頁。
- (265) 岡本、前掲註(一一七)、九〇頁の資料に基づく筆者の訳。
- (266) 岡本、前掲註(一一七)、八二頁、及び八八頁の註一八。
- (267) 保田與重郎著「明治の精神 二人の世界人」(『文芸』一九三七年二月一日にて初出)橋川文三編『岡倉天心 人と思想』平凡社、一九八二年、一四五頁)。
- (268) 浅野、前掲註(二二二)、三六七頁(「跋」三頁)。
- (269) 堀岡、前掲註(二)、七五頁。
- (270) 岡倉一雄、前掲註(二〇)、一七六頁。
- (271) 岡倉一雄、前掲註(二〇)、一六七頁。
- (272) 浅野晃著『日本精神史論攷』文明社、一九四一年、一六七〜一六九頁。
- (273) 同右、一七一〜一七三頁。
- (274) 岡倉天心著、桶谷秀昭訳「東洋の覚醒」『岡倉天心全集』第一巻、平凡社、一九八〇年、一四四頁。
- (275) 同右、一六〇〜一六一頁。
- (276) 岡本佳子著「近代アジアにおける自己認識の問題 岡倉覚三を中心に」(飛田良文、M.W.ステイルほか編『アジアにおける異文化交流』明治書院、二〇〇四年、二四〇〜二四二頁)。
- (277) 塩出浩之著『岡倉天心と大川周明「アジア」を考えた知識人

- たち』山川出版社、二〇一一年、三二頁。
- (278) 前掲註(二〇六)、五〇頁。
- (279) 前掲註(九二)、三五〜三六頁。
- (280) 木下、前掲註(九)、二四八〜二五五頁。
- (281) 金子、前掲註(三)、二二五〜二二七頁。
- (282) 横山大観著『大観自叙伝』中央美術社、一九二六年、三七頁。
- (283) 岡倉古志郎、前掲註(八九)、九八〜一二七頁。
- (284) 岡倉一雄、前掲註(二〇)、一八一頁。
- (285) 外川昌彦著「英領インドにおける岡倉天心のブツダガヤ訪問について スワームイー・ヴィヴェカーナンドとラビンドラナート・タゴールとの交流から」(『アジア・アフリカ言語文化研究』九二号、二〇一六年九月、一八六頁)。
- (286) スガタ・ボース記念講演原稿、緑川眞知子、福田武史ら訳「美とホスピタリティ インド・日本の生き生きとした交流の歴史」二〇一六年六月四日開催(『文学・語学』第二一八号、二〇一七年、一〇〜一一頁)。
- (287) 金子、前掲註(三)、二二一〜二二八頁。
- 金子は、天心が渡印前からアメリカでの就職を考えていた理由として、次のメモを挙げている。
- E・R(ロビンソン)「山越注：当時のポストン美術館長」は本日、岡倉氏と会見し、当美術館における日本絵画に関する彼の仕事について話し合った。(中略)彼はインド滞在中、ビッグロウ博士に対して、当美術館のコレクションの作業に従事するためアメリカに渡りたいと考えており、その場合には二千ドルが報酬とし

て適当な額と考えられる旨書き送ったと述べた。(後略)

(石橋智恵訳「岡倉氏との会見」“Memorandum. April 11, 1904”  
『岡倉天心全集』第二卷、平凡社、一九八〇年、二二三～二二四  
頁。)

(288) 前掲註(九一)、三二頁。

(289) 清見陸郎著『先覚者岡倉天心』アトリエ社、一九四二年、一〇  
八頁。

(290) 浅野、前掲註(二七二)、一六七～一六八頁。

浅野は、該当のページで

第二章「日本の原始芸術」、第三章「儒教——北方支那」、第四章  
「老荘と道教——南方支那」および第六章「飛鳥時代」以下第十  
四章「明治時代」までの諸章は、恐らく、彼(山越注…スレンド  
ラナート)の言ふやうに、日本に於いての述作であるかも知れな  
い。しかし、第五章「仏教と印度芸術」のところは、少くとも印  
度に於いて大いに加筆訂正されたものではないだらうか。そして、  
第一章「理想の領域」と、最後の第十六章「通景」とは、大体に  
於いて印度に於いて書かれたものと、私は考へたい。

と書いているのだが、『東洋の理想』は、ニヴェイタの序文を  
除くと、十五章構成であり、十六章はない。各章の英題と浅野の  
邦訳題を照らし合わせた結果、この「第十六章」は誤字であると  
思われた為、本論では「一五章」と書き換えた。尚、傍点は筆者  
がつけたものである。

(291) 堀岡、前掲註(一)、七〇頁。

(292) 金子、前掲註(三)、二二七～二二八頁。

(293) 浅野、前掲註(二七二)、一七〇頁。

(294) 外川、前掲註(二八五)、一九〇～一九二頁。

(295) 浅野晃著『米英思想批判』旺文社、一九四三年、二一九～二二  
〇頁。

(296) 前掲「東洋の覚醒」『岡倉天心全集』第一卷、一三八～一三九  
頁。

(297) 前掲註(九八)、一八三頁の英文に基づく筆者の訳。

(298) 同右、一八〇頁に基づく筆者の訳。

(299) 同右、一七六頁に基づく筆者の訳。

(300) 塩崎、前掲註(一二九)、五～八頁。

(301) 川寫一穂著「天心岡倉覚三の思想形成 福井人としての岡倉と  
橋本左内」(LOTUS) 第二三三号、二〇〇三年三月、一三頁。

(302) 前掲「東洋の覚醒」『岡倉天心全集』第一卷、一六六頁。

(303) 前掲『岡倉天心全集』第六卷、一四八頁。

(304) 木下、前掲註(九)、二二三頁。

(305) 岡倉登志著「岡倉覚三(天心)と英文学」『大東文化大学 英  
米文学論叢』第三六号、大東文化大学英文学会、二〇〇五年、九  
九～一〇三頁。

(306) 前掲「東洋の覚醒」『岡倉天心全集』第一卷、一六五頁。

(307) 同右、一六六頁。

(308) 同右。

(309) 同右、一六〇頁。

(310) 同右、一六五頁。

(311) 同右、一三六頁。

- (312) 前掲註(九八)、二二六〜二二七頁に基づく筆者の訳。
- (313) 前掲註(一三六)、二二頁に基づく筆者の訳。
- (314) 進藤、前掲註(二〇二)、一六七頁。
- (315) 橋川文三著『日本浪漫派批判序説』未来社、一九六〇年、七〜八頁。
- (316) 竹内、前掲註(五)、二九二頁。
- (317) 宮川、前掲註(二二)、五〜六頁。
- (318) 同右、一八三頁。
- (319) 同右、一九四頁。
- (320) 同右、二〇一〜二〇二頁。
- (321) 橋川文三著「あとがき」(橋川文三編『岡倉天心 人と思想』平凡社、一九八二年、二六五頁)。
- (322) 竹内、前掲註(五)、二九〇〜二九一、二九七〜二九九頁。
- (323) 橋川文三著「岡倉天心の面影」(日本政治学会編『近代日本の国家像』岩波書店、一九八三年にて初出)(橋川文三著作集』第三卷、筑摩書房、一九八五年、一六七〜一七五頁)。
- (324) 色川、前掲註(二二三)、三〜五九頁。
- 色川は、これを書いたのは平凡社版の『岡倉天心全集』も堀岡の著書も出ていなかった頃であることに留意する必要があると、自身で述べている。「著者による解題・解説」同著四七六〜四七七頁)
- (325) 進藤、前掲註(二〇二)、一六八頁。
- (326) 丸山正男著「諭吉・天心・鑑三」(『現代日本文学全集』五一、「福沢諭吉・内村鑑三・岡倉天心集」解説、筑摩書房、一九五八年にて初出)(橋川文三編『岡倉天心 人と思想』平凡社、一九

- 八二年、一六一、一七〇〜一七五頁)。
- (327) 進藤、前掲註(二〇二)、一六九頁。
- (328) 孫歌著「岡倉天心を媒介にして」(『環』三五号、藤原書店、二〇〇八年一月、一七八〜一八八頁)。
- (329) 徐興慶著『東アジアの覚醒 近代日中知識人の自我認識』研文出版、二〇一四年、一七六〜一九五頁。
- (330) 小熊英二著「虚妄の『アジア』 岡倉天心における『アジア』像の変遷」(『立命館言語文化研究』八卷三号、一九九七年にて初出)(『アウトテイクス 小熊英二論文集』慶應義塾大学出版会、二〇一五年、二七〜二九頁)。
- (331) 塩崎智著「日露戦争と明治人の米国内広報外交」(『青淵』六九一号、二〇〇六年、一四〜一七頁)。
- (332) 岡倉古志郎、前掲註(八九)、三〜五頁。
- (333) 橋川、前掲註(三一五)、九三〜一〇〇頁。
- (334) 英文は次の通りである。
- First, over all was the Mikado. That sacred conception is the thought-inheritance of Japan from her very beginning. Mythology has consecrated it, history has endeared it, and poetry has idealized it. Buddhism has enriched it with that reverence which India pays to the "Protector of the Law," and Confucianism has confirmed it with the loyalty which China offers to the "Son of Heaven." The Mikado may cease to govern, but he always reigns. He exists not by divine right, but by divine law' — a fact of man and nature. He is always there, like our beloved mountain of Fuji.

which stands eternally in silent beauty, or like the glorious sea  
which forever washes our shore.

- (前掲註(九八)、二二三頁。)  
(335) 前掲「東洋の覚醒」『岡倉天心全集 第一巻』一四九〜一五〇頁。

(336) 竹内、前掲註(五)、二八八頁。

(337) 孫、前掲註(三二八)、一八二頁。

(338) 同右、一七九〜一八〇頁。

(339) 前掲註(九八)、一五二頁に基づく筆者の訳。

(340) 色川、前掲註(二二三)、二七頁。

(341) 前掲註(一三六)、二二頁。

(342) 同右、一六三頁に基づく筆者の訳。

(343) 同右、一七三頁に基づく筆者の訳。

(344) 金子、前掲註(三)、四五四頁。

(345) 同右、四五五頁。

(346) 保田與重郎著『保田與重郎全集』第五巻、講談社、一九八六年、三九九頁(『新日本』小山書店、一九三八年二月号にて初出)

(347) 金子、前掲註(三)、四五五〜四五七頁。

(348) 前掲註(三四六)、三九七〜三九八頁。

(349) 橋川、前掲註(三二五)、八七頁。

(350) 橋川、前掲註(三二五)、八八頁。

(351) 橋川、前掲註(三二五)、九三頁。

(352) 橋川、前掲註(三二五)、九九〜一〇〇頁。

(353) 木下、前掲註(九)、二八六〜二八九頁。

(354) 岡倉天心著、齋藤美洲訳「日本の目覺め」『明治文学全集三八

岡倉天心集』筑摩書房、一九六八年、九八頁。

(355) 前掲註(九八)、一九三〜一九四頁。

(356) 問題の一節は、平凡社版の岡倉天心全集における橋川による邦訳では、次のようになっている。

十九世紀の初めに体系化された神道は、祖先崇拜の宗教——つまり神々の時代から伝えられた原始の純粹崇拜となっていたのである。それは日本人種に祖先の理想、單純と正直、ミカドの人格にあらわれた祖先以来の支配への服従、いかなる外人征服者もその足をとどめたことのない、聖別され神聖な岸辺をもつ祖宗の土地への献身を教えるものであった。

(岡倉天心著、橋川文三訳「日本の覚醒」『岡倉天心全集』第一巻、平凡社、一九八〇年、二〇七頁)

また、講談社学術文庫で出されている夏野広氏の邦訳では、次のようになっている。

十九世紀はじめに体系化された神道は、神代からつたわった原始の純粹性を尊ぶ、祖先崇拜の宗教である。それは、日本民族の古来の理想である、簡素誠実の精神をまもることを教え、天皇の統治にしたがい、いまだかつて外敵に侵されたことのない、神聖な、神国日本のため献身することを教える。

(前掲註(九八)、五〇頁)

(357) 木下、前掲註(九)、二四二〜二四三頁。

(358) 新渡戸稲造著、樋口謙一郎、国分舞訳「対訳ニッポン双書 武

士道 BUSHIDO : The Soul of Japan』IBC パブリッシング、二〇〇八年、四三頁。

(359) 木下、前掲註(九)、二四二～二四三頁。

以下は、天心が書いたとされる『国華』第一号における『国華』発刊ノ辞」と、九鬼が書いた「国華ノ発兌ニ就イテ」から、それぞれ注目すべきと思われる点を抜粋したものである。原文には句読点がなく、また段落の冒頭も一段下げられていない為、筆者が適宜補った。また、特に重要であると思われる部分について、傍線を引いた。

## 国華

夫レ美術ハ国ノ精華ナリ。国民ノ尊敬、欽慕、愛重、企望スル所ノ意象、觀念、渾化凝結シテ形相ヲ成シタルモノナリ。故ニ其氣骨、品格ヲ觀テ以テ文化ノ程度ヲ判断スヘク其神韻趣味ニ由テ以テ国民ノ風采ヲト知スヘシ。(中略)近世ニ至ルマテ墨林ノ百花錦ノ如シ。梅花ノ清瘦、牡丹ノ富麗燦爛、相映發シテ、而シテ千年ノ史乘ヲ芳艷ナラシメタリ。是レ実ニ歷朝仁聖洪恩ノ余沢ニシテ、而シテ我カ先民ノ精ヲ抽キ華ヲ萃メタルモノナリ。(中略)今ヤ明治ノ昭代ニシテ千歳一遇ノ佳期ナリ。此期ニ乘シ遍ク標範ヲ古今ニ取り、広く智識ヲ東西ニ求メ、上ハ以テ中興ノ懿業ヲ頌讚シ、下ハ以テ高雅優美ノ風尚ヲ誘掖シ、工業經濟ノ道ヲ開致セシムルハアルヘカラス。茲ニ国華ヲ發行シ、聊カ美術ニ関スル奨励、保存、監督、教育等ニ就テ意見ヲ吐露シ、繪畫、彫刻、建築及諸般ノ美術、工芸ニ就テ保持開達ノ方針ヲ指示シ、国民ト共ニ邦國ノ精華ヲ發揮セント欲スルナリ。(第二段落省略)

(第三段落前略) 抑本邦繪畫ノ題旨ニシテ發達ノ遲鈍ナリシモノヲ拳クレハ、歴史画ハ其一ナリ。蓋シ其原因ヲ釋スルニ、一ハ封建制成テ群雄割拠シ國家的觀念ヲ喚起スルノ地ナク、一ハ環海孤島外交ノ刺激ヲ受クルコト少ナキカ為メニ、国体ノ思想煥發セス、其他文学独リ上流ニ行ハレテ教育普及セス、仏教三界ノ流轉ヲ説テ仮影幻像ノ内ニ住シタルカ如キハ、皆其進歩ヲ阻碍シタルモノナリ。(中略) 惟フニ国体ノ觀念ハ未タ嘗テ今日ノ如ク鞏固ナルコトアルコトナシ。而シテ我カ先民ノ忠誠ヲ 皇室ニ尽シ身命ヲ国家ニ致シタル英雄、豪傑、志士、仁人ノ事蹟ハ、国民一般ノ志望ヲ繫ク所ニシテ、彼神風海ヲ翻シ胡元ヲ南洋ニ殲シタル画図ノ如キハ、三軍ノ英氣ヲ鼓舞シ、億兆ノ愛国心ヲ振作スル所以ニ非サルナシ。繪畫ノ將來ヲ思フニ、仏像ハ壯麗ノ旧ニ復スル能ハサルヘシト雖モ、歴史画ハ国体思想ノ發達ニ随テ益振興スヘキモノナリ。(中略) 而シテ解剖骨格ハ普通ノ定型遠近高低ハ自然ノ大理ナリ。之ヲ応用スルモ決シテ日本繪畫ノ特質ヲ害スルノ理ナシ。何ソ必スシモ故人ノ軌轍ヲ踏ミ、死法ヲ因襲シテ、以テ純正ノ国家精華ヲ保ツトセンヤ。明治ノ画家ハ奮勵揮擢我邦ノ特質ニ基キテ進歩スルニ躊躇スルヘカラサルナリ。

(第四段落前略) 密ニ聞ク 宮城正門ノ外ニ本邦中世以来歴史上ニ著大ノ關係ヲ有スル名臣ノ銅像、若クハ国体ヲ代表スヘキ想像的人物ノ銅像ヲ装置セラレントス。(後略)

(第五段落省略)

(第六段落省略)

眼ヲ転シテ美術の学業ノ景象ヲ觀察セヨ。東洋美術史ハ猶ホ未タ精確ナラス。誰カ能ク史筆ヲ執テ本邦ノ上古韓漢及中亞細亞諸邦

ト交通来往シテ得タル所ノ美術的性質ノ包含ヲ分析シ、其来歴沿革ヲ詳叙スルモノソ。(後略)

(第八段落前略) 将来ノ美術ハ国民ノ美術ナリ。国華ハ国民ヲシテ自国ノ美術ヲ守護スルノ必要ヲ唱道シテ止マサラントス。(後略)

〔国華〕『国華』第一号、国華社、一八八九年、一〇四頁)

国華ノ発兌ニ就テ 九鬼隆一

巧妙ノ素質ハ往人種ノ血性ニ出ツルモノアリテ、他人ノ求メテ得ヘク強テ能クスヘカラサル所多シ。我日本人種ハ古来巧妙ノ天性アリ、万象ヲ転化シテ絵画彫刻中ノ別天地ニ住セシメ、異邦ノ文芸ヲ利用シテ更ニ自己ノ様式ヲ開キ、変幻自在ニシテ本体ノ趣致ヲ失ハス、蓋シ風土ノ和順ナル山水ノ秀靈ナル其氣ノ磅礴スル所發シテ、以テ人士優雅ノ思藻トナリ秀麗ノ才芸トナルモノニシテ、代代ノ名工鉅匠ノ製作毎ニ其ノ社会ノ氣運ニ伴ヒテ各其超凡異常ノ特能アルヲ觀ルヘキナリ。況ヤ歴世二千年皇恩ノ優渥ナル悠遠ニ文芸ヲ奨励シ、長久持續シテ間斷ナク高尚優美ノ域ニ進マシメタルニ至リテハ、我万世一系ノ国体ニ伴隨シテ実ニ万邦其比ヲ見サルナリ。(中略) 天下ノ工手ハ其業ヲ廢スルニ非スンハ、則チ已ムヲ得スシテ外国ノ需要ヲ空望シ、其心ニ反戾スル奇怪醜惡ノ物品ヲ作ラサルヘカラス。豈千歳ノ遺憾ラスヤ、豈聖世ノ欠典ナラスヤ。(後略)

(九鬼隆一「国華発兌ニ就テ」『国華』第一号、国華社、一八八九年、四〇五頁)

(360) 岡倉天心著「『国華』発刊ノ辞」『岡倉天心全集 第三卷』平凡社、一九七九年、四二〇四八頁。

(361) 木下、前掲註(九)、九六〇九七七頁。

木下は、九鬼が「『歴世』と書いて、以下を空白にし改行して「皇恩ノ優渥ナル」と続け」ているというのだが、この『国華』第一号における九鬼と天心の文章を実際に見ると、天心が「皇室」と「宮城」に対し闕字を行っているのは確認出来たが、九鬼の「歴世二千年皇恩ノ優渥ナル」の部分においては、闕字・平出・台頭のいずれも確認出来なかつた。史料の相違の原因が不明である為、文章上の作法的な問題を論ずるのは、本論文では保留としたいと思う。

(362) 福田久道訳「日本の覺醒」岡倉一雄著『岡倉天心全集 第三卷』聖文閣、一九三九年、五〇〇五五一頁。

(363) 長谷川如是閑著「ある心の自叙伝」(『朝日評論』朝日新聞社、一九四八年四月号〜一九四九年九月号まで十八回に渡り連載)『世界教養全集』二十八卷、平凡社、一九六三年、三〇八頁)。

(364) 中野目徹著『明治の青年とナシヨナリズム』政教社・日本新聞社の群像』吉川弘文館、二〇一四年、四二〇四五頁。

(365) 三宅雪嶺著「余輩国粹主義を唱道する 豈に偶然ならんや」(『日本人』第二十五号、政教社、一八八九年五月一日)、『日本の名著 三七 陸羯南・三宅雪嶺』中央公論社、一九七一年、四四六〜四四八頁)。

(366) 中野目徹著『書生と官員』汲古書院、二〇〇二年、一〇〇〜一〇一頁。

(367) 小畑嘉丈著「三宅雪嶺の『未来性』——『国粹』の不使用を手が

かりとして」(『東京電機大学総合文化研究』第八号、二〇一〇年、一三八～一三九頁)。

二〇一六年、一三五頁。

(368) 中野目、前掲註(三六六)、一〇九頁。

(388) 宮川寅雄著「岡倉覚三と高橋健三」『国華』八三五号、国華社、一九六一年一〇月、四三七頁。

(369) 中野目、前掲註(三六四)、四五頁。

(389) 宮川、前掲註(三八八)、四三六頁。

(370) 中野目、前掲註(三六六)、一〇九～一一〇頁。

(390) 岡倉一雄、前掲註(二〇)、六一～六二頁。

(371) 前掲『岡倉天心全集』第六卷、七五～七七頁。

(391) 内藤虎次郎著「高橋健三君伝」(川那辺貞太郎編『自恃言行録』川那辺貞太郎、一八九九年、五八頁)。

(372) 同右、一〇五頁。

(392) 「目録」川那辺貞太郎編『自恃言行録』川那辺貞太郎、一八九九年、一～五頁。

(373) 同右、一一六～一一七頁。

尚、読点は原文にはなく、筆者が適宜補ったものである。

(374) 同右、五六頁、四一五頁。

(393) 宮川、前掲註(三八八)、四三八頁。

(375) 『岡倉天心全集』第三卷、平凡社、一九七九年、四六九頁。

(394) 中川、前掲註(三八七)、一三四～一三五頁。

(376) 同右、四七〇頁。

(395) 中川、前掲註(三八七)、一六二～一六三頁。

(377) 同右、五九～六三頁。

(396) 「東亜同盟の準備」は以下の通り。

(378) 岡倉古志郎、河北倫明、木下順二、橋川文三対談「渾沌の詩精神 岡倉天心とその時代」(岡倉古志郎、前掲註(八九)、二二九～二三〇頁)。(『月刊百科』六、一八九号、一九七八年にて初出)。

出)。

(379) 前掲『岡倉天心全集』第三卷、四七一頁。

既に今日の立国論の時期たるを論じ、而して立国の実を挙ぐるは東亜の同盟を必要とし其諸国をして斯邦と共に独立の実を成さしめざるべからざるに論及したり、所謂東亜同盟先づ指を

(380) 同右、九四～九六頁。

我と支那朝鮮に届す、此三国や文字相通じ、史蹟相関し、人種

(381) 同右、四七一頁。

相類し、其欧米に對する形勢の利害、亦輔車唇齒、脈絡の絶つ

(382) 同右、四八〇頁。

べからざるあり、条理を以て之を論ずるに、宜しく其従約夙に

(383) 同右、四七二頁。

成りて卒然の首尾相応するが若くならざるべからざるなり、而

(384) 『岡倉天心全集』第七卷、平凡社、一九八一年、四八〇頁。

るに其実際に於けるや則ち動もすれば事情の全く相反するを見

(385) 同右。

睚眦反唇の恨、結で解けざるものあり、かの兩國に説くに此等

(386) 前掲『岡倉天心全集』第三卷、四七二頁。

の条理を以てするも、褒として充耳の如く嘗て意を留むること

(387) 中川未來著『明治日本の国粹主義思想とアジア』吉川弘文館、

を為さざるが若し、其故何ぞや、感情の相投合せざる、各々其心を晦まして条理の湮没に終るに非ずや、何をか感情の相投合せずといふ、支那の我を視るや、素より眇然たる海陬の小島と謂ひ、自大独尊、又其開化の舊くして我の資て以て益を受けし所なるを以て、後進少弱として之を遇せんとす、我が今日文明の淵源、由来深遠にしてその中世以後、支那に類する所あるも、其国家の性格特質を成す所以に至ては、固より独り自ら存立して、彼と全く相関らざる者あり、其始め彼に資る所も、自から国情に融化して倫理美術、有形無形の事皆更に特色を出して、金声して之を玉振し、人智の發達、能力の秀絶彼と同日の談にあらざるを致し、加ふるに地理の自然、東亜の要枢に拠り、一挙一動、大勢の軽重係る所、国土の編小を以て之を輕易すべきにあらざるは少しも省察を加へず、朝鮮に至ては其の毎々支那に隸属せられて、中朝として彼を崇ぶを以て、其我を視るの情、又大に支那の習に染み、而して所謂壬辰の役後、我を恨むの念今に絶たず、歲月積累、かの念をして消磨せしむるに足らずして、交渉の事態或は其敵愾を長じ、交際の敦睦容易に致すべからざるが若し、但だ其故特に感情の自恣に出で条理の根柢あるにあらず、条理に出る者は、之を説くに又条理を以てすべしと雖も、感情の自恣は之を如何ともすることなし、故に両国に説くに形勢の利害、百年の長策を以てし、以て従約同盟の事を促すも聴従実行は殆ど期すべからず、之を要するに俎豆の間、礼義の説以て東亜の爲めに大計を企画するは、望むべからざるの事、況や徳を以て之を懐柔するをや、其小なる者は忤れて服せず、其大なる者は以て己れに諛ふと為さん、之を為すこと如何、

実力を示すに在るのみ

夫れ我の実力を示し、国家の威権を立つれば大者には以て其輕易すべからざるの信用を起さしめ、小者には以て其力争すべからざるの畏敬を生ぜしむ、威信一たび立て、而る後貿易なり、通運なり、諸他国防の要務に於いて三国相通じて同盟締約するの利を説かば、是に於てか言庶くは聴かるべく、計庶くは行はるべし、今回朝鮮防殺事件の若きは実力を示し威信を立るに於て一好例として看ることを得べし、朝鮮の之が爲めに頗る畏縮の情を起し、支那の之が爲に頗る侮るべからざるの念を發して共に提携し、緩急相頼るべきを意ふ者蓋し或は是よりして殷ならん、則ち防殺事件、其大体に関係あると重大なりと謂ふべき歟

抑同盟従約の談未だ発せるにあらず、防殺事件は僅かに其以て談を發すべきの緒たるのみ、若し此機を利用して益其図を進むることを為さず、事の難を憚り、力を出すを避け、優柔不斷、復前日の如くならば、一着の功徒勞に帰して、其関係の散漫、依然として改まらじ、国運の前途に蒿目して興衰兩つながら意に経ざれば已む、苟くも然らずば、防殺事件を第一着として鱗然図を改め、其大なる者に対するも断然として強硬の手段を取り、其容るべきもの快く容れて疑はず、而して其執るべき所は固く執て下らず、寛嚴並び行ひ、恩威並び施し、自ら地歩を占めて、而して衡を隣邦に連ね、晁暭するに東亜諸邦立国の大義、共同の敵、共同の患あるを以てして、其をして懷に釈然として敢て遺忘せざらしめ、従前相疾の感、洒然として一洗せんことを期す、今後の務、此より喫緊急切なりとするはなきなり、防

殺事件の成果美と雖も継ぐの謀善からざれば、一片零碎の珠、以て大観を蔽るに足らず、蓋し大方針の立たざる、一部一時の成功、随て成せば随て廃す、篤く思を致さざるべけんや

大方針の立つ、国家威信の発揚、其責独り政府に在らず、野の士と雖も亦之あり、顧ふに野の之を望むや久し、政府の一たび方針を此に取らば、翕然として響應せざるを患へず、所謂立国論の時期斯に其の実効を見、対外の維新、斯に其全功を奏せん而して防殺事件誰か東亜同盟の階梯ならずと言ふや  
〔大阪朝日新聞、一八九三年六月十六日第一面。〕

(397) 中川、前掲註(三八七)、一六三頁。

(398) 中川、前掲註(三八七)、一六四頁。

(399) 中川、前掲註(三八七)、一六四〜一六六頁。

(400) 中川、前掲註(三八七)、一六七頁。

(401) 志賀重昂著「南洋時事」『志賀重昂全集』第三卷、志賀重昂全集刊行会、一九二七年。

(402) 色川、前掲註(二二三)、二〇頁。

(403) 色川、前掲註(二二三)、二〇〜二二頁。

(404) 三宅雪嶺著「真善美日本人」(政教社、一八九一年)『日本の名著三七 陸羯南 三宅雪嶺』中央公論社、一九七一年、二八四〜三三四頁。

(405) 中川、前掲註(三八七)、一四八頁。

(406) 岡倉古志郎、色川大吉対談「人間天心の肖像」岡倉古志郎、前掲註(八九)、二〇九頁。〔日本の名著三九 岡倉天心』中央公論社、一九七〇年、付録にて初出。〕

(407) 齋藤隆三著『岡倉天心』吉川弘文館、一九六〇年、一四六頁。

齋藤は、「We are one」が『東洋の覚醒』の書名の試案だったのではないかという見解を示しており、色川もそれに賛同している。

(色川、前掲註(二二三)、三八頁)